春秋選書

科

404
Ko38
ウ
404-Ko38ウ
1200500742157

小泉　丹著

×
複写

春秋社

始

404
K038

科學的教養

序

——改稿について——

私は、この書の前版を次のやうに書き出してゐます。

『世界が戰つてゐる。陸で、海で、空で。東で、西で、南で。而してわが日本、日本人は、その最も大きいものを戰つてゐる。

軍が戰つてゐる。國民が戰つてゐる。其は兵器戰である。體力戰である。知能戰である。精神力戰である。

かゝる時に、私は國民の科學的教養といふ問題をとり上げてペンを執る。』

、私はジャバのバンドンで開催の國際聯盟主催の東洋農村保健會議に出席してゐて、上海周圍の攻防が闌で、戰雲の渦動してゐるなかに歸つて來ました。漢口戰の終つた時、揚子江岸を廻はつて、九江で獨ソ開戰の電報を見ました。それから長江デルタ地域、張家口、新郷、徐州など砲火の後方戰地に行つたりしてゐました。やがて開戰。昭和十七年の夏に此を書き、翌年の夏にラバウル前線

國立圖書館
昭和 23.9.21
購入

まで敢行しました。戰局は正にその頂點にありました。其から三年。結果は哀れな敗戰です。判決は、戰ふべからざる戰を戰つたのである、といふのです。そして其から更に三年。吾々が眼で見て來、耳で聽いて來、現に見て居り、聽いてゐる現實。そしてまた、溯つて話されてゐる現實です。この改稿のペンをとりつゝ、この過ぎた年が顧みられて感慨のまことに深いものがあります。

紙型も災火に灰となり去つたこの書が、再び活字に組まれる機會に會したわけですが、國史に未曾有の大戰禍と大變革の六年の後のいま、少しも變更しない意圖のもとに、改稿のペンを運ぶこと、一これまた私には特殊な感をもたせます。いはんとする目標、いふところの事項等すべて變更の要を感じないのです。此を私かにわが國の爲めに悲しみます。そして、更めて舊稿を閲して、その時にも人にも便乘してゐなかつた自分を見て、いさゝか滿足を感じます。

こゝで敍べようとしたのは、こみ入つた論でも深い理でもなく、廣くあらゆる人達に通じ、あらゆる人達のものであるべしと多年信じて來たものを、丹念に談ずる、談話者であることが仕事でした。そして退屈される惧れを懸念して、雜談者の態度をとり、澤山の供覽品を陳べたのでした。

前版は、還曆を自祝する意圖で企てた、五部の自著刊行の一つとして、一氣に書いたものでした。遲筆の私には例外に仕事の運んだものでしたが、いま此を再閲して、その敍述の散漫にして、蕪雜

であつたことに冷汗を禁じ得ません。改稿の機會の與へられた幸福を痛感します。

改稿で、終りの二章を除却しました。舊稿のまゝでは餘談のやうであり、首尾一貫させる爲めには、倍量以上の紙面を必要とするからです。この仕事は他日を期して、諸君の淸覽を願ふことを約します。各章に相當の加除を行なひ、多くの節を書き更め、或は殆んど新たにし、氣分を更める爲めに文體をも更めました。要は、蛇足を去る一方に談話を丹念にし、そして氣分を和げたつもりです。

昭和二十三年六月

目次

起序……三
一　科學的——非科學的（一）……九
　科學的といふこと　正確といふこと　合理的といふこと　思考判斷の限界といふこと　實證、經驗のこと
二　科學的——非科學的（二）……六三
　見ること　考へること　能動的懷疑
三　科學的——非科學的（三）……八三
　呪の科學性

四　怪異談の科學性（一）……一〇五
怪異談のこと　耳袋とその筆者根岸守信の說明と復原　怪異談取扱ひの態度　怪異談
五　怪異談の科學性（二）……一三一
動物怪異談のこと　狐の怪、狐憑きのこと
六　怪異談の科學性（三）……一六一
亡魂、幽靈、化物屋敷などのこと　人魂、鬼火、怪火のこと
七　理窟・道、理・條理……一九三

科學的教養

起序

國民と科學に關していはねることは、專ら科學知識の普及、發達、生活の科學化といふ類のことやうです。こゝに科學的教養といふ名に於いていはんと欲するのは、これ等とは違ふものです。科學に關する教養とはことではありません。人間、國民の科學性をもつ教養、教養の科學性といふ意味です。

科學知識に限らず、あらゆる知識は、科學的思考によつて淘汰され、淨化された上で自分のものにされてゐるものであるべきである、といふのが私のいはんとするものです。この思考の態度と、其を經た知識の集積とが有機的な一團をなすものを、科學的教養といふ名で呼んでみたのです。

教養といふ文字は、人間が育ちあがる行爲と、その成果と、二通りの意味に解されます。自己の知識、德性を修練すること及びその結果としてその身に具へてゐるものです。私がいはんとするのもこれ等の兩者に亙つてのことです。

私たちの少青年の頃には修養といふ文字が盛んに行なはれました。松村介石氏の著作などが源であつたやうです。修養も教養も共に英語のカルチャーに當るもののやうです。カルチャーといふ語

の内容はよく知りませんが、修養と教養とは、その内容を異にして居り、前者は主として德性に、後者は主として知識に關していはれるやうに思はれます。なほまた文化といふ言葉もカルチャー、獨語のクルツールに當ります。人間の集團に於ける成員の教養の總體がその集團の文化でありませうから、同語であつてもよいわけでせう。更にカルチャーといふ語は栽培、育生といふ意味があり、此が原義でありませう。吾々の修養なり、教養なりは、農耕人、種育人が、その作物を培ひ、育て、やがて實らせるやうに、その德性、知性、知識、知能を培ひ、育て、實らせるといふ意味で、同じ内容であり、またその作業の全體及び結果であるといふことに於ても同じでありませう。

科學的教養といふものは、その過程、結果に於て科學的であることの意味です。その成員の科學的教養が集團の科學的文化を形成するといふこともいへるでせう。そして其は、文化の内容が科學であるといふのではなく、その性格が科學的であるといふことになります。

發達の過程といふ意味での科學的教養は、思考の科學的態度、科學的思考の習練といふ意味としてよいでせう。本書でいはんとするところは專らこの面にあります。

文化は其の成員の教養の總體であり、その成員の教養の深淺と優劣がその集團の性質、品格の指標となり、其の體面を高め、或は失墜させます。わが國は文化國家として更生するといふのがスローガンです。其には經濟、學藝、美術工藝、その他多くの部門的の實際の面があります。そして國

民として最も重要な課題としてその教養の向上と優化の問題のあることを私は痛感します。そして其の科學性といふことを重點として採り上げてゐるわけです。

私は先年來、「日本人のあたま」といふ課題の勉强を志して來ました。自然物、自然現象の認識と判斷、感覺と表現の上に現らはれてゐる、觀察、思考、推理、表現の態度、性格を討究しようとする仕事です。つまり日本人のあたまの科學性の問題です。この仕事は申すまでもなくまことに廣大なものです。廣く深い學識と精密、鋭利な頭腦をまたねばならぬ課題です。菲才、老境に入つた私輩の、而かも餘業として何程のことも出來さうもないことはいふまでありません。既に十年を閲しましたが、多數のテーマが腦裏に集積して、歩程はいささかも進みません。上代の文書、作品について資材的な考察を試みて、その略稿を數篇發表し、なほ數篇の用意が出來てゐるだけです。

私は科學振興の喚び聲の隆興に感應してこの仕事の意圖をいだいて、歩み出したのでしたが、事變、戰爭以來、「日本的科學」「日本科學」などといふ言論が現らはれるやうになつて、其に對する疑問が、一層この意圖を强めさせたのでありました。

日本的といふものの科學性、日本人のあたまの科學性といふべきものの實體が公正に討究され、其の批判が冷靜に徹行された上で、徒らなる自慰ではなしに、强い反省の上に立つて始めてこれ等の言論が爲さるべきであるといふのが私の考でありました。そして、私の此に關する考察、思索の

結果は至つて消極的なものでした。そして其がますます私の考を強めるのでありました。本書の前版は、このやうな日本の動きのなかで、このやうな頭で書かれたものでした。

便宜の爲めに、その當時の或る筆者の文を借ります。其には『今日の「科學的」といふことは、その內容としてヨーロッパ的近代科學の一面である所の、或る事象の捉へ方における、合理性とか、形式論理性とか、抽象性、分析性、實證性等といふことを含めて意味してゐる。そしてまた『日本的な物の考へ方、把へ方の特長は、第一に超論理的、直感的であり、第二に非抽象的卽ち具體的であり、直接對象自體に卽して物を考へ物を造り出してゆくことであり、第三に非分析的卽ち綜合的、全體的であるといはれてゐる。』とありました。簡單にいつて、私は、こゝにあげてある三つの點に就て、此が科學的なものであること、日本的なものであること、双方に同意し難いのです。

第一に、超論理的、直感的であるといふことは、日本人のあたまの一つの性格です。そして此は、そのまゝで科學に受け入れられるべきものではあり得ないでせう。筆者のいふ歐羅巴科學的なるものの道程を經て、始めて科學の域內のものとされるのでありませう。ファンタジーといふものの科學に於ける重要性を大きいものと考へられます。併し此が科學と結びつくには、その間に一段の歩程があることを必要とします。第二の、非抽象的卽ち具體的であり、直接對象自體に卽して物を考へ、物を造り出してゆく、といふことは、日本人のあたまの性格の全面をいつてゐるものとは私に

は考へられません。日本人のあたまには、卽實相的でない傾向が強いと私には思はれます。第三で、非分析的、綜合的といふ語は意味をなさぬと思はれます。綜合的、全體的といふことは、成員、部分の分析的の吟味があつてこその綜合、全體である筈です。思考、討究の序次は、綜合的なるものから部分的なるものに進んでもよく、部分から綜合に進んでもよく、そして、何れの途によるにしても、この循環を止まることなく續けるべきである、といふべきものと考へられます。思考の螺旋です。螺旋といつても蚊とり線香のやうな渦卷きではない、スプリング型に卷き上る螺旋です。

わが國人のあたまは大陸の文化から著しい影響を受けてゐます。大陸の古代民族のあたまのファンタジーには驚くべきものがあり、そしてまた一面に卽實相的なものをもつてゐました。その後者が天文、曆數の方面で偉大なものを作りあげ、本草學を作り上げましたが、ファンタジーの面は科學には生長しませんでした。天文はファンタジートの所產ではありません。

一　科學的——非科學的（一）

科學的といふこと
精確といふこと
合理的といふこと
思考判斷の限界といふこと
實證、經驗のこと

科學的であるとは如何なることか、また如何なることが非科學的か。共に明瞭であり、簡單であるやうに思へます。然るに決して左樣ではない、と私は考へるのです。科學的であると呼ばれてゐるものに、多くの非科學的なるものを見、また非科學的とされがちな考へ方に、寧ろ科學的であるとすべきものを往々見ると思ふのです。私がこの小書で述べようとする重點の一つが玆にあります。

先づ、科學性といふものの內容。此には、精確であること、合理的であること、立證可能であること等があげられます。私は更に一つの條項をあげます。適當な言葉でないが、限界的といつて置

きます。思考、判斷に限界が正當に劃されてゐることです。

知識の對象にはことともものがあり、其の實と理とがあり、吾々はそれ等を認識し判斷してゐるのです。そしてそれ等のすべてに於て、その資材と考へ方がその知識の性格を定めます。資材には、その數量とその一つ一つの格質に差別があり、考へ方には人により、立場により、場合によつて、守るべき限度があるべきであるとします。私がこゝで限界的といはんとするものです。此は認識の內容に就てもいはれねばならず、また正確、合理的、立證可能の各條件の一つ一つに於てもいはれねばならぬと思ふのです。そして更に、その限界を超えた界域に關しての態度に於ても、同樣な重要性の存在を認めるのです。

先づ精確といふこと。

精確といふことは知識と判斷に於ける第一義的のものです。そして此に先んじて、或は此に伴なつて周到といふことがいはれねばならぬと思はれます。精細な知識は、それが一つの對象について部分的のものであつても、それ自身大きい價値をもつものであり得ます。しかし其は、その對象に關して全般的な周到なものである上に加はつてゐる場合に、確實に價値の著大なものであつて、徒らなる部分的の精細は價値の小さいものであり得ます。ものでもことでも、記載、特に解說的の記

載には、この周到といふことが要求されます。

いさゝか突飛のやうですが、こゝで河童、川太郎といふものを話題として持出します。私は、年來、日本人のあたまの科學性といふ課題で仕事をやつて來ました。その間に、萬葉集の歌の疑問植物の同定、解釋の考察などから續いて、河童が對象の一つになつて來てゐるわけです。

河童の傳說と說話は、全國的に分布してゐて、この名を知らぬ人はありますまい。惡戲者(いたづらもの)として、愛嬌者として、國民に親しみのある怪物として、此に並ぶものはないでありませう。さてこの河童は、どんな形態と性格のもち主のものとされてゐるでせうか。地方によつて、相當に廣い範圍に違つたものになつてゐます。しかし此が現實の動物の何ものかに似たもの、其の化身、其の類族と考へられてゐることの多いのは確かです。そこに私の考察の對象になる所以があります。その考察には、先づ河童なるものの記述が求められます。私は此を德川時代の博物學書に求めて二つを得ました。貝原益軒の「大和本草」と野必大(平野必大)の「日本食鑑」です。

「大和本草」では卷十六、獸類の部の最後の項が罔兩で、その前に河童を揭げて、次のやうに書かれてゐます。

『河童 かはたらう(和品)處々の大河にあり、又池中にあり。五六歲の小兒の如く、村民奴僕の獨行する者、往々於河邊逢之、則精神昏冒すと云。此物好んで相抱きて角力。其身涎滑にして捕

へがたし。腥臭滿鼻、短刀にて欲刺不中。角力人を水中に引入れて殺すことあり。人に勝つことあたはざれば、沒水而見えず。其人忽恍惚として如夢而歸家。其症寒熱、頭痛、遍身疼痛、爪にて抓たるあと有之。此物人家に往々爲妖、種々怪異をなして人を惱す事あり。狐妖に似て其妖災猶甚し。云々。』

「本朝食鑑」には、卷七の鼈 須津保武 の項のうちに河童について次のやうに記してあります。

(原漢文)

『近時水邊ニ河童ト云者アリ、能ク人ヲ惑ハス。或ハ謂フ大鼈ノ化スル所ナリト。故ニ面醜ニシテ形童ノ如ク、肌膚ニ鱗魄多クシテ青黄色、頭上ニ凹處有リテ常ニ水ヲ貯フ。水有ル時ハ則多力制シ難シ、水無キ時ハ則之ヲ捕フ可シ、是ニ於テ、若シ人之ニ遇ヘハ、必ス先ヅ腕ヲ擧ゲ、拳ヲ掉ツテ急ニ彼ノ頭ヲ拆ツ時ハ則チ斃ル。傳ヘ聞ク、海西諸國此物多ク魅ヲ爲シテ邪魔人ヲ害ス。土人謂フ所ニヨレハ、大鼈ニ非スシテ老獺ノ化スル所也ト。云々。』

益軒先生は、更めていふまでもなくわが國博物學の鼻祖です、博學で、勤勉な執筆家でした。そして筑前侯に仕へてゐました。豐筑地方はわが國中で河童傳說の最も濃厚な地域です。吾々は、河童の博物學に關して、最も期待してよいのが益軒であるわけです。ところで、その記述は前掲の如くであつて、失望させるものでした。實在のものとしてゐるのであるが、形態に就て記するところ

殆んどなく、俚人の言說をそのまゝ書いてゐるに止まつてゐて、博物家的なものがありません。

「日本食鑑」は、十二卷、元祿八年の刊。水火土動植の食用品物の博物記、能毒記として、類書中で最も詳細なものです。著者平野必大は小野篤、傳は詳かでありませんが、代々醫と儒を以て仕へて法印に敍せられた者の出てゐる家柄で、必大は醫を以て官に仕へたといひます。その河童について記してゐるところは、「大和本草」よりは遙かに具體的になつてゐます。しかし一般俚人の口にするところ以外に出てゐません。

ところで、此等とは違つて、學の無い民間人が覺え書として作つたものに、細密で且つ整つてゐる河童の記載を見ることを得たのは愉快でした。「水虎說」といふ寫本に、筑後、豐前、豐後の町村で書かれた、河童の體驗の覺え書が七通採錄してあります。其等のうちに河童なるものの形態を要領よく記述してゐるのに感心させられるのがあります。その一つをあげます。

筑後國吉井町、長崎御廻米海川船請負人佐々木源吾といふ者が、河童と相撲をとつたことのあるといふ、筑後國生葉郡角間村の小市、當年三十二、同竹野郡德堂村の勝平、當年五十六の兩名を呼出して作つた覺え書です。小市の經驗は寛政十一未年十月十九日、勝平のは天明五巳年の夏で、源吾の書類は日附が巳二月となつてゐます。寛政十一年後の初めの巳年は文化六年で、その年とすれば、小市には經驗後十年、勝平には二十四年後のことになります。兩名とも事件の始末を細かに述

べて居り、終りに一つ書きの様式で河童の形態について書いてあります。その小市の分は次のやうです。

一　小市申候は、嶋渡瀬〔相撲をとつた場所〕の荒浪〔河童力士の名〕は背丈も外々よりも太く〔大きく〕、力強く、肉がゝりも餘程にて、足は左の足格別に太く、右は格別小く御座候。都てかつぱの恰好、面短く腰より下長く、胴短く、猿に似候段、言語一反は人の通に申候得共、返し候て何事に候哉と尋候得ば、只キと斗申、分り不申候由申候。

一　頭は毛打かふり居、テヘンには一向毛無之、眼ざし丸く、色合は覺不申候由申候。

一　身は裸にて、着用ものなしと申候。

一　頭に皿體のもの有之とは見へ不申候得共、テヘンは毛一向無御座候、相撲を取候内にも不絶水を打候。何樣のものにて水打候哉氣付不申候。

一　かつぱの色合、惣身三四間も隔り見候得ば澁紙の樣に赤黑く候得共、惣身猫毛の如く短き毛御座候て、塗付候樣成手當りにて、力を入握り候得共、猫抔の足握り候樣にて至極和はらかなるものに御座候。

一　惣身ぬめり候て取止がたき程に御座候。然共惣身の油共見へ不申、ぬれ候ても居不申、唯々早きものにて、何程投候とも倒不申、逆樣に取つて投候と覺候とも立居申候。

一　小市申候は、最初數十番取て中入候樣子にて、皆々辨當の樣成もの取出給〔食べ〕候體に見へ候處、私にも壹ツ持來り、此品はめつたに遣す事は難成候得共、其方へ遣すと申くれ候。其品鷄卵程のもの、だんご樣のものにて、又握飯共不見候得共、給べ候處至極宜敷風味のものに御座候段申候。

一　小市申候。腰より下も全身爪形入候にかん瘡の樣に相成、二三十日程も掛り漸癒候段申候。尤かつぱ

申候通齒のあか〔垢〕も毎々賣ひ付候得共右の日數相掛り候段申候。

一　足はあとは御座候得共、人間の足よりも長く御座候段申候……

一　手は人の手の樣なるなり形チにて御座候。猫抔の手を握り候樣に覺申候段申候。

勝平の分はやゝ簡單で小異があるのみです。筆錄者佐々木源吾の人物に就ては知る由もありませんが、私はこの覺え書に尊敬を拂ふのです。この聽取書は、唯の談話筆記ではなく、發問による調べの答辯を整頓したものであることは明らかで、誘導質問もあつたでありませう。そして源吾自身の頭腦を物語るものと考へます。兩人の口述には眞實でない點もあり、空虛な節々もあり、誤まつてゐるところもあるのは寧ろ當然であつて、其等の取捨に充分でなかつたといふ點は認められるのですが、右の程度まで整へあげた頭の働きは賞讃に値するものがあります。廻船請負人とあるから、顏役で常識家であつたでせう。そして中途半端の書物讀みなどのやうに捉はれたところがなくて、頭の練れてゐた人物であつたらうかと思はれます。またこの覺え書は上司からの下命などによつて作られたものではないらしく、自發的に、或は何かの機會に、自らの意向で爲されたものであるらしく思はれます。この點もその優れた頭腦を想はしめます。

ものでもことでもその記載、描寫、敍述で、數量的な性格が其の重要な條項になつてゐます。認

知、表現が數量的であることが科學的である一つの條件です。數字が出されると精確性が與へられます。「千仞の谷、萬丈の山」などといひますと、いかにも空虛で、千、萬といふ文字のあることが、却つて感じに逆作用までも起します。「頂は天に迫り」などといふのと「高きは一萬五千尺」と唱ふのとでは違つた印銘を與へます。「爾來幾裘葛」などといふよりは「指かゞなべて十あまり」「國を出てから十八年」といふ風にいへば、印銘が確かになります。

數字は精確性を與へるものですから、其は出來るだけ正しいものが、出來るだけ正しく使用されることが其の條件です。正しく使用されねばならぬといふ點に就て、吾々に身近かな惡例の一つが、わが國での年齢のいひ方に精確性が缺けてゐることです。前年の十二月末日生まれの者も年は二つ、その正月元日に生まれたのは一つといひます。此では實際に不都合であるので、年齢が條件になる場合には、特に滿幾歳といひ、または何年何月以後に生まれた者とか、何年何月から何年何月までの間に出生した者とかいふ風にいはねばなりません。數へ年も簡單で便利なこともあるでせうが、正月の雜煮餅を何度喰べた、門松を何度くゞつたといふ數字で、正月といふものの意味が大きかつた時期の遺産のやうにも思へます。このやうな數へ方は更めるべきでありませう。

數字で現らはされることが、科學的である一つの條件ですが、數字といふものはなかなかのくせものです。吾々は往々にして此に誤まられます。出された數字の力に押されて、しばしば判斷の精

確さを失なはされることがあります。また此を逆用して相手をトリックにかけることも出來るものです。

先年衆議院議員總選擧で著大な數の票を得た當選者がありました。此に就て新聞記事は、全國第一の得票者として書き立てました。併しこれだけで全國一といふことは、議員として、有權者の待望を得たことが全國無比であつたとは決していはれ得ないのでした。その當選者の選擧區は全國中で異常に有權者の員數の多い區なのです。得票の大小を比較する爲めには、投票數何票のうち何票が集まつたといふのであるべきなのです。立候補者の員數も考へに入れねばなりません。候補者一名當り平均得票の何倍に當るといふやうに計算してもよいでせう。たゞ得票の實數が大であるといふことは意味の少ないことなのです。但し景氣がよい、たいした人氣だといふ、お祭氣分の茶話ならばそれまでです。しかしこれで、日本一の人氣だといふ茶話をするならば、その人達の頭は確かでありません。當選者側で、全國一と稱して宣傳に使へば、多くの人達がそのトリックにひつかゝります。

「法華經」の「化城諭品第七」に

『譬へば三千大千世界の所有の地種を、假使人有りて磨りて以て墨と爲し、東方千の國土を過ぎて乃ち一點を下さん。大いさ微塵の如し。又千の國土を過ぎて復た一點を下さん。是の如く展轉

して地種の墨を盡くさんが如き』云々

『是の人の經る所の國土の者は點ぜるとぜざるとを、盡く抹して塵と爲して、一塵を一劫とせん。彼の佛の滅度より已來復た是の數に過ぎざること無量無邊百千萬億阿僧祇劫なり』云々

これは『彼の佛の滅度より已來甚だ大いに久遠なり』といふのの説明になつてゐるのです。文面には數字はあまり出てゐませんが、こゝには大層な數字が含まれてゐるのです。三千大千世界といふのは、この世界を一千合せて小千世界とし、小千世界を一千集めたのが中千世界、其が一千集まつたのが大千世界、其が三つ集まつた世界といふのです。つまり千の三乘の三倍の數の世界です。阿僧祇といふのは一の後に零を五十一だけ列べた數とされてゐます。其の百千萬億倍といふのです。百千萬億は實數でありませんから、吾々の頭に實際的に役に立つ數字ではありません。しかし、前文では、吾々の頭に、ごく親密な千といふ簡單な數字を用ひて居り、後文では阿僧祇といふ數字で表らはされる單位を用ひて、吾々の思慮分別の及ばぬ長い時間といふ印銘を強く生じさせてゐる手法は、まことに驚嘆に値するものです。この場合、トリックと申しては甚だ非禮です。まことに巧みな方便と申してよいでせう。

前に出來るだけ正しい數字といふ文字を使ひました。出來るだけ精しい數字とは書きませんでした。精しいといふことは正しさを加へることである場合もあります。より精しいが故により正しい場合もあります。しかし數字が細かいといふことが正しさを與へない場合も多くあります。數字がある程度まで細かでないことが反つて正しさをもつ場合も亦少なくないのです。數字はその場合により、その對象によつて、それぞれ適當な方法によつて計つて、適當な精しさの數字を出すのが正しいのです。一粍まで刻んである竹製の物差で測つた場合には、一粍の數字までが確かで、其以下は不確かなのです。其以下の確かな數字を得たい時には吾々は普通に遊尺(ノニウス)といふものついたのを使用します。そして其から下一桁の數字を出します。其以下は特殊な器械で、其に修練した人だけが出來るのです。知れ切つたことである筈ですが、細かい數字を出して、往々に輕率なことをします。

顯微鏡下に見ゆる物の大きさを測るには、普通ミクロメーターといふものを使用します。此には接眼ミクロメーターと接物ミクロメーターと二つが入用です。前者は硝子圓板の正中に一粍を十分一目に刻んだもので、其を接眼鏡に入れて見ると、視野にその度盛りが擴大されて見えます。接物ミクロメーターといふのは、載物硝子にやはり一粍を十分の一目に刻んだものです。接眼ミクロメーターを裝置して、接物ミクロメーターを見ると、後者の一刻みが、接眼ミクロメーターの幾刻みかに當つて見えます。そこで算術計算で接眼ミクロメーターの一目が何程の長さかといふことが知

られ、此にはある程度まで確かな數字が得られます。豫め其を決めて置いて、目的の物の大きさを測るには、先づミクロメーターの刻みで數字を出し、其に前記の數字を乘じて、その商を大きさとして出すのです。こゝまで來ると、その數字は相當に確かでないものになつてゐます。確かなことは望まれないのです。それ故、その數字、卽ち商の數字の終りは適當なところで切捨てねばなりません。寄生原生動物などの大きさの記載が、その數字が不當に細かく書かれてゐる場合があつて、無用な數字の一例になります。

運動競技の審判者がレコードをとります。百メートル競走といふやうな場合には極めて小さい數字がものをいひます。私はスポーツに就てまるで無知ですが、此はストップウォッチを用ひて測るのでせう。一秒といふ時間は相當長い時間です。秒以下では、測者により、場合々々によつて相當の振れがある筈です。つまり或るところ以下は不確かです。前の顯微鏡下の計測のやうな場合には、不確なところは切捨てて正確性を保持するのですが、競技の場合などでは此が許されません。世界的のレコードといふやうな場合には、順位の定まる差は至つて小さいのですから、是非とも細かい數字を出さねばなりません。此には活動寫眞の應用などもあるやうですが、普通は數人が測つて平均數を出すのでせう。ところでこの平均數といふものがなかなかのくせものです。二人で測つた數の和の二分の一でも、五人で測つたのでも、十人で測つたのでも、平均數といはれます。同じ平均

數でもその確かさには大きい差違があります。

時間の長さのやうな場合は、對象が同一で、測る人が違ふために差が出るのですが、對象が多數である場合には、問題はまた別です。多數でもその全數が計測された場合には、假りにその測定法が確かで、測定者が誠實、練達であつたとすれば、その平均數は、その對象群に關しては、確かな數字で、價値の高い、或は完全な數字であり得ます。しかし多數或は極めて多數の對象のうちから、その一部をとつて測定して、その結果から、その全體或はその大體のことをいはんとする場合、卽ちサムプル・テストの場合には、そのとられた對象の數と性質によつて、その平均數の價値は著しく違つてきます。

例へば、日本人の身長といふ課題で、年齡に上下の限界を立てゝ、成年に限つていはんとする場合に、その計測の對象としては、多くの地域、あらゆる生活の樣式のもの、つまり地域的、地理的、社會的のあらゆる狀態に於けるものを集めねばならず、且つそれ等の代表的なものが網羅され、それぞれ適當な員數がとられて居らねばなりません。南方の者が少なく、北方のものが多いとか、都會生活者が多くて山林生活者が少ないとか、產業勞務者が多くて漁業者が少ないとかいふことがあつては、結果は不確かです。そしてその多い少ないといふことは、それぞれの全員數との關係に於ていはれねばなりません。なほまた、以上の點に於てその對象の集め方が適正であつたとしても、

各部類の員數、從つて總員數の少ない場合には、その平均數は價値が少ないわけです。このやうに平均數には、その確かさ、價値に大小があり、サムプル・テスト或は一つ或は少數の對象群の結果から全體或は大體を推言しようといふ場合には、計出された平均數が正しいこともあり、また價値が少なく、或は無價値であることもあるわけです。

統計學では、このやうな點を明らかにする爲めに、平均數には平均誤差といふものを計算して其を添へることになつてゐます。此は、扱つた員數の大小から來る不確かさを表らはすので、この數字が零ならば絶對に確かであり、此が大きいほど不確かさが大きいわけなのです。平均數をM、平均誤差をmとし、M±m として表らはすのです。實例を出しますと、松村瞭氏が日本人、朝鮮人、アイヌ人の成人の身長を測つた結果が、次のやうに出されてゐます。

日本人　M ± m = 161.98 ± 0.05

朝鮮人　M ± m = 161.43 ± 0.14

アイヌ人　M ± m = 156.99 ± 0.39

こゝで誤差が朝鮮人で日本人の三倍に近く、アイヌ人で約八倍になつてゐます。つまりこれ等の平均數は、平均誤差の最も小さい日本人で確かさが最も高く、朝鮮では此に劣り、アイヌ人で更に劣ることが表らはされてゐるのです。この計測で用ひられた員數をみますと、日本人では五九七〇

人、朝鮮人では五五〇人、アイヌ人では九一人です。員數の大小と確かさの高低の關係が此でよく知られます。

M±mの數字を、實際の上でどういふ數字として考へるのかと申すと、眞の平均値はmの3倍をMに加へた數字と、其を減じた數字の間に上下するものと考へるのです。即ち日本人の場合には

$$161.98 - 3 \times 0.05 = 161.83$$

$$161.98 + 3 \times 0.05 = 162.13$$

で一六一・八三と一六二・一三の間にあつて、一六一・九八といふ平均數には〇・三の上下を考へねばならぬといふのです。朝鮮では其が〇・八四、アイヌ人では二・三四といふことになります。

右の平均數の上で、日本人が朝鮮人よりも身長が大きいといふことが表らはれてゐます。此は松村氏が計測した日本人と朝鮮人でさうであるといふことであつて、此によつて、日本人は朝鮮人よりも全體として身長が大であるといつてよいか如何か。此は双方の數字の確かさの關係によつて定められることです。統計學では、この場合にその差が有意義なものであるか無意義であるかを定める爲の計算式が用ひられます。即ち

$$\frac{M_1 \sim M_2}{\sqrt{m_1^2 + m_2^2}}$$

の式で計算して、この商が3以上であれば有意義、以下であれば無意義であることにするのです。松村氏の數字を扱つて見ますと、

$$\frac{161.98-161.43}{\sqrt{0.05^2+0.14^2}}=\frac{0.55}{0.148}=3.7$$

となつて、この比較の結果は有意義と考へてよいことになります。アイヌ人と日本人の比較では、分子が4.99で、分母が0.393となり、商として12.7といふ大きい數字が出て、これもまた有意義と考へられます。朝鮮人との比較の場合には、差は小さいが、員數が適當に多いので有意義になつて居り、アイヌ人との比較の場合には、員數は少ないが、平均數で差が大きいから有意義になつてゐるのです。

比較の無意義であつた私の經驗の例を出して置きます。人種學で頭指數といふものを取扱ひます。頭を天邊から見た形が、人種の一つの特徴とされてゐるのです。前後に長いのがあり、圓形に近いのがあるのです。それで前後徑の數字で左右徑の數字を百倍した數字を除して得た數字で、其を表らはすのが頭指數です。つまり此が一〇〇に近いほど圓に近いのです。私はシナ中部で、三歳から七〇歳までの男女一一七八名に就て此の計測をやりました。その結果の一部を出せば次のやうです。

	員數	M ± m
女	三八三	80.87 ± 0.21
男	七八五	81.10 ± 0.14
計	一一七八	81.04 ± 0.12

員數が多いほど平均誤差が少ないことがわかります。こゝで男女の間で 0.23 といふ差が出てゐます。そこで私の對象で、その員數の點から見て、男女の間に差があると見ることが許されるか、或はさう見てはならないのか。此を前掲の式に嵌めて計算すると、

$$\frac{81.10-80.87}{\sqrt{0.14^2+0.21^2}}=\frac{0.23}{0.252}$$

で、3以下です。即ち無意義といふことがわかり、私が計測した員數で、この平均數の上の差では、男女の間に差があるといふことはいへないのです。

平均數と同じことが、割合數、百分率數(%)、その比較に就て注意されねばなりません。平均數について、思はず長談義をしてしまひましたから、こゝでは二三の雜談にとゞめます。

甲の學校で上級校の入學試驗を五人受驗して三人合格し、乙の學校では二十人受驗して十人合格したとします。百分率を計算すれば六〇%と五〇%です。この場合、甲校では、乙校よりも一〇%

高率だといひたい氣持になります。或はさうだと決めてしまつて氣持をよくします。さうだと思ふ人も多くあります。さういつて相手をトリックにかけることも出來ます。このやうな小さい數字の場合の上下は決められず、また決めようとすべきではないのです。なほこのやうな場合には、員數の上だけでなく、その内容に條件があり得ます。或る校では受驗校の選擇を指導します。或る校では放任して置きます。或る校の受驗者は自省し、他の校の者は猪突します。天下の秀才といふ看板の高校の出身者が入學率で首位を占めることが無いのが例のやうですが、當然なのです。

區長選擧で、棄權者が約八割あつて、投票數は有權者數の約二割しかなかつたとします。この場合、五分の一の少數の票數では區民の意志は表らはれて居らぬ、といふことが考へられます。しかし必らずしもさうではあり得ません。區民には區長といふものに對して關心をもたないのが多數にあります。投票數の少ないといふことが、その明らかな證據です。そこで投票した二割が、少數の有關心者の投票であるとすれば、その結果は、立派に區民の意志を表らはしてゐると見ることが出來ます。またその投票者は立候補者の何かの緣故者、關係者のみであつたとすれば、票數の價値は反對なものである筈です。即ち票數が少ないから價値が小さいとだけはいはれないのであつて、或は意味の充分にあるものであり、また全く或は殆んど意味のないものでもあり得るわけです。

近年はなくなりましたが、學級の席次、特に卒業席次といふものが大層に學生自身や父兄の頭を

支配したものでした。世間でも兎角首席といふものを珍重して、就職に、或はまた一生の歩調に少なからず影響し、また方面によつては現實に此がものをいふのが事實であつたのですから、無理のないことでもあつたでせう。私の知つてゐる、後に大學の教授になつた仁は、首席卒業を目ざしたが、どうも拔き得ないのが一人頑張つてゐました。二番で卒業するか、思ひ切つて一年試驗を延ばして、翌年首席で卒業するかといふ、いはゞディレンマに惱んだ末に、後者を選びました。ところで一番だ二番だといつても、いろいろのがあるわけです。此は同級、同輩の數と性質と對照の上でのもので、優秀ぞろひの級の一番もあり、凡庸低能ぞろひの級の一番もあります。百數十人の首席もあれば、たつた二三人の級の首席もあります。たつた數人だといつても優秀ぞろひなら首席はやつぱり良いわけです。

頗る可笑しいのは入學試驗時節に聞く話です。入學試驗も最近は事情が變つて來ました。中等學校では自由競爭、實力競爭が少なくなつて來ました。高等學校、專門學校の入學試驗もだいぶ樣子が變つて、一言にいへば樂になつたやうです。――結構なことか、結構でないことか、興味のある問題ですが。さて、その競爭の盛んであつた頃に、あちこちで聞かれた話です。五題のうち四題は出來たから八〇點はとれた、及第に間違なし、などといつてゐます。其が不合格になると、怪しからぬ、情實で低點者を入れたに相違ない、などと息まくのがあります。問題がやさしくて受驗者が

大多數滿點に近かつたら、八〇點や八五點とつたところで、たいしたことはない筈なのです。

首席の話に因んで、其が注意深く決定せられた話、そして此に伴なつた美談として傳へてゐる興味の深い記錄があります。昔は戰場で一番首といふものが極めて尊重されました。合戰が始まつて敵の首をあげて本陣に持ち返る、その先頭であることの名譽です。この一番首に就ての逸話です。

伊藤梅宇の「見聞談叢」の第五卷（この卷は熊澤詩庵の武將感狀記から抄出した、文錄、慶長年間の武士の言行を錄したもの）に次の項があります。

『大阪の戰に、木村長門守重成が家來、松浦彌右衛門、堀田圖書勝嘉が家來淺部清兵衛、二人共に敵を斬りて首をとりたり。秀頼公の右筆白井甚右衛門その日首帳の役たり。松浦はやく首をもち來りて、一番と記し玉へといふ。白井首一つ松浦彌右衛門と斗書きて、一番としるさず。松浦いかれども白井きゝいれず。しかる處へ、淺部又首一つもち來る。白井せんぎするに、淺部が首をとりし場、松浦よりくび帳の場へ遠し。くびをとりし時刻は松浦より殊外はやし。其證據分明なる故、淺部を一としるせり。』

祐筆白井甚右衛門は、首帳の場への到着順の一番二番ではなく、現場との距離、そこからの所要時間といふ大切な條件を考慮に加へて、より精確な判斷を下したといふのです。此と同一事實が貝原益軒の「朝野雜載」に出てゐて、少しく違つてゐます。

『大阪多の陣に、城中の兵士松浦彌左衛門、淺部清兵衛出て戰ひしが、淺部は先懸して一番に首を取たり。

松浦も首を取りて、馬をはやめ城中へ入る。秀頼の祐筆白井甚右衛門に、一番首のよし記すべしといへども、白井是をしるさず、松浦怒けるが、暫有て淺部首を持來り、吾今日の先懸して、一番首を取しか共、歩行故遲く歸りたりといへば、白井松浦に向て云、一番首は必論有、論定て是を記すが祐筆の故習なり。事急にして甲乙を決し難しとて、首二ツと記し、兩人の名をぞ書付ける。』

茲では、松浦は馬をはやめ、淺部は徒歩で來たことになつてゐます。白井は移動速度を條件としたといふのです。前話では淺部を一番首としたとなつてゐますが、茲ではさうとは決定せずして、「一番首は必ず論あり、論定つてから是を記す」といふので、假記にしたことになつてゐます。混雜の場合だから、此が周到精確な處置でせう。また此が「祐筆の故習なり」であつて、このやうな故習があつたとすれば、戰場の作法として立派なものであつたわけです。

一番首の話はなほ外にもあります。白井祐筆は現場で注意を拂つたのですが、既に合戰、切合ひの始まつた際になつて――今から見ればのんびりした光景ではあつたでせうが――正しい吟味が出來るとは限りません。その不確實な場合に、功勞を爭つて抗辯すれば爭論の生ずるのは自然です。そこに武士道あつて互にその功をゆづり、一番首以上の名を遺したといふ陣中美談が生まれてゐます。次の二つがそれです。一つは三浦梅園の「梅園叢書」に、一つは前記の「朝野雜載」に載するところです。

『加賀利長松山の城を陷れたまひけるに、利長の小姓大習藤藏年十六なりしが、先登して首をとる。雨森

彦太郎これにつづいて城に入り、同じく首をとり、早く馳せ歸りけるに、利長祐筆に命じて一番首と記さしめ給ふ。彦太郎辯謝して「否、一番首は大晉藤藏にて候。某はその次にて候」とぞ申しける。一番首をとりたるよりも遙にまさりて殊勝なり。武士は誠にかくこそありたけれ。』

『元和元年五月六日の合戰に、松平陸奥守正宗の軍士蒲倉仁兵衛と云者、首を捕て正宗の本陣へ一番に持來る。又歩行の士も首を提て來れり。蒲倉是をみて、渠が取所一番首也。某は馬にてはせ來るに依て早し、かの士は歩行故に遲れ參れり。敵を討し時刻においては一番の高名なるべし。某は二番首也と申ければ、歩行の士是を聞て、假令馬上にても、歩行にても、本陣に來る事一番なるは、夫ぞ實の一番ならんと申。正宗大に感じ、馬上の一番首は蒲倉仁兵衛、歩行立の一番首は汝なりとて、兩人同じ樣に褒美せられけるが、義士のふるまひかくあれとて、皆人感じけると也。』

馬上の一番首、歩行士の一番首といふ、正宗の裁きはなかなか手に入つてゐて、抜けめがありません。

數字には、單獨にそれだけでは不充分或は意味がなく、他の種類の數字と伴なつて始めて、役に立つものが多くあります。そのやうにいくつかの數字を併せて考へるべき對象を、たゞ一つの種類の數字だけで考へる誤りをしてゐる場合が少なくありません。

近頃は改まつて來ましたが、體重のことがこの一例になつてゐました。體重をその實數だけでいつて、彼は二十四貫ある、彼女は十貫しかないといふ風で、通用してゐました。食肉を目的とする

牛や豚の場合には、これでも宜しいでせう。しかし人間の發育、保健狀態に關して體重をいふ場合には、此ではいけません。身長との相關の上でいはねば意味がないのです。身長一糎當り幾瓩であるといふやうにいはねばならぬのです。少し詳しいことをいへば、或る一人の體重が幾瓩であるが、日本人として、平均以上なのであらうか、以下なのであらうかといふ場合に、普通は男女別、年齢別、身別の日本人平均體重表と比較していふのですが、其では不確かなのであつて、男女別、年齢別、身長別の表で比較せねばならぬのです。例へば十七歳級の男子であれば、身長一四四糎級なら、體重平均四〇・二瓩であるが、身長一八八糎級の者では六三・九瓩といふ平均數字が出てゐるのです。身長からいへば、一五三糎の者でも、體重平均が、十四歳級では四二・〇瓩、十七歳級では四六・二瓩です。即ち比較すべき原表は一列のものではなく、縱と横のある表なのです。

暑い、涼しい、寒いといふ場合に、氣溫の度數をいひます。ところで、人間の寒溫の感じは、氣溫の上下だけによるものではありません。濕度の高低が大きく影響します。そして空氣の流動の具合が關係します。これ等の三つの條件が合して、吾々の寒暑の感じになるのです。むし暑いとか、底冷えがするとかが、濕度の如何によつて生じます。それ故に、工場などの衞生管理では、室溫だけではなく、三者を併せて調節せねばならないのです。

熱帶地が暑いといふことが、簡單に氣溫の高いといふことのやうに考へられがちです。しかしそ

れでは熱帶の暑さの知識にはなつてゐないのです。いま比律賓、馬來から以南、ビルマを除いて、普通にいふ南洋に就てみると、月平均溫度の數字で、最高の月の溫度が、マニラで最も高くて二八・四度で、シンガポール、彼南、サンダカン、クーパンで、それぞれ二七・〇、二七・一、二七・三、二七・四で、ずつと低く、ザムボアンガ、メダン、バリクパパン、マカッサル、バタビア等では二六度、ブイテンゾルグでは二五・三度です。わが國では如何かと見るに、臺北がマニラよりも〇・一度低いだけの二八・三度、東京が二五・四度、鹿兒島で二六・九度です。つまりマニラが臺北と同樣で、其と同程度なのは他にはなく、鹿兒島よりも〇・五度位高いのが多く、ブイテンゾルグは東京と同じ位なのです。卽ち南洋諸地は暑いといつても、寒暖計の示す數字は別段高くはないのです。然らば熱帶の氣溫が溫帶と違ふのは、高溫の時が長いことです。月平均の最高溫と最低溫の差を年較差といひますが、東京では、最低が三・〇度ですから、其が二二・四度、鹿兒島で二〇・二度、臺北で一三・二度です。ところで南洋では、マニラで三・六度、クーパンで二・四度、メダンで二・一度、シンガポールとサンダカンで一・五度、彼南で一・三度、マカッサルで一・二度、バタビアで一・〇度、ザムボアンガ、バリクパパンで〇・六度です。熱帶の氣溫で着目すべきものは、溫度が高いといふのでなく、年較差が少ない、つまり年中あまり變らない、言ひ換へれば、四季が無いこと、卽ち常夏であることです。臺灣を常夏の島などと普通にいひますが、非常識さが甚だをか

しいのです。臺灣では南方に行つても四季はあります。山地の秋などは實に淸涼で心地よく、臺北の如きは、時には近所の低山に雪が降り、火鉢のほしい日もしばしばあつて、雜貨店では置炬燵を賣つてゐるといふ具合です。

次に合理的といふこと。

合理的といふことは、適當な說明が可能といふことといつてよいでせう。私は理に合ふといふことと、そして理が通るといふことといひたいと思ひます。

汚穢な溜水や流れの底の淤泥などを棒でつゝくとブクブクと泡が出ます。其をフラスコに捕集して來て、マッチで點火すると、淡い色に燃えます。沼氣といつてメタン瓦斯があるのです。その光は光輝を放たず、螢光に類する靑味を帶びた淡いものです。さてまた、人魂（ひとだま）、鬼火などと呼ばれて、河上や池邊に火の玉が遊動するといふ話があります。さまざまの口傳になつて居り、いろいろの樣式で文にも澤山に書かれてゐます。そしてこれ等を昔の人達は、人間の魂魄とか、狐のもやす火であるとか、さまざまの怪異なものとして來てゐたのでした。やがて此を生物學、物理學、化學で說明しようとするやうになつて來て、與へられた說明の一つが、此を沼氣であらうとするのです。そして多くの人達がそれで說明されたと思つてゐるやうです。この考へ方は、人魂だの鬼火だのとい

はれるものは、水邊に現らはれる。水邊からは沼氣が出る。沼氣は螢の光のやう淡い色で燃え、其は人魂といはれるものの光と似てゐる、といふのであつて、この考へにはたしかに理があります。ところで、沼氣はそれ自身だけで發火はしません、點火されて燃えるのです。人魂や鬼火が沼氣であるとして、其を燃やす自然界のマッチに當るものはどこにあるのか。この説明では理が通つて居らぬのです。人魂を燐光だとする説明もあります。此も理が通らぬやうです。なほこれらの怪異談は、後の章で更めて扱ひます。

こゝで理といふのは、いはゞ一つの説明です。一々の對象の理解、判斷に與へられる理は、一つとは限りません。いろいろの説明が可能であつて、それが何れも理であるとされ得ます。そしてそれ等のうちには互に異なり、或は逆であるものもあり得ます。一理を以て斷ずる勿れ、といふのが理解と判斷の要諦です。

「列子」（湯問第五）に次の一話があります。

『孔子來游し、兩小兒の辯鬪するを見て、その故を問ふ。一兒曰く、我以へらく、日初めて出づる時は人を去ること近くして、日中の時は遠しと。一兒は以へらく、日初めて出づる時は遠くして、日中の時は近しと。一兒曰く、日初めて出づる時は、大きさ車蓋の如く、日中に及びては則ち盤盂の如し。これ遠き者小にして、近き者大なるが爲めならずや。一兒曰く、日初めて出づる

時は、則ち滄々涼々たり。その日中に及びては、湯を探るが如し。これ近き者熱くして、遠き者涼しきが爲ならずや。孔子決する能はず。兩小兒笑つて曰く、孰れか汝を多知と爲すやと。』

この節は、遠近の是非は一理を以て定めることが出來ぬ、といふ説話だと註してあります。太陽に遠近はないと知れた今では、逆に、日出と日沒に太陽の大きく見ゆるのは何故か、といふ課題になつてゐます。そして此にもさまざまの説明が與へられてゐますが、他を排して、それだけが眞の説明だとされるものは無いやうです。恐らく多くの理由があるのでせう。そして時と人の異なるに從つて同一でもないのでありませう。兎に角、一理を以ては斷じ得ないやうです。「列子」では「貴方を世間では物ごとのわかつた仁と申すのですが。さういふのは誰なんですか」と、孔子がこさかしい小童輩に彌次られたことになつてゐますが。双方とも理があるので、この遠近問題に自身の定見をもつてゐなかつた孔子は、何れか一人からだけ聞いたら其に同意したかも知れません。

私の同僚が、試驗で一人の學生に落第點を與へました。その友人達が歎願に行き、家庭の狀態などを説明して、親が氣の毒であるから、是非考へて貰ひたいと懇談しました。其に對する答の內容を、本人から聞かされたのですが、其は、試驗の結果が惡いといふ外に、心掛けがよくないといふ點が見のがせない。落第させるのはその心掛けを治す爲めである。このまゝの心掛けでは、それこそ親に氣の毒である。落第させるのは親の幸福を考へるからのことである、といふのでした。合理

的なことに於て教授の方が強味があるやうです。しかし、その學生が、及第さして貰つても、落第させられたと同樣に心掛けを更めるといへば、その方の理も通るわけです。但しそのやうな約束といふものは口さきだけ、或はその時だけのことで、心掛けは落第でもさせねば治らぬものだといふ、も一つの理を、教授が年來の經驗で把握してゐる場合には、理が通つてゐて、友人等は勝てないわけです。

橘南谿の「東遊記」卷一に、「竹根化蝉」と題する二節があります。その終りのところが、『近江の人の語りしは、長濱にて、山の芋を掘來り料理しけるに、中に釣針のありしことあり、其掘りし所、昔は湖の傍なりし所といへば、此薯蕷はうなぎの變じたること疑なしといへり。其物語りし人は眞實の人なりしが、いかゞありしや』とあります。私は、山の芋が鰻になるといふやうに記憶するのですが、こゝでは鰻が山の芋になることになつてゐます。兎に角山の芋と鰻の間に變換があることをいつてゐるのです。その山の芋から釣鉤が出る、といふことはよくいはれたことらしく、鉤といふのは、其に似た堅い條片でありませう。こゝでは其が出たといふ一つの材料から、鰻であつたのだらう、とあつさり考へてしまふのではなく、場所が長濱であるので、昔は湖水であつたといふ條件を合せて、其を助ける材料にしてゐるのです。即ち思考に一つの條件を附したのです。しか

しこゝではその條件に問題があります。長濱が湖水であつたのは舊い以前のことです。父親や祖父の時代ではない筈です。さすれば、その山の芋になつた鰻は頗る舊い時代の鰻であつて、その山の芋は頗る老年の山の芋でなくてはなりません。山の芋を掘つて來るほどの人であれば、その成長の速度は大體承知してゐる筈でありませうに。

「物類稱呼」は、安永四年に刊行された越谷吾山の編著です。諸國方言集として甚だ貴重な書であり、そして方言以外にも種々の資料を提供して呉れるものです。此の卷二、動物の章、黄顙魚(ぎぎ)の項に、『今按に、享保十三年戊申ノ秋、東國所々洪水せしころより此魚うせたり。而して後鯰(なまづ)と云魚東國に生ず、うたがふらくはぎゞ鯰に變じたる物歟』と出てゐます。赤松宗旦の「利根川圖志」では印旛沼の土産を記してゐる項で『ギギ……ナマヅに似て小さし。……此魚近年至つて少なし』といひ、「物類稱呼」の前掲の文を引いた上で、『實にさもと思はれてをかしし』と結んでゐます。ギギと鯰の似てゐる程度は別として、各地でギギが減じて鯰が增したといふ事實があり、ギギが鯰に變つたのであらうといふことを考へ、丁度その頃に諸國にあつて種々の災害をした洪水を、其に結びつけて考へてゐるのであつて、當時の考へ方としては、さもあつたらうと思はれます。特に吾山が、『疑ふらくは』といつてゐるのは適切です。宗旦が『實にさもと思はれてをかし』といふのも味のある書き方です。

こゝで合理的といふ、その理といふものに就て、考へを進めねばなりません。理としては、先づ數理的の理があげられます。此こそは不動の理です。學的には必らずしも左樣ではないやうですが、普通の學問の範圍で、特に國民生活の實際の上では、絶對の眞と認めてよいでせう。それ以外の理といふべきものは、自然科學的の理と、形而上學的の理とに分けられませう。言葉が適當でないであらうが、素人として許して貰ひます。また其等の中間のもののあるのは勿論です。自然科學に於て根本的なる理は、物理學、化學の教ふるものです。そこで數學、物理學、化學に含まれる理が、各人自らの思考、判斷に、合理、不合理を分ける主要な規矩、物差である筈です。

その本質からいつて、正しい理は一つあつて、二つ以上あるべき筈のものでありません。しかし思考判斷の規矩としての實際的の理といふものは、その場合、その人によつて、それぞれ適當な範圍の差異が、正しいものとして認められてよいわけです。平行線は無限の遠距離に於て交はるとしても、平行線は決して相交はらぬものとしても、差支へはないわけです。原子核の轉換によつて水銀から金が出來るといふ規矩があり、一方には水銀は金にならぬにいふ物差もあつてもよい筈です。地球の自轉の軸は固定してゐない。其自身が廻轉してゐて、獨樂の心棒のやうな動きをしてゐる、また地球の形は眞の圓球ではなく、複雜な歪んだ形をしてゐるといふのが正しいのですが、人によ

り、また場合によつては、地球は圓球であつて、その不動の軸を中心としてゐると考へて、其を理として、物差に用ひることが敢て間違つてはゐないのです。

萬人に最も身近かで、直接で、また其の大小、良不良がその者の幸福と安全を支配するものは、身體の機能に關する知識でありませう。そこでそれ等の條件として、正確と豐富とが實際生活上に要求されるわけですが、そこに多くの重要な課題があります。合理性といふことに就て、こゝで一言して置くべきものがあります。

生體の機能は、窮極に於て物理化學的の作用に歸着するものといつてよいでせう。この意味に於て、物理化學上の法則、物理化學の理が、生體の機能の法則、その理であるといはれませう。しかし吾々の知つてゐる法則、理はそのまゝではこゝで通用しません。多くの現象に於て、そこで大體そのまゝ通じます。消化、代謝の際の變化、過程の如きです。しかし動物體の機能は複雜です。一一の現象に關與するものが多數にあります。そしてそれ等の間の關係は特殊に複雜です。從つて二つの條件がある場合に、それ等が作用した結果は簡單に物理化學の法則、理には必らずしも從ひません。例へば、2×2=4 といふ風であるとは限りません。a+b=3 であつたり、a+b=5 であつたりするといふ風です。こゝに生理機能を考へ、判斷する場合の重大な特殊な條件があります。

ヴィタミン缺乏といふことが多くいはれ、ヴィタミン劑の飲用が普及してゐます。恐らく藥舗の扱品の主要なものになつてゐるでせう。そこで問題は、ヴィタミン劑の服用がヴィタミン缺乏といふその體の現象を醫してゐるでせうか。ライターのベンヂンが無くなつたから其を入れる、といふ風に、簡單に考へられてゐることはないでせうか。この醬油は味が惡いから味の素を加へる、といふやうな風に考へられてゐることはないでせうか。ヴィタミン缺乏といふことは、食餌中に其が不足であるための體の器官、細胞に於ける其の缺乏の場合があります。しかし、さうではなくして、攝取されたヴィタミンが體内に留まらない、といふ狀態である場合があります。器官、細胞に、必要とするヴィタミン量を保持してゐる能力の缺けてゐる場合があります。其他なほ多くの場合がありませう。物理化學の問題ではなく、生理の問題なのです。2+2=4であるべきものが、一方の2が1であるから1+1+2=4とすればよいといふのではないのです。

十二指腸蟲が腸壁に鉤着してゐて、血液を吸ひ取る爲めに貧血が起る。蛔蟲が腸のなかで動きまはるので腹痛が起るといふやうなこと、みなこの類です。

こゝで物理化學的の理の外に、生命に於ける理があります。一方の理はそのまゝでは他方には通じません。

こゝに合理的といふのは、人々がそれぞれに與へられて居り、許されてゐる理の物差と合せて、合するか、合はざるかとすることです。さまざまの物差が許されるのですから、甲の場合には合理的なるものが、乙の場合に不合理であるのは自然です。この判斷は、許された物差で、間違ひなく爲された場合には、正しいとされてよいものです。しかし其は自分の物差での判斷といふ條件のもとでのことといふことが忘れられてはなりません。此が、私が科學的であることの一つとしていはうとするところの、限界的といふことです。

仕事は出來るだけ明快にかたをつけるべきであることはいふまでもないことで、結論が仕事の目標です。しかし結論は常につけられるものではありません。結論の無いのが科學的である場合の多いことを忘れてはなりません。討究、考證、議論に結論の無いのは物足りません。結論が堂々として居ればこの上もなく立派に見えます。しかしながら、結論の無かるべき場合には、其の無いことが立派なのであり、不當に堂々としてゐる結論には、大根役者が舞臺で大見得の眞似をして笑はれるやうなものがあります。このことは、吾々の普通の知識、思考に就ても重要なことです。私のこの話の重點の一つがこゝにあります。

もの或はことが有る無いといふことは、最も結論の明瞭な場合です。そして此は對象と場合によつては決定が難かしくはありません。また有るといふことは多くの場合にいへます。現體或は現態

が眼に見ゆる場合、觸覺に感ずる場合、そこに疑問があるわけはありません。しかしながら、この眼で確かに見たといつても、其は特殊な視覺現象であるかも知れません。音や臭の場合の如きは、特に左樣です。これ等の場合には個人的の感性にも著しい等差があります。このやうなことがあるにしても、兎に角、有るといふ決定は確實に出來ます。

之に對して無いといふことは極めて困難です。無形のものはいふまでもありません。明らかに可視的のものであつてもさうです。たゞ一つでも有れば有るのであつて、其を確かに認知すれば、有ると斷定して間違ひがない。極めて稀有で、極めて少數なものでは捜し當てることが困難です。なかなか其が無いといふことはいひ得ません。有るものが、或る人に感知され、他の人には感知されないことがあります。どころで吾々は、この無いといふことを輕率にいつてゐることが多くあります。無いといふ言葉が精確な意味での不存といふことではなく、もつと漠然たる、みつからぬ、といふほどの意味で用ひられてゐる場合もあるのは勿論ですが、さうではなくして、相當確かな意味でいはれてゐる場合が多いのです。

私のいはんとする限界的といふことに、この否定の場合が最も重要な例になります。自分の物差で判斷して、不合理であると考へた場合に、對象の如何、其他の條件によつて、そこでの態度がさまざまであるべきです。私は其に次のやうに三通りのものがあるとします。

（一）故に眞にあらず
（二）故に眞にあらざるべし
（三）然れども眞なるやも知れず

（一）は否定、（二）は否定に傾いた、（三）は肯定に傾いた不決定の態度です。

之等の態度に關することが、この小書でいつてみたい主要なものの一つです。それで、實例について念を入れて吟味することにして、その材料として、怪異談を選びました。狐憑き、幽靈などの類です。そして、日常生活に關係のある呪（まじな）のことも取扱つてみることにしました。第三から以下の四章がそれです。そしてこれ等の爲めに、次の一章を當てることにしました。

第三に實驗のこと。

實驗を行なつて確かめられたほど立派な眞實性の證據はありません。

實驗といふ言葉は、普通、學校で教師が行なつて見せるもの、また生徒が教師に指導されて行なふもの、研究室や試驗室で、學者や研究者や技術者が、それぞれの專門の事項に就て行なつてゐるものなどに用ひられることになつてゐます。こゝで申すのは、これよりも廣い意味で、實地に試みるといふ內容のことです。

物理學化學の先生が、いろいろの實驗をして見せて授業をします。生徒も自ら其を行なひます。ピンセットと擴大レンズで花などを解き分けて、細かく見るやうなこと、蛙を解剖して內臟を調らべるやうなこと、鑛物の硬さや結晶を調らべて、種類と名稱をきめることなど、みな實驗といはれます。これ等は科學教育になくてならぬものです。たゞに必要といふのではなく、此が教育の主體とされねばならぬといふ傾向に進んで來てゐるのです。學校教育でいふ實驗は、正しくは觀察と實驗といふべきです。觀察と實驗とは違つた性質のものです。自然を學ぶことは、特に教育では、觀察が土臺になります。そしてその上に實驗が加はつて確かにされます。

近代の自然科學は實驗的の學になつてゐます。物理學や化學はその創始から實驗を伴なつて發達して來ました。之に反して生物の學は專ら觀察的討究で進んで來たのですが、實驗的になつて、その面目が一新されました。實驗的の研究に移ることによつて學としての面目を具へ、たちまち異常の光彩を放つに至つた學問の例の一つが遺傳學です。遺傳といふ現象は、人間の體質、性格等に就て、畜類や作物の其等に就て、文化の至つて幼稚な時代から、實際問題として認知され、また考慮が拂はれてゐたことであるに相違ありません。學術の發達と共に其が學問の形をとつては來たのですが、その內容は茫漠たるを免れなかつたのです。此が解析的に、そして數理的に取扱はれることに

になつて面目が一新され、今日の隆々たる遺傳學となつたのです。實驗遺傳學はメンデルを鼻祖としてゐます。十九世紀の中葉にチェコスロバキアの田舍の僧院の一役僧であつたグレゴール・メンデルが、その僧院の畠で植物の人工交雜の試驗を重ねて、その結果をば解析的數理的に取扱つた成果が、今の遺傳學の出立です。實驗遺傳學は、遺傳の法則、その機構を明らかにして、ますます其を深くして果れてゐます。そしてその應用が、實際的に作物の品種改良などに於て、人類の福祉幸福を增大してゐることが多大です。ところで、吾々が最も深く關心をもつのは、人間に於ける遺傳の現象であるのですが、此に關しては研究が他の動物や植物のやうに進みません。いふまでもなく人間では實驗が可能でないからです。

醫學は實驗なしで進んで來た、經驗の學でした。十九世紀になつて實驗醫學が始まつて、それから急速に發展した結果が今日の狀態です。そして動物醫學、モルモット醫學などと批評されるやうなことにまでに至つてゐるわけです。實驗醫學の鼻祖とされてゐるのがフランスのクロード・ベルナールです。消化の作用、特に肝臟の機能などは、その實驗的研究で土臺が置かれたものです。その「實驗醫學序說」はいまも古典として讀まれます。ドイツにはヨハネス・ミュラーがあります。共に一八〇〇年代初頭の人です。ヨハネス・ミュラーには次のやうな逸話があります。學生時代に、胎兒の呼吸といふ課題が與へられました。ミュラーは直ちに馬を走らせて農村に行つて、羊の胎兒

を手に入れて來て、美事な答案を書いたといふのです。

十九世紀の近代醫學で輝かしく現らはれたのが細菌學です。この細菌學こそは專ら實驗の學です。動物試驗なくして細菌學は根本的に成立しません。この學の鼻祖ローベルト・コッホは、一つの疾患の病原菌たることを確定すべき條件として、コッホの三原則といふものをいひました。第一に、其がその疾患の患者に限つて檢出され、他の疾患の患者からは決して檢出されないこと。第二に、純粹に培養されること。第三に、純粹に培養された菌で、固有な病變が呈せしめられること、といふのです。動物試驗が必需の條件とされてゐるのです。世紀の終りから隆興した原蟲學、今世紀になつて、この方面の中心部門になつたヴィルス學でも亦全く同樣です。

幸にして多くの微生物性の疾患では、其に感染する試驗動物があります。此が爲めに、其等の疾患では研究が進められました。しかし、感染する試驗動物の得られないものがあります。最も手近かな例が癩です。癩菌は培養もまだ成就されてゐません。近年わが國の研究者の勞力でその緒がついたやうです。是非成功して貰ひたいものです。黴毒は人類病といはれ、亡國病、民族毒の主要なものといはれるものですが、動物に感染させることに成功したのは、フランスでメチニコッフとルウが類人猿を用ひたのが最初で、一九〇三年です。其から三年後にイタリーのベルタレリーが兎の

睪丸に接種する方法に成功して、漸く試驗動物が得られたのでした。マラリアではまだ此が得られてゐません。幸に鳥類に近似の種類があり、また猿にも人間のマラリアによほど近い種類があつて、それ等が研究の助けにはなつてゐるのですが、兩者の間には相當の距離があります。

このやうな試驗動物の得られない疾患では、どうしても人體そのものに就て試驗する外に途はありません。ところで此は、いふまでもなく、人道上、法規上行なはれるべきものではあり得ません。疫癘の研究史には、進んで此を志願して、その生命の危險を提供した例がいろいろあり、その貴い犧牲となつた悲痛な例もあります。キュウバでの黃熱病研究隊のディーン、カロル、ラゼアールなどが有名です。治療による治癒が確かで、後遺症がないことが明らかな疾患では、同意又は志望によつて此が行なはれて差支ないことであり、またそのやうな有志者のあることが望ましいことです。

痳痺症（最も普通な精神病で、黴毒に起因するもの）の患者の發熱療法として、マラリアに感染させる方法が有效であることが明らかになつて、一般に行なはれてゐます。此がマラリアの研究に大きい利便を與へてゐます。近年は一般の理解が進んで、種々の疾患の人體試驗が相當に行なひ得られるやうになつて來てゐるのはまことに結構なことです。先年デング熱が流行した際には、諸所で多數の人體試驗が行なはれて、大きい成果があげられました。大正五年に臺灣で、私は同僚の二人と共にデング熱の研究をして、その頃には例のなかつた人體試驗を、時の總督其他の許可と奬勵を

得て、四十例で行なひましたが、その頃の萬事の困難と苦心は、當今の情勢で回顧してまことに感の深いものがあります。

醫學では解剖學が第一の基礎です。屍體の解剖は、今では普通のことになつて來てゐますが、舊くは容易に行なはれるものではありませんでした。屍體は一面には不淨とされ、一面には神聖視され、刀を觸れること、まして內臟を切り出すなどといふことは許すべからざる冒瀆行爲であり、また不淨行爲とされてゐたのです。德川時代の禁制は嚴しいものでありました。この仕事はまた萬人の最も不快なこととするのが當然な作業です。世間の因襲と、事情の困難と、作業の不快感とを克服して、早く解剖を行なつた篤學者は、厚く尊敬されねばなりません。

シナの醫學は古代から著しい發達をして來てゐました。其は專ら對症治療の學で、其に哲理的の理論をつけたものでした。藥物學的の探索、調査、實際使用の驗證等の進んでゐたことはまことに驚くべきものがあります。藥治療法、理學的療法もまた著明な發達をしてゐました。しかし形態學的の面、卽ち解剖學の方面は全く進んで居らず、主要な內臟の位置、大體の形などは體表から察知してゐて、相當に細かく命名もされてゐました。しかし人體を解剖して、その實態を直接に、そして細かく檢するといふことはされて居らず、二三の圖說がありましたが、實際とは遠いものでした。

わが國には本來固有の醫學はありません。早くから大陸から移入された醫學が、本土との絕えざる連絡によつて發達して來たのですが、德川中世の隆盛期になつては、輝かしいものになつてゐて、療法に於ても、理論に於ても獨自の一家として、名實共に隆々たる人物が出て來てゐました。其等には理論家もあつた一方には、現實的な、いはゞ自然科學的な頭腦の人物もあつたわけです。それ故に人體の臟腑の現實的な知識を欲求した人達があつた筈です。しかし屍體を傷けることは法によつて嚴に禁ぜられてゐました。わが國の人體解剖に就ては、明和八年（一七七一年）の小塚原の腑分けが、廣く世に知られて居り、現場には記念碑が建てられてゐます。しかし解剖は、其よりも前に山脇東洋によつて行なはれて居り、その當時、他にも此を行なつた篤學者があつたのです。そしてまた此に就ては、東洋の師匠の後藤艮山の名も出されねばなりません。實驗醫學のこと、大陸醫學のことを述べ、後に殷の紂王の話まで持出しますに就ては、此等のわが國の先覺に就て述べて置かなくてはなりません。

後藤艮山は、萬治二年（一六五九）の生れ。二十七歲の時「儒となつては仁齋の右に出ることは難い。僧となつては隱元の上に立ち難い。醫となならう」と志を立てたといふ逸話があります。古方醫學と稱して、復古革進醫學の一派を建てた人物で、實地の方面では、熊の膽の藥用、灸治の法を創め、また溫泉の効能を唱道した人で、湯熊灸庵（ゆくまうあん）と呼ばれたといひます。この艮山は人體解剖を熱

望しましたが、國禁を如何とも致し難く、人間に最もよく似てゐるといふ考（どういふ事か私にはわかりません）から、獺（カハウソ）を解剖したのでした。山脇東洋は、艮山の門下で古方醫學の代表者ですが、歐洲の醫學をも採り入れた人物です。在來の臓器の說に滿足が出來ず、解屍實檢の欲求が痛切でした。艮山に相談したところ、獺の解剖をすゝめられました。其を行なつて、得るところが多くありましたが、次の疑問は、此が人間と同じであるか如何かといふことでした。それで更めて人體の解剖を切望したといひます。敬服すべき態度です。幸にして寶暦四年（一七五四）に、死刑屍の腑分けの願が許可されて、同志三人と共に實行しました。東洋のこの解剖は單に內臓を見るといふのではなく、全身に亙つて檢攷し、圖に描き、所見を記して「藏志」一卷を著作しました。小塚原腑分に先つこと十七年です。なほ東洋の解剖の前に、長州藩の侍醫が姦賊の刑屍を剖見して、畫師にその圖を作らしめたのがあつたのですが、國禁の關係で祕してありました。東洋の剖見は、仁術を施こすべき醫の爲すべきものにあらざる非人道的なものとして、翕然たる非難を受けたのでしたが、東洋は、毅然として動かず、四年の後に更に一屍を解剖しました。

小塚原の腑分けは、わが國蘭學開拓者の一人杉田玄白がオランダの解剖學書「ターフェル・アナトミア」を手に入れて、その精巧、詳細なことと、從來の知見と異なるところの多いことを見て、實際と照合する熱望を起し、明和八年三月に、その機會が與へられて、前野良澤、中川淳庵等と共

に此を見たのでした。この日は、多年腑分けに馴れてゐた非人の虎松といふのが行なふことになつてゐたのでしたが、急病の爲めに、その祖父の九十歳の老人が代理したといふことです。各種の內臓を採出して示し、玄白等は「ターフェル・アナトミア」と對合して見て、その眞なることに感嘆したといふことです。この小塚原の剖見は、人體解剖の史實として人に知られてゐるのですが、それよりも外の點で重要なものなのです。即ち西洋の學術に對するこの日の感激が源となつて、良澤、淳庵の外に桂川甫周、石川玄常、桐山正哲の飜譯が着手され、驚嘆すべき苦心勞力によつてわが國蘭學史に於ける一記念塔である「解體新書」が出來たことなのです。

學問上の實驗、特に醫學に於ける實驗の長談義になつてしまひましたが、私がこゝでいはんとするのは、このやうな專門の立場で行なふ實驗などのことではなく、遙かに廣い意味でのことです。即ち、一應自らやつてみる、といふ程の意味です。驗といふ文字を經驗の驗とみて、實際の經驗といふ言葉の前後の二字をとつたものといふ程の意味に用ひようとするのです。

實驗といふ意味を廣く考へれば、吾々の知識は多くは實驗を經てゐるといへるでせう。それ等は吾々の遠い或は近い先祖達の實驗を經てゐるものです。或る想定のもとで行なはれるものを實驗といひ、無想定で、或は意識的にでなく行なふのを經驗というてよいとすれば、吾々の知識は實驗の

收穫であるものがあり、經驗の結果であるものもあり、兩者の中間のやうなものもありませう。何れにしても、先人の體驗の恩惠に浴してゐるわけです。

海鼠は特殊な美味の動物です。そして見た上では決して氣持のよい感のもてるものではありません。最初に喰つた人間はよほど度胸のよい人間だつた、と笑ひ話などにいはれます。その最初の人の場合が、意志的の實驗であつたか、偶然の經驗であつたかはわかりませんが、それから後しばらくの間は、恐らくは實驗であつたでせう。原句が思ひ出せませんが、「神農は時々腹下し」といふ川柳があります。本草學の創始者達は、いろいろの苦しい經驗をしたことでせう。吾々は此等に恩を感ずべきでせう。

漢字がわが國で厄介な問題です。漢字制限が行なはれ、先頃は常用漢字の決定もありました。常用漢字と、書かせずにたゞ讀ませる漢字といふこともいはれてゐました。漢字には眼で見て讀んでゐるだけでは、會得出來ないものがあるやうに思はれます。字畫などはどうでもよろしい。讀み方と意味さへわかればそれでよいのだ、といへばそれまでのことですが、漢字は書いてみなければ呑込めないものだと私には思はれます。讀書してゐて不自由のない文字で、その構造のあやふやなのが多くあつて、書いてみて始めて其がわかります。存外簡單な文字でもしばしばです。習字をすると、これ等の點がよくわかつて愉快を感じます。實驗の必要、其の有難さといふことを感ずる一例

です。外國語でも同樣なことがいへます。讀んでゐただけでは、知りぬいてゐると思つてゐる文字を、實際書いてみると綴字の間違つてゐることがあります。書いて頭に入れた文字はいつまでも間違ひません。ディクテーションは生徒がいやがる學課ですが、此が後々に與へてゐる效果はまことに大きいものです。

先年私は、教室出身者の農村の醫師就職に關係して、農村民の保健醫療に關心をもつやうになり、現地を訪問して其が更に深められました。當時は農村問題の論議の相當盛んな時で、調査研究の類が續々出てゐました。私は其等をだいぶ勉強したのでしたが、頭のなかで實になつて呉れません。不同意なところ、同意されるやうなところで、はつきりと得心のゆかないものが多くありました。幸に農林省から費用が與へられることになり、新潟縣の某村で自らの仕事をすることが出來ました。教室員十名ばかりを參加させて、十七箇月間現地の作業を續けました。農村の生活は春夏秋冬を通じて見なければわからない故、正味を一箇年、それに手ならし作業の二箇月と、補充作業の三箇月を加へて一年五箇月行なつたのです。私はこの作業で、自らの經驗の重要さ、尊さといふものを本當に感得しました。此によつて諸家の調査所見や言說を理解し、批判する度胸までも出來たやうな次第でした。この作業で農村生活の內容、人間としての農村民に就て多くのものを學んだのでしたが、農村調査として一般に行なはれてゐるものに不同意な點のあることを數々氣づいたことが、私

にとつて別に大きい收穫でありました。その一例を出します。

農家の大きさ、その建坪數、土間を除いた坪數、間數等が調らべられて、その數字が重視され、家族一人當り坪數が計算されて、其に大きい價値を置いてゐる論者もあります。私の經驗は此等の數字が、それだけでは無意味に近いものであることを敎へたのでした。一年を通じての、その家屋の使用狀態、家族成員の生活狀態等が併せて考へらるべきであつて、後者の如何によつては、前の數字には意味があり、或は全く無意味なのです。

私の調査村は、わが國で屈指の深雪地です。それ故に、村民の生活は、積雪期と無雪期及び夜間と晝間とに區別して考察されるべきものでした。無雪期には農耕と養蠶とあつて繁忙です。養蠶は五月から九月まで續き、十月にも入ります。そして四間ある家でも、二室以上が此に用ひられ、後にいふ特殊な寢間と爐ばたを殘すのみとなります。廣くて間數の多い家でも、家族の生活の爲めに殘されるのは甚だ少なくなるのです。九月の下旬、十月の初旬に養蠶が終るのですが、續いて稻の收穫が始ります。早稻は九月下旬に刈り始め、十月初旬が刈入れの盛期です。稻束は乾燥させて、屋內に取込み、屋內又は屋外で脫穎して俵にします。それ故、秋蠶が終つて屋內のかたづいたところへ稻束が運び込まれ、晩秋蠶を飼ふ家では、其の始末のすまぬうちに運び込まれて、屋內の大部分が占領されてしまひます。このやうに、一年中の七箇月間は、家族一人當り坪數の數字などは實

際上意味のないものになつて居り、特別に廣いか、反對に狹い家以外では、この七箇月間は、みな頗る限局された坪數の內で生活してゐるのです。

養蠶終了、引つゞいて米の處置をすますと、冬ごもりの用意にかゝり、間もなく積雪期に入ります。降雪は、普通は初雪が十一月中旬に降り、十二月中旬或は下旬に根雪（春まで溶けぬ積雪）になります。解雪は四月中旬か上旬で、深雪の年には五月中旬です。即ち根雪になつてから解雪まで普通四箇月、深雪の年には五箇月の長期に亙るのです。この冬ごもりの間には、間數や一人當り坪數の數字が其まゝ意味を有するやうに思はれますが、さうではありません。採溫の關係上、家族の生活は一室に密集するやうになつて、また特殊なものになるのです。重要なのは夜間の臥寢です。分散して臥寢するのでなければ、間數や坪數の多いことの意味はありません。私の調査部落では、一室又は二室が寢間と定められ、全家族が其を寢室として使用して、萬年床であつて、臥寢以外には用ひられないのです。そして晝間にも每日晝寢をする習慣があり、その時にも右の萬年床で寢るのです。即ち臥寢に關して、家屋の一人當り坪數は全然意味をもつてゐないのです。以上を見通して、私の調査村では、無雪期、積雪期、臥寢時に、間數、坪數の數字は每常價値のないものであることが知れたわけでした。

ながながと自分の仕事の話をしましたが、私は、自らの經驗といふものの尊さを切に知る幸福を

得たのでした。そして型にはまつた調査の内容に就て疑をもつやうになりました。調査が型にはまつてしまふのは、當事者の頭に型から離れるといふ努力と力量の缺けてゐる爲めでもありませう。しかしまた自ら經驗しないで、テーブルの上で書類だけ見てゐる爲めといふこともありませう。

實驗、經驗は、自らの考想、假定、他からの教示、傳聞の當否、是非を確かめて果れます。その結果が肯定的であつても、否定的であつても、經驗者にとつて意味のある收穫であることに違ひはありません。そして此等の貴い所以はこれだけには止まらないのです。その間に、或はその結果として、附隨的に何等かの新らしいものに當面させられるからです。そして吾々を更らに新らしいものに導くからです。このことは學術上の實驗でも、日常の行事の經驗でも同樣である筈です。

實驗、經驗には、對象により、人によつて、其の可能の範圍が限られてゐます。何人にも不可能なものがあります。その範圍はそれぞれ個人にとつて限定されてゐます。特殊な器械や藥品の入用なものは、出來る人は限られてゐます。こゝでいふのは、吾々一般がその生活の日々の間に爲さんと欲すれば爲し得るもの、また爲し得る機會に遭遇することのあるもののことです。そして、このやうな、爲されることが必要であり、爲され得べきものが、實際には爲されてゐることが甚だ少ないことが反省されねばならぬ、といふことをいひたいのです。

私は後章で呪（まじない）の事を材料に選んで、詮議をすることにしてゐますが、實驗の意味を說明する一つの良い材料になると思ひます。

呪は當節は吾々の生活に跡を絕つた狀態になつてゐるやうです。勿體ないことに思ひます。舊弊なことで文化人の口にすべからざるもの、無稽にして非科學なものの模範的な代物のやうに考へられてゐます。數多くある呪には、無稽なもののあるのは事實です。しかし確かに有效であるものも多くあります。合理的であることの理解されるものも多くあり、理由はわからぬが、效くであらうと思はれるものも少なくありません。實例は後章にゆづることにして、こゝで一般の人達の呪に對する態度を吟味してみたいのです。呪を輕蔑し、非科學的呼ばりをする態度には、二通りのものがあるやうです。その一つは、概念的に、非科學的のものときめてかゝつて、效果の如何などは外にして、呪などをするのは舊弊だ、といふ態度です。また呪など效くものかと、問題にしない態度もあります。何れであるにしても、實驗してみないでいつてゐるといふ缺陷がそこに認められます。實驗はこのやうな考を是正します。果して效果的であるか然らざるかを明らかにすることをせずして、非科學的などといひ捨てることこそ、科學的の態度ではあり得ません。有效であるものならば、それ以上の方法があるならば兎に角、實行するに如くはありません。適當な方法がなく、理窟では其が考へ出せないやうな現象で、呪の有效なものがあります。舊弊などといつてゐるには及びます

まい。實驗もせずして徒らに無視したり、輕蔑したりするのは、祖先の貴い經驗に對してすまない態度でせう。疾患や身體の故障の療治に、呪でなかなか效力のあるものがあり、或は優良な治療法があります。舊弊呼ばりをして、藥代や治療代を支出してゐるのも馬鹿げた話です。

こゝでまた大切なことは、實驗の結果の判定には、限定が必要であることです。

實驗する、經驗するとして、その結果が必らずしも、其がなるべきやうになるものではありません。同じことを甲が行なつた結果と、乙の行なつた結果が別でもあり得ます。自らの實驗、經驗の結果に執着してはなりません。かういふ意味で、思考判斷の限界といふことが留意さるべきです。

實驗は、行なふ人とその方法によつて、結果が肯定的にも否定的にもなり、同一の方法によつても、人によつて其の結果は必らずしも一致しません。同一人でも技巧や工夫が結果を好くし、熱心と努力がまた同樣な結果を與へます。僅かの例で全體を斷定してはなりません。

乾燥した堅い木片を激しく摩擦すれば火が得られるといひます。それに違ひありません。しかし吾々が其を試みて實際に發火させることはなかなか出來まいと思ひます。往古の原始人はこの方法によつて火を得てゐたといひます。考へてみると、種々疑問もありますが、書物にはさう書いてあります。そもそも人間が火を自分達のものにしたのは、深林の巨木の摩擦による發火からの山火事からだらうといひ、噴火の熔岩からだらうといひ、いろいろにいはれてゐますが、木片を摩擦して

火を得てゐたことは事實でありませう。現存の土人には轆轤仕掛けの發火器をもつてゐるのがあります。兎に角未開の土人達には出來るのであるが、吾々にはなかなか出來ません。根氣と體力も條件になつてゐるでせう。知能ばかりの問題ではない筈です。

實驗には精神狀態が關係します。必らずかうなるといふ強い自信で行なふ場合と、どうだらうかといふ氣持で、試しのつもりで行なふ場合では、結果が違ふことがあり得ます。なほまた前者では、その自信が結果の判斷を誤らせるといふことのあるのも、併せて考へねばなりません。このやうな點にも思考の限定の必要があるわけです。

昨年、上海の一外人が立春の日には鷄卵が卓の上に立つ、といふことをいひ、鷄卵が賣れて市價が上つた、といふ話がありました。「コロンブスの卵」といふ言葉のあるやうに、卵はそのまゝでは立たぬものと萬人がきめてゐたのですから、大いに注意をひいたわけです。上海のことは知りませんが、わが國で、新聞や雜誌にこの事がいろいろの人達によつて書かれたやうです。いろいろの說明をつけて、立つことを肯定した人がありました。私も此を肯定します。そして私は、他の人達のいつてゐない點を一つあげます。それは精神狀態の關係といふことです。卵は物理學的には立つのが當然である形狀をしてゐます。しかし其だけでは立つわけはありません。內容が不平等、不同質で全體の重心は、外形の上からのそれとは違つてゐるからです。しかし內容の不平等は固定的な

ものではありません。移動的です。動かしてゐる間に、其が立つことに適當なやうな配置になることがあり得る筈です。それ故に、立てよう、立てようとして、繰り返して扱つてゐる間に、内容が自ら立つやうに變化されることがあり得ます。このやうな理由で、私は立つことを肯定するのです。しかし其だけではないと思ひます。立春の日に、「今日は立春だから、必らず立つにきまつてゐる」といふ氣持でやるのと、「立春の日に限つて立つなどといふわけはない。それでも立つかしらん」といふ氣持でやるのとでは、結果が違ひませう。立春の日以外の日にも立つのは當然ですが、「今日は立春でないから立つまい」といふのと、「立春でなくても立たぬ筈はない。きつと立つ」といふ氣持でやるのとでは、結果が違ふであらうと、私は考へるのです。

長談義になりました。餘談を添へて、この章を結ぶことにします。

殷の紂王といふと、暴逆な主權者の代表例としてあげられる王者です。「史記」(殷本紀)に『紂愈淫亂して止まず。……比干廼ち紂を强諫す。紂怒りて曰く、吾聞く聖人の心臓に特に多い數に於て存すると干を剖きて其心を觀る』と出てゐます。竅は穴であつて、聖人の心臓に特に多い數に於て存するといはれる孔穴の如何を、解剖して實驗したといふのです。この紂王はまた、曉朝に河を徒渉して、水の冷たさを惧れない人の脚を斬つて、その骨髓を檢したといふことも書いてあります。これ等は

紂王の變態的性格の一面の話であるのは勿論ですが、私はこのやり口の實驗的であり、形態學的であるところに面白さを感ずるのです。彼は、奢辯捷疾にして、聞見甚だ敏かつたといひます。この變態的人物のリアリスティックで、形態學的であつた話が特異な例として面白く思はれます。

大學在學中の某日、級友其他數名と、戸山の原へ、櫻草見物がてらの採集に行きました。歸途、夕暮になつて、荒川の岸を歩んでゐると、或る農家の犬が一匹、吾等を望んで吠え出しました。一行が其に應じて蠻聲をあげた結果、數匹が集まつて來て、猛々しく追つて來ました。その時に思ひついたことは、犬に吠えかゝられた時は、四つん這ひになり、尻を前にして向つて行けば、頭のない犬が來たと思つて、逃亡するといふことでした。私は實驗したことはなく、實見もしてはゐなかつたのでしたが、元來少し變であつた同行の一人に、「どうだ、やつてみないか」といつたら、「よし、やつてみる」といつて、勇敢に實行しました。黑い學生服を着て居り、黑犬と見えるに十分なものであつたのですが、犬どもは毫も威かされないで、將に嚙みつかんずる形勢になつたのには、發言者として私は氣が氣でありませんでした。幸にして一同で救ひ出して事なきを得ました。

子供の時分には、實驗的の態度が著明です。お臍の胡麻をとると腹が痛くなるといふことを聞いて、私かにやつてみた經驗のある人、或は友達のやつたのを知つてゐる人は多いでせう。蟬蟬に鹽をかけると融けると聞いて、それを試みることは多くの子供のすることです。神鳴樣がお臍をとり

に來ると感かされて、直ちに本當と思ふ子供ばかりは居ません。雷鳴の時に實驗する勇敢なのもあります。子供心の貴さです。ところが年をとるに從つて、この貴さが薄らいで來ます。持ち合せの知識や自己慢心の了見で自らを縛つて、横着に構へ込んでしまふやうになります。

二　科學的—非科學的（二）

見ること
考へること
能動的懷疑

以上、科學的であるといふことの條件に就て語りました。こゝで方向を轉じて、態度といふことを考へてみるのがこの章の仕事です。吾々の知識、思考が科學的である爲めに必要とする態度です。話の順序として、先づ見ること、よく正しく見るといふことを出します。

考へるといふことと、見るといふことが、對等的な重要性をもつて伴なつてゐます。見ることによつて考へる資料が集められます。資料の乏しい思考には缺陷があります。劣惡な資料の上に良き思考が爲されるわけはありません。

吾々は毎日十數時間眼をあけてゐます。その間に網膜に映じてゐる像はたいした數でせう。しかし吾々はあまり多くのものを意識しません。といつて一々意識してゐられるわけのものではなく、

またそんな必要のあるわけはありません。問題は、見るべきものを見落すことをせぬやうに、また、見て置くべきものに眼を注ぐこと、見るべきものは正しく深く見て置くといふことです。

こゝで命題は二つになります。第一は、よく見るといふこと。消極的にいつて見落さないこと、積極的に、それぞれの立場で、それぞれの見地で、常に捜し求める見方をするといふこと。第二は、正しく見ること。正しい性質、狀態に於て見ることです。

吾々は研究室で仕事を進めて居り、また現場に出かけて仕事をします。後の場合には特殊な病氣の流行といふやうな、それ一回しか經驗の出來ないやうな場合もあります。何れにしろ、仕事の要目に缺けたところの無いやうに、プロトコールには脱落のないやうにと勉めるつもりなのはいふまでもありません。特別の場合には自ら一層注意を注ぐわけです。ところでいよいよその仕事の纒めにかゝつてみると、あちこちに缺陷があります。研究室の仕事なら、やりなほす途もありますが、特殊な場合はそれも出來ません。調査、研究の場合ですらこのやうです。まして、日常の嘱目に於て、充分にこれが實行されるといふことは出來難いことです。しかし、見るといふことは見えるものを或る程度以上に意識することです。見ようと思はぬ眼に見ゆるわけはありません。つまり、見ようとすることです。頭に何かの主題をもつて居れば、至るところで其に關係のあるものが眼にとびこんで來るものです。但しこの場合には、それ等以外のものが見えぬといふ一面もあります。明

治時代の或る解剖學者に、日清戰爭當時に戰爭を知らなかつたといふ逸話があります。逸話といふものに事實そのまゝなのは少ないのは當然ですから、此もその通りの事實でなかつたらうことはいふまでもありませんが、戰爭の内容に就て無知に近いものであつた位までは想像してよいでせう。この教授の頭は、人體構造といふ主題で充滿されてゐたのでせう。なほまた頭が何かの主題で充滿してゐても、また其が皆無であつても、何も見ないでゐることのあるのは同樣です。

後にいふ三浦梅園の青年時代の師匠、綾部綱齋の子が麻田剛立です。剛立は醫を業としながら獨學で西洋暦學を研究して、三十歳の時に翌年の九月朔日の日蝕を明言し、自ら精密機械を造つて天體を觀測し、暦學の一派を開いた人物です。この剛立は、幼時から星の名を質ね、天體に就て知識をもつてゐたといふことですが、たゞそれだけではなかつたことが、次のやうな逸話で知ることが出來ます。七歳の時、家の緣側で一人で遊んでゐて、太陽の當る緣側の端のところに爪で印をつけて置き、時候が移るに從つて、其が移り變つて行くのを見て居り、太陽は冬から春夏へかけて漸次北へ移つて、秋冬にはまた南へ歸つて來る、といつたといふことです。幼ない剛立はたゞお星さまに興味をもつてゐたのではなく、ものを鋭どく見てゐたのです。

物を正しく見る、その眞の狀態に於て見るといふことは、眼ばかりの仕事ではありません。頭の仕事でもあります。イギリスの生物學者ハックスリーは、顯微鏡で標本を見てゐる學生に、眼の前のものだけでなく、眼のうしろのものにも氣をつけよ、といつたといひます。この人らしい皮肉を私は貴いものに思ひます。

一九一一年に、獨逸ドレスデンで萬國衞生博覽會が開かれました。リングナーといふ人の事業で、學術的でまた實際的なもので、絶讃を博し、其の一部が獨逸衞生博物館として存續して居ります。一九三〇年に第二回の萬國博覽會が、同じ所で開かれて、私も見物する機會を得ました。この博覽會のマークは第一回以來、吾々には風變りに思はれるもので、一つの眼でした。此は Klarheit und Weisheit を表徵したものだといひます。明澄と怜悧と譯せば近いでせう。眼が明澄と怜悧の表徵といふのであれば、私には會得出來ぬところがありますが、明澄にして怜悧な眼が智慧の門であり、此に値する眼をもたねばならぬといふ解釋に於て、私はあのマークを愛好するわけです。そして、それ等はたゞ眼だけの問題ではありません。其のうしろのものとの聯結に於ての問題です。

吾々は眼だけではなく、頭と眼で物を見ます。頭次第で見えたり、見えなかつたりします。同じものが頭の狀態次第で異なつて見ゆることがあります。先在意識に捉はれて、歪められ、時には反對にすらも見ゆる場合があります。

先年私は房州の海岸で、間近い島と彼方の城ヶ島の間に見ゆる短かい海の水平線が、くつきりと曲つてゐるのに氣がつきました。當り前のことで、それまでの自分の愚を笑つたわけでした。此に就て私は二つのことが考へられました。一つは水平線といふ名です。海面の視界の限界線を水平線といふと思つてゐましたが、念の爲めに「大言海」をみたら、さうは書いてなく、上海版の「辭源」を見ても、この意味では載せてゐません。私の思ひ違ひであつたのなら、私だけの問題ですむのですが、さうではないらしいのです。海岸で眺めていふ水平線といふ言葉は、幾何學でいふのとは別で、「海の水平面と空との限界線」の第三、四語と終りの語を組合せたものらしいのです。さすれば、此が水平でなくて曲つてゐても、名と一致しないことはないわけです。九十九里濱のやうな地點で大洋を眺めて水平線が直線だとは思ひません。私は至つて短かい線でも曲つて見ゆる顯著さに氣がついて、自分のものの見方の不注意を恥ぢたのです。そこで續いて思つたことは、海の風景畫で水平線は必ず直線に畫いてあると思はれることでした。中學時代に圖畫の先生に海岸へ寫生に連れて行つて貰つた時に、先づ畫面の上方三七のところへ水平線を引けと教へられたりしたのも記憶してゐます。畫家は曲つてゐるとは見てゐないのであらうか、或はまた直線に畫くといふ約束になつてゐるのだらうか、何れにしても合理的でないと思つたのでした。後日この話をしたところ、或る人が、新らしい畫家には曲線に書いてゐるのがあると教へて呉れました。これある哉と、愉快に

感じたことでした。

私は十歳の時、仙臺市の小學校へ轉校しました。鐵道が上野から青森へ向けて一本だけ通じてゐた頃です。或る日のこと、課業中に、先生は私に「汽車の内に居て窓の外の景色を見てゐると、何ういふ氣持がするか」と質ねられました。汽車はまだ珍らしい頃であり、吾々一家は汽車で行つたので、質問を受ける光榮が與へられたのでせう。私は「景色が早く變つて、見えた物がすぐ見えなくなります」と答へました。この答は先生を滿足させませんでした。重ねて、「自分の體は動かないで森だの家だのの方が動くやうに見えただらう」と問ひ返されました。私は「さうは見えなかつた。自分の方が早く動くやうに思ひました」といひました。こゝで先生の期待とは違つてしまひ、いまの答のやうなものではなく、森や家が動くやうに見えるものなのだ、と說明されました。少年の私は恥かしい氣持でした。汽車の窓からは先生の申されたやうに見ゆることがあることを後に知つたのでした。私が空想力に缺けてゐた、ファンタジーをもたぬ、といはれゝば返答の限りでありません。あの先生は汽車に乘つてゐられなかつたのであらうと思ひます。人から聞かされた話に簡單に捉はれてゐたので、乘車したならさう見えたでありませう。

次に、一應考へてみること、といふことをいひます。少しく強くいへば、一應疑つてかゝることです。足踏みをすること、といふやうないひ方もありませう。一應考へてみれば、眞實性の疑はしいことが簡單に氣づかれることが、存外そのまゝで信じられ、口にされ、耳にして、それがそのまゝに肯定されてゐる事實が、注意すればいくらもあります。

郵便料金が昭和十二年に改正されて、更に十七年にまた改まり、封書が三錢であつたものが四錢になつて、更に五錢になつたのでした。前回はたゞ三錢が四錢になつたのではなく、量目も改まつたので、一五瓦毎に三錢であつたのが、二〇瓦毎に四錢になつたのです。當局もこの點を念を入れて說明しました。即ち、書狀一通といふことからいへば三割三分餘の値上げであるが、量目からいへば五瓦毎に一錢であつて、變りはないといふのです。なるほどと聞いて、値上げでないと思つた人も多かつたでせう。トリックにかゝつてゐるのです。簡單に値上げであるとはいへず、値上げでないともいへるのです。そして個人にとつては、何れか一方である筈なのです。そこを確かにしないでは、料金改正の知識にはなつてゐないでせう。常にどの程度の重量の信書を出してゐるかといふことを考へるべきです。私などは最低限料金を超過するやうな信書は殆んど全く書いてゐません。その限度が高められたとしても、確かに三割餘の値上げでしかありません。ところで、長いラブレターなどを澤山に書いて、其が一五瓦以上になることが普通で、毎常の超過量が五瓦以内であつた人達には、寧ろ値下げであつたわけです。

三浦梅園の逸話として次のやうな記事があります。

『先生幼にして奇警なり、其明快にして穎利なる論理的頭腦は、八歳の幼時既に人を驚かせり。先生の家に近江八景の屏風ありけり。八歳の幼兒なる先生は、唐崎の夜雨の圖を指して、父君に此は何の圖かと問へり。其圖に炬火を點して簑笠を着たるにても夜にして雨ふるものなるを知るべしと父君の答へけるを、先生は納得せで、目にて見るをこそ景とは云へ、暗黑の中爭でか望を馳するを得ん、之を情に屬するは可なるも、之を景に屬するは不可なりといひけるより、人皆其奇言に驚きたりとぞ。』

八景といふものはあちこちにあります。もともと瀟湘八景を當嵌めたもので、何れも至つて愚なもので、笑止なものが多くあります。近江八景はわが國で代表的なものですが、實際を私は知りませんから、唐崎の夜雨がどんなものか充分にはわかりません。景觀でないこともなささうですが、情趣といふのが當つてゐませう。八景といふうちで暮雪、歸帆、秋月、夕照、落雁、晴嵐は景であらうが、晩鐘、夜雨は景でないといへば景ではない。情といへばそれでもよいでせう。情の伴はぬ景があるわけはなく、夜雨に景が無いとはいへまいけれども、土地の人達も、文人、學者といふ類の人達も考へることを忘れてゐた所を、八歳の梅園に一本刺されたのだと見られませう。梅園が景情といふ言葉を用ひたのでないことはいふまでもありませんが、雨のふる晩の景色といふことの怪

しいのが穎利な子供に感づかれたのでせう。梅園は豐後國國東郡富永村の人、前にいつた麻田剛立の父綾部絅齋等に學び、後天文學を研究し、一家の哲學を創建して、「玄語」八卷、「贅語」十四卷、「敢語」一卷等を著はしました。わが國で稀に見る頭腦のもち主でした。

知識の豐富であることは、その人の幸福であり、高い格質の表示の一つであります。併し其には正しいといふ條件を必要とします。更に其等が精選されてゐる、有機的になつてゐる、といふ條件が加はつて、その價値は更に大となります。國民、民族としても此がいはれます。其の正しかるべき、精選さるべき、有機的になさるべき途は、一應思考が加へられることです。咀嚼されたといつてもよいでせう。一應は疑ひ、思考の上で受入れたものに、その價値效用が存します。吾々の知識には自らの思考を經てゐないものが頗る多いといつてよいと思はれます。

吾々の知識には、自らの思考により、經驗によつて生成されてゐるものもありますが、多くは讀みもの、傳聞、教育、指示等さまざまの途で、外から受入れ又は入つて來たものです。これ等の外からの要素の大なり小なり加はつてゐないものはないといつてよいでせう。其等のうちには、自らの一應の思考が加へられた上で受入られてゐるものもありますが、その過程を經て居らぬ類のものが多く、殊に舊い時代から傳承されてゐるものにその例が多く見られます。

日常の會話、特に談論などに、古來の成句や、傳來の辭句などが用ひられます。そして其等には、少しく注意すれば得心の行かぬものが、その意味、內容を考へることが爲されず使はれてゐて、聽く者、讀む者もそれで得心してゐるのが少なくありません。二つほど例を出しませう。

「五十步百步」といふ語があつて、誰もがしばしば口にします。「その位のことは五十步百步の差だよ」といふ風にです。ところで私の友人の頭のよいのが、五十步と百步とは著明な相違だ、五十步百步だなどといふことのいはれるのは、頭のルーズなことを示すものだ、と批難しました。私もなるほどと思ひ、出典を知つて、そこでは、五十步と百步を大きい距離として扱はれてゐるのであることを知りました。「大言海」をみると、「幾分カノ差違ハアレド、先ヅハ同シ事ト云フ語」とあり、此が一般の用ひ方で、五十と百との差が至つて輕く見られてゐます。なるほど、これでは頭が精確さを缺いてゐるといはれるのが當然です。この辭句は漢籍からの借用であることは明らかであつて、彼地で本來このやうな數字の用ひ方をそのまゝ套襲してゐるのであらうとも考へられました。ところで、此の出典は「孟子」で、梁惠王の上篇にあつて、下の如くです。『兵刃既接、棄甲曳兵而走、或百步而後止、或五十步而止、以五十步笑百步則如何、曰不可、直不百步耳、是亦走也。』此で本來の意味は合理的なものであることがわかります。卽ち接戰の場合に、五十步逃げた者が百

步逃げた者を笑ふの不可であつて、その距離の上で明らかな、或は大きい差があるが、逃げたといふ點で先づ大差がない、といふのです。「先ヅハ同シ事」ではなく、「コノ場合ニハソノ差ハ意味ガナイ」といふことなのです。やたらに大差ないといふ場合の修飾辭に用ひるのは、不當です。

普通に用ひられるもう一つの言葉に、「百尺竿頭一步を進める」といふのがあります。いろいろに用ひられますが、論述などを進めて來て、一應打切つた上で、更に進めて言はんとするやうな場合に用ひられるのが普通のやうです。ところで一應考へてみると、をかしなところがあります。地上に百尺の標識があつて、其が或る限界になつて居り、そこまで到達した上で、更にそれから一步を進むといふ場合ならば、前のやうに用ひられて正しいわけです。ところで百尺竿頭は、百尺の長竿の頭、卽ち頂點で、その竿は立つてゐるのです。竿が地面が横へてあつて、人間がその上を渡つて行つて、終點に達し、そこで更に一步、卽ち地面の上に步み出すといふのではありません。そんな妙な比喩のあるわけはありません。百尺竿頭云々といふ語は禪門の語で、百丈竿頭ともあります。種々の語錄等に出てゐる由ですが、「無門關」には『百尺竿頭坐底人、雖然得人、未爲眞、百尺竿頭須進步、十方世界現全身』、「傳燈錄」には、『百丈竿頭人不動、雖然得人、未爲眞、百丈竿頭須進步、十方世界是全身』卽ち、修業を積んで、最上位の禪的境涯に到達し得たところの得人に對して、まだ最後の一段が缺けてゐるぞよ、といふ垂示です。その人は百尺竿頭に座してゐるのである

から、一歩を進めるといふのは足で歩み出すことではない。手につくものも、足につくものもない大空中に躍り出ることです。禪のことに私は無知ですが、一切を放棄して絶對境に入れといふやうな意であらうと思はれます。

右の二つの言葉などは、たいした意味はもたず、語呂、調子、景氣づけ等に修飾的に用ひられるのでありますが、氣がつかずに間違つたことをいつてゐるといふ缺陷を、私はいふのです。

右のやうな修飾辭が吾々の口や筆にへばりついてゐるのは、いふまでもなく漢籍學習の因襲の表らはれです。其の表面的な受用と器械的の素讀の後遺症です。四字の姓名を三字にいひ、荻生徂徠ですまさずに物茂卿といひ、東夷物茂卿とまでいつた狀態、孔子が總大將、孟子が幕僚長になつて唐土の軍勢が攻めて來たら如何致す、と質ねられて、致し方も御座らぬ、軍門に下るほか御座るまいと答へたといふ狀態。こんな時勢に漢籍の辭句がそのまゝ口にも筆にもされたのは自然です。其をいまだに脊負つて廻はつてゐるのです。其が正しい用ひ方なら修飾にもなりませう。右のやうなものであつては、思考の態度の吟味の良材料にされる類のものでしかありません。

明治となつて西歐崇拜ともなれば、漢籍が歐書に代はつて、またまた同じやうな樣相を呈しました。犬養木堂氏の談だとして親近の人がいつてゐたことですが、木堂氏などの在野活動の旺盛期には、演說をする時に外國人の言葉をいへば有效でした。それで「コツプ氏曰く」とか、「ブランデ

ー氏曰く」などと即席的にやつたものだといひます。近年だつて、樣式と體裁こそ變つて居れ、同じ類のことはないともいへますまい。

以上は辭句の話ですが、和漢の文獻、史籍の內容に就ても同じやうなことがいはれませう。純眞で因襲といふもののない子供の頭には、よくわからぬことがいろいろありました。質問すれば、答は與へられずに、質問そのものが否定されたものです。自身で本が讀める頃になると、頭は環境化してしまつて、疑問は出なくなつて來ます。秦の始皇が書を焚き儒を坑にしたといへば、その時あつた書物がみな灰にされて、壁に塗り込んであつた孝經一部だけが殘り、儒者は一人殘らず殺されたやうにあつさりと受入れて、ひどいことをやつたもんだなどとは感じても、本當の話だらうか、とは思はないやうな頭になつてゐます。

子供の頃に、唱つてゐた唱歌の一つが蒙古襲來、弘安夏の役の歌でした。それには「十萬餘騎の敵」「殘るはたゞ三人」とあつて、十萬餘騎を乘せた船が覆沒して、たゞ三人が生命を全うしたものと思ひ込んでゐました。そして、十萬餘騎といふからには、敵は馬上の兵で、蒙古軍のことであるからさうであつた筈で、十萬頭もの夥しい馬も船に乘つてゐたわけであり、十萬餘の騎馬軍が九州に上陸したらどんなであつたらう、などと考へたものでした。

先年、歴史上の戰爭の形態を調らべてみようとしたことがあつて、その際に、この役の數字を吟味してみました。蒙古軍は朝鮮と本土とから二手になつて來たのであり、兵數は、高麗の合浦に集合して來た東路軍が四萬、本土からのが十萬とあります。合計十四萬。この數字と交戰區域とを相對的に考へると、疑つてみたくなります。日清戰役の我軍の總兵力が二十萬でした。先づ考へてみたいのは、軍船の數と兵員數の釣合です。軍船の數は江南軍三千五百といはれてゐるので、一艘當り平均二十九名弱です。武器、糧食を併せて考慮してみて、この數字は常識的に合點出來ます。大きさは現在見てゐる大きいジャンク位と見てよいでせう。「蒙古襲來繪卷」などから想像してもそれでよいやうです。江南軍三千五百艘とすれば、東路軍一千五百艘と推算されます。合せて五千艘。そして少なくもその大部が一回の颱風の猛烈な作用を受ける限界内にあつたわけです。颱風の猛威圏は、幅の狹いものです。「諸船皆な撃撞して碎く」とある文句の撃撞をそのまゝ受取れば、相當に密集してゐたことになつて、理解が出來ぬこともありません。また軍船は高麗と本土と双方で造つたもので、高麗では工人が誅求に苦しんで粗造でごまかし、本土ではまた「幣を隱す」即ちくすねたので、船體が脆弱であつたといひますから、存外他愛もなく破船したのかも知れません。それにしても損害は全滅といふ程度であつたとは思はれません。

蒙古軍十四萬の來襲と一口にいへば、我軍に利あらずして、其等が上陸したら、十四萬の大軍で

あるやうに、早合點されます。渡海船隊であるから、水夫が多數にあるわけです。十四萬といふのには其等が含まれてゐるのか、如何か。含まれてゐるものとすれば、陸上の戰鬪力としては、其等を差引いた數でなければなりません。此を計算するに都合のよい數字が、池内博士の書かれたものにありました。「高麗史」に「東征軍九千九百六十名、梢工、水手一萬七千二十九名」と出てゐるといふのです。即ち合計二萬六千九百八十九名で、東征軍四萬といふのとは、約三割の開きがあるが、戰鬪員と非戰鬪員の比が一〇對一七であつて、戰鬪員は三割七分しかないのです。當時の船舶の構造や運用法から考へて、まさに然るべき筈です。そこで江南軍でもこの割合が同樣であつたと假定すると、十萬人中に三萬七千人の戰鬪員があつたことになり、其が十四萬中五萬二千人であつたことになります。また東征軍の九千九百六十名を正しいとし、其が四萬といはれてゐることが、江南軍でもその通りであつたと假定すると、約六萬八千であつたことになります。そこで兩軍の總員九萬五千人。それ等のうち戰鬪員が三割七分とすれば、全軍が上陸したとして三萬五千餘といふことになるわけです。

以上のやうに計算してみると、蒙古勢十萬餘といふものの三割强で、弘安の役の概念がだいぶ變つて來ます。生還者の數に就ては「師を喪ふこと十に七八」といひ、また此に近い記事がある由で、前記の「高麗史」の文の續きに、「生還せる者一萬九千三百九十七名」とある由です。總員數二萬

六千九百八十九名に對して約七割二分に當つてゐます。東征軍に關する限り、十の七八といふのが當つてゐます。船でも大體此に準じて航海に可能なものが殘つたのがあつたのでせう。さすれば颱風の被害の知識とも一致します。最後に、殘るはたゞ三人といふこと。此は、三名を捕虜としたといふのであるかも知れず、たゞ殆んど無かつたといふのかとも思はれます。

蒙古襲來の事件は、右の通りに大體納得の出來るものです。このやうに吟味すれば、その結果はさまざまで、解釋を改めねばならぬものも出て來る筈です。重ねていひますが、歴史、文獻を斯く取扱ふべしといふことが、こゝでの目的ではありません。ものごとは一應考へて受入れるべきであるといふことをいはんとするのです。

前に名を出したトマス・ヘンリー・ハックスリーを、私は十九世紀の生物學者中の最も大きい人物、最も科學的な頭腦のもち主と考へてゐます。ハックスリーは自らを造り上げた學者です。その最初の大きい修業が濠洲探檢船乘組みでした。貧家に育つたハックスリーは、二十歳でロンドン大學を卒業して醫者になつて、海軍に奉職しました。そして二十五歳の一八四六年の暮、探檢船ラットルスネークに副醫官兼博物家として乘組んだのでした。ラットルスネークの濠洲探檢航海は、同年十二月から一八五〇年の十月まで三年十箇月。この探檢航海中の不自由な裡での研究がハックス

"Strategic Skepsis"

"An active Scepticism is that which unceasingly strives to overcome itself and by well directed Research Doubtam to a kind of Conditional Certainty."

リーを學界に堂々と頭を出させ、その間の苦難が人間ハックスリーを作り上げたのでした。この探檢航海中の日記が、先年孫のヂュリアンの解說を附して刊行されました。此は稀に見る面白いものであり、まことに貴い人生記錄です。

ハックスリーがその日記の一冊の表紙裏にマキシムとして書いてゐたものが、この書に載せてあります。上に掲げたのが其です。卽ち首行にテーチゲ・スケプジスと獨逸語で書いてゐます。ハックスリーはこの日記に、獨逸語、佛蘭西語を突飛なやうに書きまぜてゐて、そして其が特に有效に活きてゐる感じのするところが多くあります。私は「能動的懷疑」と譯してみました。次の本文ではアクチーブ・スケプチシズムと英語で書き、「能動的懷疑とは、其自身〔懷疑〕を征服することに止むることなく努力すること、而して適當に方針

づけられた攻究によつて、條件づけられた確かさの一種に到達することである」と誌してゐるのです。即ち懐疑といふ態度を設定して、其を能動的懐疑といふ特殊なものであるべしと規定し、其が如何なるものかといへば、懐疑はあくまで征服すべく、止むなき努力を爲さねばならぬ。併しその征服するといふ努力の態度としては、方針づけられた攻究によるべく、その目標は、條件づけられた確かさの一種であるべし、といふのであると私は理解します。單に確かさとはいはずに、確かさの一種といつてゐるところに、ハックスリーの頭の確かさが表らはれてゐると思ひます。

Thätige Skepsis といふのは、ゲーテが書いてゐる言葉であることを、ハックスリーは後年の文のなかでいつてゐます。私は、その出典をまだ調ちべ出してゐません。ハックスリーが書いてゐる前記の内容が、ゲーテのいつていることとか否かも私には明らかでありません。何れにせよ、このマキシムの精神がハックスリーに於て、その全力を以て顯現されてゐることが、その諸論説に會得出來ます。

チャールス・ダーウヰンが「種の起原」を出した際、逸早く其に聲援を與へ、直ちに起つた多種の激しい論難のうちにあつて、進化説の闘士となり、オックスフォード論爭といふ舞臺がゝりの事件の主役を演じて、ダーウヰンの最も有力な支援者であり、「ダーウヰンのブルドッグ」といふ名まで得たのがハックスリーでした。このやうな立役者としてハックスリーは、徒らなる進化説、ダ

ーウヰン説の信奉者ではなく、またそれ等の單純な肯定者でもありませんでした。ハックスリーはそこに確かな限定界を劃してゐたのでした。強い能動的懐疑の態度をとつてゐました。ハックスリーは不可知論者（アグノスチク）といはれてゐますが、それでは、ハックスリーの眞面目は表らはされて居らぬのです。世にいふ懐疑的なるものとは異なるものであつたのです。

ものごとは一應考へてみること、一應疑つてみること、そして思考には一定の限界での踏止りがあるべきこと、更らにその踏止りは思考の踏止りであつてはならず、それから先に闘して更に思考を延長させねばならず、その延長された思考の結果が、踏止り前のものと混同されずに、明瞭に區別されねばならぬ、といふのが私のいはんとしたことでありまして、この踏止りの先の思考の點が私の特にいはんとするものであり、ハックスリーのいふところの、條件づけられた確かさの一種で其があるべしといふのであります。

三　科學的——非科學的（三）

呪の科學性

以上、科學的であることの內容、科學的であることの態度に就て、若干の吟味と雜談を試みて來ました。そこで、これから實例をとつての審議に入らうと思ひます。その材料としては、非科學的らしさの著明なものを選ぶことにしました。卽ち、先づ狐憑きなどの事例を取扱ひ、更に最も非科學的のもののやうに思はれる、亡靈、幽靈などの一群の話を吟味しようと思ひます。此等に入る前に、こゝで一應、此等よりは科學性があると思はれてゐる、いはゞ中途半端なものである、呪（まじない）に就て詮議をして、前の諸章と以下の諸章の橋渡しにしようと思ひます。

呪といふものは種類も數も澤山あります。地方性の濃いもののやうですから、全國を通じて調べれば恐らく夥しい數に上ることでせう。其等のうちには、なるほど有效である筈だと會得の出來るものがあり、何かわからぬが效果のある理由がありさうだと思はれるものもあります。また或るものでは、そんな效果も理由もありさうに思はれません。

效きさうに思はれない呪にしても、それ等をたゞ嘘だ、無稽だと斥け、笑ひごとにしてしまふのは輕率で、それこそ非科學的でせう。考へてみれば、虚言を平氣でいひ、人を騙して喜ぶやうな人物も無くはありませんが、昔の人達が眞面目で語り傳へてゐたことに、全然效果のなかつたものが多く物あらうとは思はれません。多少なりとも效果があつたればこそ口傳され、後人に傳はつてゐるのであつて、全然出鱈目なものであつたら、傳はり廣まつたわけはない、と考へるべき筈です。こゝにこれからの課題があります。

生理的、物理化學的に說明される、有效な呪がいろいろあります。二つ三つ例をあげてみようなら、眼に小さい異物が入つた時の呪に、その眼と反對の側に、舌を强く下方に向けて出せ、といふのがあります。私はいつも實行してゐて、まことに有效です。此は、舌の異常な運動が動眼筋肉か或は其他の筋肉に作用を及ぼして、眼窩内壁と眼球の間に特殊な空隙を生じさせて、小異物を痛みを感じさせない位置に移つて行くやうにするのであると思はれます。

小さい火傷（やけど）の呪がさまざまあります。其が廣くて深い場合は別として、指や手などを火鉢の火やマッチの火で火傷したやうな場合には、すぐ水などで冷やせば水胞になり、痛んで治癒が遲れます。灰水に浸すことが普通行なはれますが、墨を濃くすつて、筆のさきで丹念に塗るといふ呪があり、實行して結果がよろしいものです。膠と微細な炭末からなつてゐる墨汁が傷面に膠質

膜をつくり、冷やすことにもなつて、有效なのでせう。筆で丹念に塗るといふことにも意味があり、含まれてゐる香料なども意味があるかも知れません。これだけでは、呪といふよりも民間療法といつた方が當つてゐるのですが、墨汁を「たむし」の治療に用ひる方法になると、同じことが呪の樣式をとることになります。後に述べます。

呪の成生にはさまざまあつて、なかには特殊なものもある筈です。その一つと思はれるものをあげます。昔、武家で鎧具足の櫃のなかに、春畫帳を入れて置く風があつて、陣中での武運の呪とされてゐたといふことです。この呪を、坪井正五郎博士が次のやうに解說されたのを讀んで、なるほどと感心したことがあります。此は巧みな口實であつて、春畫を所持する爲めの方便として考へ出されたものであらう、といふのであつたと記憶します。なるほどうまい考で、適切な說明です。そして私は、それ以上に意味、效用のあつたものだと考へるのです。世間的に呪ときまつて居れば、何人にも遠慮なく自らの座近く備へて置くことが出來たのであつて、必らずしも陣中とは限らず、天下太平の御時世に、時々取出して眺める途ともなつた筈です。

春畫は今は其の賣買が法的に禁止されてゐるのでせうが、所持することはあまりやかましくないやうです。昔はそのやうな取締りがあつたわけではなくても、此を所持してゐることは、特別な社

會や、特別な人物以外では、體面上出來ないことなので、何かうまい說明の途がつけられて、所持したり、眺めたりしてゐて、みつかつたりしても、說明の出來る途があれば、よろこばれたのは自然のことです。美術品だといふ說明も一つの途で、知名な畫家の筆だと稱し、美々しい高價な表裝をするといふやうなことも、一つの途であつたでせうが、此は特殊な階級の者に限つて出來ることで、此を呪だとすると誰にも出來て、萬人向きになります。上流社會の嫁入の時に、衣裳箪笥のなかに美本として入れてやつたもので、魔除けの呪といはれてゐたといひます。他に本當の目的があつたのです。先年教育界の某大家が懷中を掏られた贓品が出て、警察で調らべたところ、此が出て來たといふ話がありました。何かの呪であつたのでせう。

呪で注意さるべきことの一つは、此が精神作用と關係が深いと思はれることです。精神感動が內分泌腺の機能や、植物性神經の働きに感作を與へ、外分泌腺にも影響することは、認められてゐることであつて、症候、病變に其の影響が現らはれ得ることは確かです。また疼痛などの場合に、本人に痛くないのだといふ絕對の信念があれば、痛感のないこともあり得る筈です。從つて、總ての人に有效である呪もあり、また甲には有效であつたが、乙ではまるで無效であるといふものがあり得るわけです。このやうな場合に、その呪は有效だといつてよく、そしてまた無效だといつても間

違ひではなく、一概に有效だ、無效だといふのこそ間違ひでありませう。船に醉はぬ呪があります。後に述べますが、私はこの類の一例と考へます。

呪の效果といはれるものには、偶然の結果があり得ます。後にあげる一例に、木につく油蟲の豫防法に、「前錢十六文」といふ建札を立てるといふのがあつて、有效だつた經驗談が書いてあります。此は昆蟲の油蟲卽ち蚜蟲を、人間のあぶらむしといはれる、木戸破りの輩に見立てた、語呂地口で、まじめに受取れる話でないのですが、有效だつたと考へられたことに間違ひはないのです。その札を立てた木に必らず油蟲がつくとは限らぬのであつて、來るのも偶然、來ないのも偶然である筈ですから、木戸錢を拂へといふ札を立てたことに對して、二つしかない偶然のうちの、來ないといふ方が生ずれば、呪は有效だつたといふことになります。玆で注意すべきことは、效果がありさうでない呪を、ひやかし半分の氣持で行なつてみた結果、其が意外に有效であつた場合の當人の氣持を考へると、その效果が異常に興味深く、或は重要に考へられるでせう。そして其が話され、吹聽もされ、誇張していひふらされたりしたのが無理でないわけです。このやうにして呪の或るものは傳承されたのでせう。

呪は多いが、類別すると多方面には汎つてゐません。人體の病氣や故障に關するものが最も多いやうです。第二には、動物の扱ひといふべきもの、例へば有害な動物の驅逐の如きもの、第三に物

理化學的の現象に關するものです。何れにせよ、吾々の生活に不利、有害なこと及びものに對する對策や方法の範圍内にあるといつてよいやうなものです。そしてまた、發生、存在の理由からみても左様であるわけと思はれます。

私は、この章での實例評議の材料として、「耳袋」といふ筆錄書から其を採ることにし、そして三四の他の材料を適宜に加へて行きます。「耳袋」は江戸町奉行根岸守信の著で、安永の中頃から文化の末まで三十年間の世上傳聞の筆錄です。私はこの「耳袋」に興味をもち、筆者の守信に敬服してゐるのでありまして、以下の三章では、專ら此を材料とするのです。この書の内容、性質、筆者守信の人物等に就ては、次の章で申す方が適當と思はれるので、あと廻しにします。

「耳袋」には呪の記事がなかなか多くあつて、前記の分類にすると、人體に關するものが二十五項、動物に關するものが九項、物理化學的のものが四項です(妙藥といふ類のものは除いて)。以下に其等を列擧して、私見を加へて行くことにします。

第一に、人體に關するものでは

(一)肴の尖不立呪文の事　或人語りけるは、魚肴に不限、尖の不立、またたち候ても拔る呪成とて、トウキセウコン萬物一體、かく唱ふれば奇驗有と傳授なしけり。

(二)咽へ尖を立てし時呪の事　小兒など咽へ魚の骨を立てゝ難儀の時、鵜の鳥の羽がひの上に背置いて骨かみ流せ伊勢の神風と、三遍唱へて撫づれば、拔ける事奇々妙々の由、或人語りける也。

(三)鼻血を止める妙呪の事　鼻血出る人左より出れば己が左の睾丸を握り、右なれば右の睾丸を握り、兩様なれば兩睾を握り候へば、感通して立所に止る由。呪ふ人女なれば乳を握りて呪ふに妙なる由。

(四)しやくり呪の事　しやくりを止めるには、其人の口をあかせ、右口の内へ宗といふ文字を三度書けば止まる事妙也と、人の語りし故爰に認め置きぬ。

〔按〕(一)(二)は、あわてずに、落ちついて、條件を悪化させずに、自然に拔けるやうにする點に效果があるのでせう。豫防になるといふのですが、呪をするほどに注意して喰へば、骨や尖のたつことはありますまい。

(三)は内分泌作用、植物性神經と關係があるやうに思はれます。睾丸も乳房も共に感覺と作用の大きい器官です。

(四)は生理的に説明が出來ます。普通の噦は、痙攣による横隔膜の週期的の異常運動に由るもので、その運動を一つか二つ抑止すると、それで平常に復するものです。この理に當嵌まる療法がいろいろあります。ぴつくりさせる方法などもその一つです。

最も確かな方法として、兩手の母指で兩鼻孔をふさぎ、第二指を兩耳の孔に强くさし込んで、大茶椀に一杯に入れた水を飲むといふ方法があります。此は鼻耳口からの呼氣を全部一時出ないやう

にして、出て來る嗾を押戻すのであつて、それで横隔膜の異常運動が一回押へられゝば、それで異常運動が止まるのです。(四)では、口を大きく開いて、鼻耳口の呼氣を止めるので、右の方法と同理なのです。口の内へ字を書かれるので、舌根をますます引込めるので、いよいよ氣道が閉ぢるやうになるのです。この方法には、一定の時間、即ち反復間隔の二倍だけの時間續けることが必要で、それ以上は不必要なわけです。宗の字を三度書く時間が其に當つてゐるわけです。

(五)いぼの呪の事　いぼの呪品々あるなれど、三ヶ月へ豆腐一丁備へ、念頃に祈る時は、その直る事妙なり、右豆腐は川へ流し捨る事なり。あやまつて其豆腐を喰者は、いぼその喰物へ生ずる事又奇妙の由、人の語りぬ。

(六)いぼを取る呪の事　雷の鳴り候時みご簿にていぼの上を二三遍はき候へば、奇妙にいぼとれ候由。ためしみしに違はざる由人の語りぬ。

(七)又　黒胡麻をいぼの數ほどかぞへて土中へ深く埋め置き、右胡麻腐れてしまへばいぼも失せ候也。深く埋めるは芽を出さず腐らすためなり。

〔按〕いぼの呪は頗る多くあり、また理窟ばなれのしたのが多くあります。治り難いもので、本人にとつては不快なものであり、また意外に消失することのあるものであるからでありませう。これ等は何れも説明は思ひつきません。

(八)田蟲呪の事　たむしといへる出來物に、鳴といふ文字三邊書て、墨にて塗、呪ふに、立所に癒し

とかや、鳴は田の蟲を食ふものなる故や、呪の類かゝる類多し、不思議なりと一笑なしぬ。

(九)たむし呪の事　田蟲を愁ふる者、唐墨を濃くすりて田蟲の上へぬり、右の上へ紙にて押候へば、右墨紙へうつるを、右紙を燒すてぬれば、立所にたむし直るなり。

(一〇)もののもらい呪の事　障子につばを以指にて穴を明け、右穴へ出來ものある目をおし付、庭の方を見出し、右目のとまる所へ三火づゝ灸をすゆれば、其夜より快事奇妙の由、平田翁のかたり給ひし。

〔按〕墨汁の火傷に有效なことを前に書きました。たむしの場合は、病原菌の作用であつて、火傷とは性質が違ふのですが、搔かずに、刺戟しないことが大切といふ點で同樣です。鳴といふ文字を書くのは、玆に書いてある如く、鳴が田の蟲を喰ふといふ語呂から來てゐるので、效果は墨を丹念に塗ることにあつて、膠の膜が出來ること、痒感が減ずること、從つて搔かぬこと、などが考へられます。私のきいてゐる火傷の注意は、太くない筆で丹念に塗れ、といふのですが、これでは單に療法です。鳴といふ字を書くこと、しかも、それを三度といつてゐるところで呪になり、そこで心理的に效果が高められるわけで、呪の値打がこゝにあります。(九)の紙のことは無くてもよいのですが、呪の效果は此によつて精神的に增されるのです。唐墨がよく效くらしいのは、膠や香料などの關係があるわけです。

ものもらひの呪もいろいろあります。私の知つてゐるのに、細い木片で疊の目の上を强くこすり、あつくなつた時に局所の上を二三回なでるといふのがあります。ものもらひは自然に治るもので、

手を觸れ、特に氣にしていぢるのが悪いので、患部に手を觸れないやうにさせるのが要點のやうです。障子紙は特殊な冷たさをもつてゐて、それで病感を靜め、其を自然治癒の轉機にさせるのでせう。

(一一)口中痛呪法の事　口中痛候は、何によらず漱候節、右うがひの水を左の手にうけ握りて、肥後の國三の君と三箇唱へ、又念佛にても題目にても三五箇唱ふれば、即時に快驗ありと、或る角力取の町の與力新五郎へ咄しけるを、埒もなき事と思ひながら、新五郎齒痛み苦しみし時、かく唱へぬれば忘るゝ如くなりしと、長僕ともへ申ける由ゆゑしるし置。

(一二)燒床呪の事　大澤に大蛇がやけておはします、其水を付けるといたまずうまずひりつかず、右の通り唱へて水をかけ洗へば、極めて痛みを去ると、人の物語也。

(一三)寢小便の呪法の事　或人語りけるは、男女に限らず、新葬の佛を厚く信じ、朝夕怠らず日數を極祈りぬれば、彼やまひを除く事奇々妙々の由かたりぬ。埒もなき事ながら、かたりし人我もためしつる事ありと申ぬれば、こゝに記しぬ。

(一四)吐血を留る奇法の事　吐血とまらざるに、童便を飲でよし、しかれども、宿に小兒なければ他よりもろう時はさめてぬるく、心持を損ず、其時は其身の小便を飲でよし、右は予が親友山本某、文化の六の年春吐血して、色々藥を施しけれど其しるしなし、或醫師右の法を傳へける故、飲けるに、早速留りける由、其の身の小便も、始めて通ずるはしほはやき强く、中半を飲ば少し飲よき由、朝なと留りたるは彌歇にくきと、山本かたりし故、ある官醫に其事かたりけるが、隨分醫家に其法ある由語りぬ。

〔按〕(一一)(一二)は精神感應で疼痛を感じないことがあり得るといふ說明が可能でせう。

寐小便は原因的に一通りのものではないので、習慣性のものもあります。尿意頻回の人などでは、習慣性のものが多く、自然に治る例があり、暗示療法なども有效です。精神療法の效果は考へられることです。新葬の佛と限定し、日數を定め、朝夕怠らず祈るといふのは、精神感動を集中的にし、强度化するに有效な筈です。

(一四)吐血といふのが不明確ないひ方ですが、場合と狀態によつては無效とは思はれません。先年ビタカムファーの研究があつて、若い男子の尿、即ちこゝでいふ童便に、カムファーの强心作用成分が存することが知られて來て、實際に適用せられてもゐるのです。

(一五)疱瘡病人まどのおりざる呪の事　疱瘡の小兒、數多く出來て俗にまどおりると唱へ眼あき難き事有り。兼て數も多く、動膿にも至らば眼あき難からんと思はゞ、其家の主人拂曉に自身と井の水を汲みて、右病人の枕の上へ茶碗樣の物に入れて釣置けば、始終まどのおりるといふ事なし。天一水を以て火毒を鎭むるの理にも有らん。瘡數の多き程右器の水は格別に減り候事の由。眼前見たりと予が許へ來る醫師の物語也。

(一六)同眼の閉付きてあかざるを開く奇法の事　疱瘡の後、かせなどに至りて眼閉ぢてあかざる時は、あはびのしの頭の黑き所を水に浸し、外へ障らざる樣睫毛を眼尻の方へなづれば、開く事立所に妙なりと、是又右醫師の傳授也。

(一七)疱瘡呪水の事　寛政八年の冬より九年の春へかけ疱瘡流行なして、予が許の小兒にも疱瘡有りしが、兼て委任なし置きける小兒科木村元長來つて、此頃さる方へ至り其一家の小兒殘らず疱瘡なりしが、

何れも輕く少々重きも足などへ多く出來て面部等は甚だ少き故、かく擯ひて輕きも珍らしきと言ひしに、外に仔細もなけれど、神奈川宿の先に本牧といへる所に、芋大明神といへるあり。彼池の水を取りて小兒に浴びすれば疱瘡輕しと人の敎に任せし故にやと語りしが、醫の申すべき事ならねど、害なき事故呪もなき事にも有るまじき間、試み給へかしと語りける故、召使ふ者に申付け取りに遣りしが、右召使ふ者歸り語りけるは、誠に聊かの祠にて、廻りに少しの溜り水といふべき池ありて、鳩少々ありて柳一株の外は殘らず芋にて、右芋土の內より出て居り、正月の事なるに未だ莖葉のあるもあり、別當ともいふべきは、右池の邊に庵室ありて禪僧一人居たりしが、右社頭に緣起記錄もなし。疱瘡によきとて度々水を取りに來る者夥しき事の由、利益ありや知らずと禪氣の答のみなりしが、近隣の老婆右召使ふ者に語りけるは、右芋は彼姥が若かりし時よりへりもせずふえもせざる由。或人疱瘡に水よりは芋こそ然るべしと右芋を取りしに、かの小兒甚だ惱みけると語りし由。江戸よりも水を取りに來る者數多なりと語りける由。右召使ふ者語りける也。

〔按〕疱瘡は年々流行して、恐れられた病氣です。自然此の豫防及び療法の呪が數多くあります。（一五）では、病兒は茶碗を見てゐます。そして、まどがおりないといふ信念で見てゐるのです。自然眼をあけてゐることが多い筈です。その信念――本人並びに他の者のも――を强化するのに、主人が拂曉に自ら汲んで來ることが役立つてゐるのです。信心を以て見てゐるといふことが要點なのでせう。（一六）はマッサージに適切な物を敎へたのでせう。（一七）は、その時の流行で、病毒が弱い系統のものであつたのかも知れないといふ條件も考へられます。また、その特殊な芋といふ植物

に何か有效成分があつたのではないかといふことも考へられないこともありません。

（一八）疝氣を治す呪の事　或人のいへるは、疝氣を憂ふるもの、灰をいかにも細かにして箱やうのものの內におき、尻をまくりて右灰のうへえ胡坐すれば、睪丸の下りたる所、右灰へあたりて跡ふたつ附也、右灰へ灸を三十づつすゑれば、疝氣の根をたつとなり。是をためしける人奇々妙々なりとかたりぬ。

（一九）疝氣呪の事　京極備前守殿、久世丹後守疝積を愁ふるを尋ねて、けやけき事に取用ひもこれあるまじき事ながら、松平隱岐守在所詰の家來何某といへる者奇妙の呪をなす由。岩國紙一枚へ十二銅を添へ遣せば、あの方にて呪ひ右紙を差越し、勿論白紙の由、是を懷中なすに疝氣の愁なしと言へるまゝ、備前殿もむづかしき事ならねば是を求め給ひしに、其後疝氣を覺えざる由咄されしと、丹州語りける故、予も此病あれば切に尋ねしに、幸ひ寛政卯の夏江戸詰なせしと聞くまゝ、名前丼に求め方を紙し與れ候樣丹州へ頼み置きぬ。其後丹州も身まかり其事を果さず。

〔按〕疝氣といふのには、脫腸もあり、睪丸炎等もあるやうです。「跡ふたつ附」といふところが、脫腸でないことを思はせます。睪丸炎などは、治る治らぬは別として、少なくも氣持がよいでせう。灸をするのは、局部には直接にはするられないので、その影像を作つて、そこへするて、間接的效果を求めた考でありませう。

（二〇）痔疾呪の事　寛政八年予始めて痔疾の愁ありて苦みしに、勝屋何某申しけるは、小兒の戲れながら胡瓜を月の數求めて、裏白に狀を認め姓名書判を記し、宛所は河童大明神といへる狀を添へて川へ流せば、果して快氣を得ると敎へしが、重き御役勤むる身分姓名を、右戲れ同樣の事に記し流さんはならざ

る呪事也と笑ひしが、三橋何某も其席にありて、我も其事承りぬ。併し大同小異にて、胡瓜一つへ右痔疾全快の志願を記し、河童大明神と宛所して是も姓名は記す事也と言ひ、何れも大笑ひをなしぬ。

〔按〕前の(一九)と此は呪の特殊な代表的の型のものです。意味はないものです。河童は水中で人間の肛門をねらひ、ひとだまを抜く、といはれ、肛門と河童は結びつけて考へられることが強いのです。それで、肛門のことを河童にたのむといふ心理です。

(二一)病犬に食はれし時呪の事　病犬に喰れし時、生大豆を喰ふになまぐさき事更になし。升の角より右喰れし所へ絶えず水をかくる事也。生大豆なまぐさく覺ゆるを度として止める事奇法の由、人の語りぬ。

(二二)産後髪の抜けざる呪の事　婦人出産後夥しく髪の抜ける者あり。産濟みて枕にかゝり候節、髪の内ひよめきといへる所へ生鹽を聊か置く時は、毛抜けざる事妙の由、又一法に、出産後いたゞきを毛ぶるひを以てふるふ眞似なせば、是又毛抜け候事是なき由。

〔按〕(二一)は興味深いものですが、何ともわかりません。私の知つてゐる呪の一つは、赤豆を炊いて、其を食ひ、局部を其でなでた上で、道傍に置いて、犬に喰はせるといふのがあります。豆が要點になつてゐるやうです。

(二三)駕に酔ざる呪の事　駕籠氣する者、男女に限らず、道中は勿論遠方などへ行に、甚だこまる事あり、右の愁ある人、駕に乗んとする前に、盃を男子ならば左の袖へ入、胸の前を通し、右の袖へ出し、扨駕に乗れば酔ふ事なし、女は右の袖へ入、左の袖へ出す事なり、不酔事奇々妙なる由、岡松某の語り

なり。

(二四)船駕に不酔奇呪の事　附木を着座の下に敷、又は懐中なせば、不酔事奇妙の由。

〔按〕駕酔、船酔は同じものでせう。船酔の症狀には瞑眩、嘔吐、消化液の分泌異狀などがあり、精神的に自身で抑へることも出來るものです。責任の重い場合には酔はず、危險が極めて大きい場合などには酔ひません。同伴者や同乗者に船酔ひが出ると、自分も始めるといふ風です。酔はぬ、酔つてはならぬといふ自信や意志があれば、相當の程度までは抑へられるのです。それ故何かの呪を純眞に信じて、呪をしてゐるから酔はぬといふ氣持がしつかりしてゐれば、酔はぬのです。船酔の呪には、生理的に理解されるものもあります。陸前の金華山は多くの人の詣る名所で、その渡船は酔ふので有名です。その呪として、臍の窪に梅干を一つ入れて盃をふせ、その上から腹帶をしつかりと締める、といふのがありました。腸の蠕動と胃の動きを壓へて、横隔膜の擧上運動をとめるのであらうと思はれます。私は、横隔膜を下げ、腹壁を堅くするやうに勉めることが、有效であるのを經驗してゐます。梅干を入れることは精神に働らきます。

(二五)怪我をせぬ呪札の事　天明二寅年の春、御小姓を勤仕の新見愛之助といへる者、登城の折から九段の上にて乗馬物に驚きけるや、數十丈深き御堀の内へ馬と一所に轉び落ちけるが、怪我もせず、着服等改め直に登城せしと也。其後右の咄出て、何ぞ格別の守護等も有りしや。數十丈の所轉び落ちんに、如何にしても少しは怪我も有るべきに、不思議の事なりと言ひしに、外に守り樣のものもなかりしが、一年

不思議の事有りしとて、知行の者より差越したる守護札有りしとて、書付けて愛之助より右尋ねし者へ見せける由。右は同人知行の者、或日野に出て雉子を射けるに、其矢雉子に當りしと思へども雉子は惹もなく、敢て立たんともせざりし。弓術上手といはるゝ者共爭ひ射たりしが、外の雉子は弦に應じて斃るといへども右雉子に矢當らず、いづれも驚きて追廻し捕へけるに、羽がひに左の文字認め有りし由。〔略〕右の文字を書きたる札百姓の興へけるを、其儘に懐中せしと物語の由。何の譯に候や。文字も作り文字と相見えわかりがたけれど、其頃貴賤となく小兒などにも懐中させしなり。

〔按〕偶然の合致の例です。このやうな事件が話題になり、宣傳されて、呪や守札などが固定的なものになつて行くのです。

第二に動物に關するもの

(一)油蟲呪の事　木の葉草の葉にあぶら蟲生じ、きたなげなるを、人々忌み嫌ふは常なり。予が知れる石川氏のもとへ、植木屋を呼て植替などせし時、彼油蟲の除方もあるべしと尋しに、いとやすき事なり、前錢十六文と認建札すれば、油蟲の愁なしといゝしゆゑ、滑稽にて申や、かゝる事あるべくもなしと笑しに、左思召さばまづ試に札を立給へと申ゆゑ、召仕ふ者抔へ申付、可笑事ながら札建しに、絶へて油蟲の愁ひなし、物見芝居など錢を不出見物するを、油蟲と諺に云るも、何ぞ子細やあらんと語りぬ。

(二)蟻を除る呪の事　人の咄しけるは、砂糖一斤半と札に書て、其所に立れば、蟻の出ざる事妙の由。誠に可笑事にて、何故一斤半と書や、わからざる事ながら奇妙之由人の語りし、呪はわからざる事にも其妙有事故、爰に記しぬ。

(三)羽蟻を止める呪の事　羽蟻出て止まざる時、雙六の後れの筒にうちまけて羽蟻はおのが負けたなりけり。右の歌を書きて、フルヘフルヘト、フルヘフルヘトと唱へ、張り置かば極めて止むと、興住氏の物語也。

(四)鼬の呪の事　金魚船又は據ろなき品など鼬の掛りて難儀せんには、左の如く書きて札を建てぬれば、其邊へは掛らざるもの也と或老人語りぬ。鼬の呪はたかんなのねぢきり也、これ五大明王のしるしならん。

(五)蜻蛉を捕ふるに動かざる呪の事　草木にとまる蜻蛉をとらへんと思ふに、右蜻蛉に向ひてのゝ字を空に書きて扱とらふるに、動く事なしと也。

(六)どぢやうを動かさざる呪の事　どぢやうを買ふ時升に入りても踊り狂ふ故、一升調へて外器へうつせば纔かなり。末の蓋を臍へ當て、白眼(にらめ)つけて計らせれば、頓て一倍なりと人の語りし也。

(七)田鼠を追ふ呪の事　寛政七卯年濃州の田畑に鼠多く出て荒しけるといへ、咄合の節、或人の曰く、田鼠を追ふ呪には、糠にて鼠の形を拵へ、板などに乗せて惡水堀などへ流すに、田鼠ども右に附きて行衛なくなるとかや。虚實は知らね共かゝる事もあるべきや。

(八)蜂の巣を取捨つる呪の事　蜂の巣を取捨つるに、箒を持ちて拂ひなどすれば飛散りて害をなす事也　蜂の巣を取んと思はば、右巣の下にある所の石にても瓦にても打返し、右を踏へ巣を取捨つるに、如何樣の蜂にても害をなさずとの事也。同老人の語りけるは、蛇の石垣又は穴へ入りかゝりしを引出さんとするに諸手を掛け力を入れて引くとも、たとひ蛇の胴中より切るゝ事はありとも引出し難きもの也。右を引出し候には、左の手にて己が耳をとらへ、其間より右の手を出し、指にて蛇の尾先を捕へ引出すに、こだはる事なく出るもの也と語りぬ。其業ためせし事はなけれど、右老人まのあたり樣(に)せしと語りぬ。

15468

(九)右の席にて柳生主膳正語りけるは、耳内へ百足の入りしは、中をも損ざし苦しきものゝ由。同人召使の者右の苦み有りしに、或人の曰く、猫の小便をさせば右蚓を殺し即效を得るの由、是を用ひしに早速恢復せし由、猫の小便をとるには、猫をぬりものなどの上へ捕へ置き、生姜をすりて猫の鼻の先へ摺付れば極めて小便を通ずる由。一事奇法故爰に記しぬ。

〔按〕(一)は前に例に出したものです。終りのところで、筆錄者守信は、人間の油蟲の意味を解してゐぬやうであるのは、常識家の町奉行として解せないことで、從つてこの呪の意味も解してゐなかつたものと思はれます。(二)では、出るといふのは現らはれることでせう。砂糖はよろこんで蟻の集まるものですから、この呪は、反說、アイロニーの性質のもののやうです。全くそのわけが解されません。守信も、こゝでは特に「呪はわからざる事にも其妙有事故」といつてゐます。

(三)(四)は、羽蟻と鼬を逐ふのに、立札を立てるといふ、前二者と同類のもので、札の文句を其等に讀ませる趣意なのですが、その文句の意味が私には解せません。

(五)は、捕へる前に一應氣を落ちつけさせる用意ではないかと思はれます。蜻蛉を捕へるのは大抵は子供です。見出して捕へようとする時に、どうしてもあせります。あせつては手もとが確かでありません。また不安定な狀態にある蜻蛉は、呪をしてゐる間に飛び立つこともありませうから。呪をしてもとまつてゐるのは捕へ易いわけとも考へられます。蜻蛉に催眠的の效果を與へるといふ

やうには思はれません。

(六)は、面白い呪のやうですが、本文に誤字か何かがあるらしくて解しかねます。

(七)は、田鼠の好きなものを與へて誘導して去らせるといふ趣向で、その餌の形を同類に似させるといふものらしく思はれます。

(八)で蜂を取捨てる法は解釋がつきません。蛇を穴から出し難いのは、鱗が逆立する爲めです。徒らに強く引くだけではますます逆立するわけです。蛇の頑張りの調子の都合で、適度な強さで引くことが有效なのでせう。この呪にあるやうな、弱い引き方が適當であらうといふことは想像されます。

(九)猫の小便が效くといふことは考へられます。玆で面白いのは、猫に小便をさせる方法です。塗物の上へ置くといふのは、尿を集めるに都合のよい爲めでせう。

第三の物理化學のものでは

(一)呪に奇效ある事　水に漬けし餅或は草あんびなど唱へ候品、あぶりこの上に乘せて燒くに、過半は右あぶりこへ附きて、其樣見苦しく、詮方無きもの也。此春兒孫に燒き與へんとて、はしたものなどあぶりこに乘せて燒きしに、かたの如く燒付きていと見苦しかりしを、召使ふ老婆見て、右は呪ふ事有りと

て、右あぶりこのこげ付けるを清めて、片手にあぶりこを持ち、我天窓(あたま)の上を三度廻して、扨火に掛けて燒きしに、一向こげ付き申さざる故不審に存じ、別のあぶりこを取寄せ、始は當の如く火に掛けしに、燒付きて見苦しかりし故、又清めて頭の上を三度廻し燒きけるに聊か損ぜず、誠に不思議なる事也と、老いたる人に語りければ、それは承り及びたる事也、あぶりこに限らず、鐵きうの上にて肴など燒くも同じ事也と語りし。天窓の上を廻すといふは、人氣を清める故の譯にもや有らん。いづれ理外の論なるべし。

(二)又　鱈或は鹽引其外鹽肴鹽ものゝ類鹽を出し候に、紙を四角に切りておのへ〳〵〳〵と置いて、右水の上に浮むれば立所に鹽出で候由、是又一人のみにあらず、我が知れる人一兩人語り侍る。

(三)新釜新鍋の鐵氣をぬく事　鍋にても釜にても、其の尻へ左の如く〔圖略〕墨にて十文字を引き、其墨の四方とまりへ西といふ文字を三字づゝ書きて用ふれば、鐵氣出ざる事奇々妙々の由人の語りぬ。

(四)蠟燭の流れを留める事　風の當る所、蠟燭片口出來て流れ候節、小刀の先にて叶といふ文字三遍書き候へば、流れ留まると或人の語り侍る。

(一)は有效でありさうで、理外の理としないでもよささうにも思はれます。本文では不明瞭ですが一旦燒きついた場合のことでせう。熱したのに水を注いで冷却させる方法です。(二)の「立所に」といふのは「早く」といふ程のことでせう。紙の吸收作用が意味をもつのであらう、と思はれます。(三)はわかりません。(四)は、文面では字を書く箇所が明らかでないが、流れる箇所に書くのでせう。左字に書くといふのは、時間をかけて徐ろにする方法であることが知れます。冷鐵の尖端で或る時間適當に低溫を作用させるのでありませう。效果がある場合のあるものと思はれます。

呪は昔ほど行なはれなくなり、或は殆んど行なはれなくなつてゐます。またその效能が昔ほどでなくなつてゐるに違ひありません。詳しくいへば、今も昔通りに效果のある呪があります。そして昔は效能があつたが、今は其のなくなつたものがある筈です。さればといつて、今效能のない呪が昔もその通りであつたと考へてはならぬのです。人達が理知的になり、物ごとを單純な無垢な態度で信じ込むといふ精神狀態が漸次に失なはれて來てゐるからです。呪には神經感應の結果に因るものが少なくありません。今は效能のなくなつた呪のあるのは自然です。徒らに昔の呪の話を笑殺し去つたりすることは許さるべきでありません。

四　怪異談の科學性（一）

怪異談のこと
耳袋とその筆者根岸守信
怪異談取扱ひの態度
怪異談の説明と復原

この章と次の章とで、怪異、怪異談といふものの詮議を試みます。それ等の事實、それ等の説話の思考の態度を詮議してみる仕事です。前章で述べたところの科學的、非科學的なる條件、其等に於ける限界性といふことを更めて考へてみる爲めに、適當な材料と思はれるが故です。

怪異談といふべきものの内容は多種です。傳説、民俗説話の類のうちにもあります。其等には原態が保存されてゐるのもありますが、世を經るに從つて變つて來、作り替へられ、地方的のものとなり、新らしいやうな内容の説話になつてゐるのも多數です。これ等のものは玆で取扱ふべき性質のものではありません。作爲が加へられ、修飾された物語、文學的作品の類も舊くからあり、ずつ

と舊いものは、作爲が無く、或は其が少なく、事實と信じて語られ書かれてゐたのであるでせう。これ等も茲では、材料にされません。後世の怪異談はシナの影響を著しく受けてゐます。それ等の說話乃至作品が、舊くからわが國に移入されて、わが國民に影響し、またわが怪異文學がその臭味を帶びて發達もしたやうです。これ等のものも、こゝで取扱ふべきものでないことはいふまでもありません。

茲での材料としては、吾々並びに吾々にあまり遠くない時代の日本人が、事實として、或は事實であらうとして、その頭に入れて居た、或は今も入れて居る怪異談です。これ等が隨筆、雜纂の類に見られ、其等には記錄風に書かれたものが相當に存します。

この種の說話で、記錄風であり、作爲は加はつて居らぬやうにみゆるものも、事實の體驗者が自ら筆をとつたといふ場合は殆んどないといつてよく、聞書きであり、更に何回、何十回の傳承の段階を經たものが多いのです。從て筋が歪められ、修飾が加へられ、追加されて居ることは自然で、材料として扱ふ上で充分に考慮されねばなりません。また道德的の說明が與へられて歪められ、或は當事者が明らかである場合などに、美談、逸話といふものに作り上げられたりして、大小の變更がなされてゐることも明らかです。前に出した大阪城の一番首の話に見るやうに、和軒と梅園が同じ話を取扱ひながら、その結末に於て別になつてゐるが如くです。材料に淘汰の必要であることは

申すに及ばぬことです。

私は茲での材料として甚だ適當であると思はれる一書を知りました。前に語つた根岸守信の「耳袋」です。前章で、この「耳袋」を呪（まじない）の詮議の材料としましたが、以下の怪異談でも亦此を材料にして行かうと思ふのです。前章で「耳袋」の內容が豐富であることに氣付かれたでありませう。怪異談に於ても左樣です。此が材料として適當であるといふ點の一つです。併しこの書物の重要な點がこれ以外にもあります。其等に就ては後に述べますが、要は筆錄者守信の頭腦と思考の態度に存するのです。この章では、「耳袋」の內容と筆者守信との兩者を詮議の對象とするわけです。

根岸守信は、農村から出て來て、百五十俵の微祿の家に養子になり、徒士から身を起して、佐渡奉行、勘定奉行、町奉行と、異數の立身をした人物です。絹行商をして江戸に入り、その途で盲の小坊主と道づれになつて、共に出世を誓つた。一方は町奉行になつた守信、一方の小坊主は後年の檢校塙保己一であつたといふ逸話がありますが、無稽の作話だといひます。佐渡奉行になつたのが四十臺。天明七年、五十一歳で勘定奉行になり、寬政十年、六十二歳の時江戸町奉行に轉じました。このやうに財政、司直の要職に座つた人物です。肥後守に封じられ、歿したのが文化十二年、七十九歳でした。以上だけでも異色のある人物であることが想像出來るのですが、大工だつたといひ、

また車力業をしてゐたともいひ、雪隱大工であるとか、大八車の後押しといふやうなことも書かれてゐます。學は深くなかつたが、健實で、誠實、勤勉な人物でした。松平樂翁に愛されたといふことなども、人物の一端を表らはしてゐると見られませう。「其の訟を聽く明斷にして公平、世擧と之を稱す」、「人と爲り寛裕にして小事を屑とせず。平生使ふ所の屬吏の姓名だに一ヶ記憶せざるが如し。然れどもよく下情に通じ、選擧決して其の器を誤らず。人と語るに其聲甚だ大、毎にいふ、微言は謹愼に似たるも、其の私情を訴へ誹謗をなすの嫌あり」云々と書かれて居り、奉行としての逸話や言行が種々傳はつてゐます。武事の嗜があり、文筆の素養もあり、歌も詠みました。

「耳袋」は、守信が佐渡在勤中から筆をとつた見聞錄で、百話を以て一卷とし、卷を重ねて、晩年までに十卷一千話を集め上げたものです。(更に多かつたらうといふ說もあります。)その丹念さ、勤勉さに感服させられ、そしてその內容が獨自のもので、筆錄の態度にまことに敬服すべきものがあります。

「耳袋」の特色の一つは、其が文書からの寫しでないことです。「耳袋」といふ名が表らはしてゐるやうに、耳からの資料の集積です(若干の除外例はあるが)。そして其等は專ら奮くない事柄であつて、昔の人物の逸話とか昔話といふ類はまるで少ないのです。卽ち彼と同時代に生きた日本人の話してゐたことなのです。「耳袋」のその耳が物を聞いた時代は、安永の中頃から文化の終り近

くまで、明治維新前五十餘年までの三十年間ほどに當ります。も一つの特色は、その筆に文筆者臭がなく、漢學者臭、儒者臭がなく、修飾が加へられず、素朴に書いてあつて、文章としては缺陷が多く、前揭の引用で旣に見られたやうに、時には理解し得ないところがあつたり、文字の使ひ方が誤つてゐたり、勝手な當字を使つてゐたりしますが、內容を丹念に忠實に表現してゐます。讀みものとしては、無用なところが多いのですが、こゝでの材料としては、此も反つて貴重な點になつてゐます。話者の名が出してある場合も多いことも信賴を强めてゐます。私がこゝで此を材料にするに就ての大きい値打の一つは、その項目の多いことであり、また同じ類の話が相當に多いことです。しかし私がこの「耳袋」を尊重する所以は、以上に述べたやうな、內容の特質ばかりではないのです。あちこちに守信の思考の態度が表らはされて居り、そしてその態度に私は敬服させられたからであります。

「耳袋」は寫本として廣く行なはれたものの由で、其には二十通りもあるといふことです。そしてそれ等は何れも部分的である由です。先年「日本藝林叢書」に六卷本が採錄され、後に「岩波文庫」でも六卷本が刊行されました。兩者何れも六卷ですが、うち三卷が共通で、殘り三卷は一方にだけあります。共通な各卷にも多少の相違はあるやうですが、私は「岩波文庫」本の六卷は其により、「藝林叢書」本の三卷をとり合せて、九卷を材料にしました。十卷で完本だとすれば、一卷分

だけ不足といふことになります。守信は各卷一百項の豫定だつたといひますが、現行本では、各卷の項數に出入があつて、私の用ひた右九卷の項目は總計八百八十八項です。

前章で私は、合理的、理解可能、經驗、實驗等の條件に關して、人それぞれにこれ等が可能である限界、許される限界、人それぞれがそこまで進むべき、そして、そこに止まるべき限界のあることをいひました。そしてまた、一應止まつた上での、それから先の態度の如何が重要であることをいひました。その態度の問題は、專ら前記の條件に關する思考、實驗が肯定に導かぬ場合に生ずるものであつて、その態度を要約して、(一)眞實にはあらず、(二)眞實なるやも知れず、(三)眞實らしからず、といふ風に分けました。

私は「耳袋」で、守信に敬服した點の一つは、この限界外の事物に關する彼の態度なのです。「耳袋」には頗る多くの怪異談が採錄されてゐます。そして守信はそれ等の怪異談を取扱ふに當つて、多くの場合に、聞いたことをそのまゝ記述してゐます。批判を加へてゐない、いはゞノートです。然るに少數の例に於て、判斷を加へて、自己の考をいつてゐます。なほまた數箇の項目に於て、種々の怪異なるものの否定すべからざることを、標題に明記してゐるのです。その態度は、私の前にいつた第二の態度に當るものでありまして、其をば、「何々なしとも申し難き事」、「何々な

しとも極め難き事」といふやうに、味のある言ひ方をしてゐるのです。

守信が「なしとも極め難き事」といふ標題を掲げてゐるものが九項あります。その對象は、幽靈、妖怪、怨念、神祟り、不思議、前生、前表、夢兆の七種目です。以下にそれ等を轉載して、守信の思考に吟味を加へてみます。

(一)幽靈なしとも極め難き事　天明二年の夏の初、淺草あたらし橋外の町家の娘、武家にて候や又は町家にて候や、僧老のかたらひなして國ひものといへる樣に其親元へ預け置きしが、一子を生みて產後より血痨の樣に煩ひし故、右小兒は最寄の輕き町家へ里子に遣し置きけるが、右女養生叶はずして身まかりけるが、其夜かの里子の許へ至りて、門口より會釋せしまゝ、里親は右小兒を寢せつけ居たりしが能くこそ來り給へりと右里子を抱き見せければ、扨々よく肥り成人致したりとて抱取りて色々介抱し、斯く愛らしきものを捨てて別れんも殘念なりと言ひしに、里親夫婦心付きて、右女は大病の由聞きしに如何、不審なる事と存じけれども、最早火も燈す時分にて人影もさだかならざる折から故、火など燈しければ、右女も小兒をかへし挨拶などして立歸りけるが、其翌日親元より右娘夜前病死せる由知せ越しけるにぞ、母子の情捨てがたく心の殘りしも恩愛の哀なる事と、同町の醫師田原子來り語りぬ。

(二)幽靈なきとも申し難き事　予が許へ來る栗原某といへる者、小日向に住居して近隣の御旗本へ常に立入りしが、わけて懇意に奥迄行きしが、一人の子息ありて其年五才になりしが、至つて愛らしき生れ故、栗原甚だ愛して、往通ふ時は土產など携へ至りしが、暫く習信れざりし所、屋敷より今晩は是非來るべしと申越しける故、玄關より上りて勝手の方廊下へ行きしに、かの小兒例の如く出て、栗原が袖を引き勝手の方に行きしに、勝手の方に何かしめやかに屏風など建てありし故、病人にてもありしやと何心なく

通りしに、主人出て兼て不便がりし伴五歳になりしが、疱瘡にて相果てしと語りければ、驚きしのみにもあらずこはけ立ちしと、直々右栗原語りぬ。

(三)怨念なしとも極めがたき事　聖堂の儒生にて今は高松家へ勤仕せる、苗字は忘れ侍る佐助といへる者、壯年の時深川邊へ講釋に行きて歸る時、日も黄昏に及びし故、其家に歸らんも路遠しとて、仲町の茶屋に泊り妓女を揚げて遊びける。此仲町土橋は妓女多く繁昌しける。さて夜深更に及び、二階下にて頻りに念佛など申しけるに、階子を上る音聞えしが、佐助が臥しゝ座敷の障子外を通るものあり。頻りに恐しく成りて、障子の透間より覗き見れば、髪ふり亂したる女の兩手を血に染めて通りけるが、絶入る程に恐じく、やがて襟引冠り臥し、物音靜りし故ひとつに臥したりし妓女に、かゝる事の有りしと語りければ、さればとよ、此家の主は昔夜發の親分をなし、大勢抱へ置きし内、壹人の夜發病身にて一日勤めては十日も臥りけるを、親分憤り度々折檻を加へけるが、妻は少し慈悲心も有りしや、右折檻の度々彼が病身の譯を言ひて宥めしに、或時夫殊の外憤り右夜發を折檻しけるを、例の通り女房取押へ宥めけるを、爾々憤りて脇差を抜きて其妻に切掛けしを、右夜發兩手にて白刃をとらへ支へける故、手の指殘らず切れ落ちて、其後右疵にて墓なくなりしが、今に右亡靈や夜々に出てあの通り也。かゝる故に客も日々に疎く候と咄しけるが、夜明けて暇を乞ひ歸りし由。其後幾程もなく右茶屋の前を通りしに、跡絶えて今は右家も見えずと也。

(一)(二)の幽靈の話は、何れも、見た者は親近者、しかも特に親しかつた者で、同類のもの。共に筋が至つて自然です。(一)でやゝ誇張が加はつてゐるやうですが、なしとは申し難い事、極め難い事といふ言葉が、如何にも適切に感じられます。(三)は怨念の幽靈です。見たのは因縁のない人

物であるところが、前二話とは違つた要點で、別の類のものとして、重要なものです。但しこの話には、添加が疑はれますが、それ無しとも極め難い事であることは確かです。これ等は最も面白い材料で、後章で更めて取扱ひます。

(四)妖怪なしとも申し難き事　安永九子年の冬より翌春迄、關東六ケ國川普請御用にて、予出役して右六ケ國を相廻りしが、大貫次右衛門花田仁兵衛等を伴ひ一同に旅行し侍るに、花田は行年五十才餘にて數年土功に馴れ、誠に精身すこやかにしてあくまで不敵の生質なりけるが、安永十丑年の春玉川通へ廻村して押立村に至り、予は其村の長たる平藏といへる者の方に旅宿し、外々は其最寄の民家に宿をとりける。いつも翌朝は兩人も旅宿へ來りて一同伴ひ次村へ移りける事なり。花田其日例より遲く來りし故、不快の事も有りしやと尋ねしに、いや別事なしと答ふ。其次の日も又々予が旅宿に集りて御用向取調べける折からに、花田語りけるは、押立村旅宿にて埒なき事有りて夜中臥り兼ね、翌朝も遲く成りしと語りける故、如何なる事也と尋ねけるに、其日は羽村の旅宿を立ちて雨もそぼふりし故、股引草鞋にて堤を上り下りして甚だ草臥し故、予が旅宿を辭し歸りて直に休み申すべしと存候處、右旅宿のやうは本家より廊下續きにて少し離れ、家僕など臥り候處よりも隔りけるが、平生人の住まざる所にや、戸垣もまばらにて裏に竹數生茂り用心も宜しからざる所と相見え候故、戸ざしの締等も自身に相改め臥りけるが、とろ〳〵と睡り候て覺むる頃、天井の上にて何か大石など落し候樣なる音のせしに目覺め、枕を上げ見侍れば、枕元にさもきたなげなる座頭の、よごれたる鳩の單物を着し手をつき居たりし故、驚き、座頭に候哉と聲を掛くべしと思ひしが、若し座頭にはこれなしなどと申すまじきものにもこれなく、又全く心の迷にも有りやと色々考へけれど、兎角座頭の姿なれば、起上り枕元の脇差を取上げ抜打にと起上る内形を失ひしまゝ、心の迷

にあらんと、懐中の御證文などをも猶丁寧に懐中して、戸ざしの締等をも相改め、再び臥しけるが、何とやら心に掛り睡らざりしが、晝の疲にて思はず睡りけるや、暫く過ぎて枕元を見けるに、又々かの座頭出て、此度は手を廣げおほひかゝり居ける間、最早たまりかねて襖を取退け、枕元の脇差を取揚げければ又消失せぬ。これに依て燈をかき立て座敷内を改め見けれど、いづ方よりも這入るべき所もなきまゝ、僕を呼起さんと思ひけれど、遙かに所も隔るなれば、人の聞かんも如何と又枕を取侍れど、何とやら心に掛りてねられず。又出もせざりしが、全く狐狸のなす業ならんと語り侍る。

この話は、本人は「狐狸のなす業ならん」といつてゐますが、その事のあつた直時の本人の直話で、最もフレッシなものである點が貴重です。「誠に精身すこやかにして、あくまで不敵の生質」の從者の、筋の調つたこの妖怪の話を直接聞いて、「無しとも申し難し」といつて、踏み止まつてゐる、守信の態度は見事なものです。

(五)神祟なきとも申し難き事　玄端物語りけるは、同人壯年の頃、同職の者四五輩打連れて採草に出しが、新田大明神と號する義興の墳墓、今竹の植ゑある所にて、召連れし小僧草を採りしに、同伴の者差留めなどせしを用ひず、宿に歸りし後かの小僧口走りて、我が注連の草を採れる事の憎さよと罵り呼ばゝりし故、家内犬に驚きて右の草を元の如く戻しければ全快なしける由。英雄の怒氣凝然たる事なれば、後世神を殘す理も有らんか。

(六)不思議なしとも極め難き事　安藤霜臺の家來に何の幸右衛門といへる者有り、苗字は忘れたり。此幸右衛門初一人の男子有りしが、五六才にて甚だ聰明にて、文字などは年に合せては奇に認めしに、七

才にてはかなく成りし由。右の者死せんとせし前方に法名を付けるとて、郎休と申す二字を數紙書きし故、親々も忌はしき事に思ひ叱り制しけれど用ひずして認めしが、程なく相果てける故、菩提所へ申遣し、葬送の事など申送りければ、寺より法名を付けしに郎休と認め越しける故、此法名は家内より聞きし事にやと寺僧へ尋ねしが、いさゝか知らざる由にて、何れも奇怪を歎息せりと物語なり。

(七)前生なしとも極め難き事　紀州南陵院様逝去以前御送辭ありて、若し御逝去あらば岡の山といへる所に葬り奉るべき旨也。右場所は和歌山御城近くに有りし由。然る處御逝去に付、其場所へ御廟穴を掘りけるが、一丈餘も下りて一つの石槨あり。右石槨の内に一鉢一杖有りて外には何もなく、石槨の蓋に南陵の二字顯然と有けるが、其以前御法號は御菩提所より差上げしに南陵院とこれあり、誠に符節を合せたる事と、其場の人驚嘆し今も紀陽に申傳ふる由。安藤霜臺物語也。

(五)の話は、朋輩に嚇かされた氣の弱い小僧の恐怖感の結果と考へてよいでせう。守信はなほ外に、「人の禁ずることなすべからざる事」として同じ型の話を掲げてゐます。この場合、このいひ方が、當時としては、立派ないひ方であつたと思はれます。(六)(七)は偶然の一致の話で、一方は不思議といひ、一方を前世の問題にしてゐます。此等は共に安藤霜臺といふ同人の談ですが、單なる偶然ではないらしく、そしてまた何か理由のあつたこととも考へられます。子供と寺僧との生前の交渉が不明ですが、兩人が意識してゐたかゐなかつたかは別として、この文字を何かの樣式で少年が寺で見てゐて、眼か頭にあつたのではなからうかと思はれます。その時によく調らべれば、說

明の資料は出たであらうと想像されます。(七)の石槨の話は、その墓域は南位にあつたので、さう命名されたものと考へてよいでせう。そして、遙かに舊い時に、そこに或る貴人が葬られて、南陵と呼ばれ、其が埋伏して存在が忘れられてしまつて居り、新らたにそこに葬ることになつた時に、また南陵と呼ぶことにされて、偶合したとすれば、簡單に說明がつきます。南陵といふ名は、個人的の意味のない、平凡で普通な命名です。

(八)前表なしとも申し難き事　明和九辰年の江戸大火は都鄙の知れる事也。其頃日光神橋の掛替普請有りて、御作事奉行にて新庄能登守、御目付にて桑原善兵衛登山なしけるが、或日日光新宮に十神事といへる神事神樂ありて、兩士も右拜殿にて見物なしけるに、一羽の鳥虛空より鵲の如く新宮の白洲へ落ちて斃れけり。兩士を始め見物の者も立寄りて見しに、鷲鷹に追はれし氣色もなし、友鳥等もあたりに見えず、不思議也と言ひけるに、修學院權僧正も見物の席に有りしが眉をひそめ、嗚呼江府に何ぞかはりし事にてもなければ宜しきがと言ひしが、翌日に至りて江府より飛脚到來江戸大火の告あり、新庄桑原兩氏の江戸屋敷も右燒亡に洩れず有りしと、桑原善兵衛後に豫州といへる時語りぬ。予日光登山の節右十神事有りて見物に出し時も、修學院出席して、右の咄を修學院も語りぬ。

この話は偶合としてよろしいでせう。貴人や特別の人の死の場合、特殊な事件の場合などに、このやうな前表、前知らせといふ類のあつたといふ事はさまざま書かれて居り、話題にもなつてゐることが普通です。守信は、外に「前兆奇怪の事」として、次のやうな話を掲げてゐます。

前兆奇怪の事　大久保邊、大御番組の同心、石山某が妻、如何の譯と申事も是なく、深き井の内へ落入りしが、山の手の井戸故、至而深く、引上げ候而も、存命無覺束けれども、とかうして是をあげけるが怪我もせず、平生の通にてありしが、不思議なるは、翌年其日の時日もたがへず、頓死なしけるとなり。

此は偶合の特に顯著な例として興味があります。この程度の珍らしいことも少なくありますまい。

(九)夢兆なしとも申し難き事　本所石原に設樂といへる人召仕の女懷姙して三子を生みし事有り。即ち名を文藏孝藏忠藏と名つけて、今は早いづれも廿歲になりぬべし。右設樂の緣者たる石黑某語りけるは、物には自然と感ずる前兆も有るものかや。右設樂始め小十人組勤めて御城泊番に有りしが、夢に三子を儲けたる故名を何と付くべきや。文孝忠信といへど信は殘り三字へ渡りたる義也。文藏孝藏忠藏と付くべしと思ひて夢覺めたり。をかしき夢を見しと思ひしが、果して三子を儲けて其通り名を付けしとや。

夢兆といふ文字の解釋にもよることですが、この話はたいして不思議とは考へずともよいでせう。正妻でない召仕の女を懷姙させたので、このこと自體が自己呵責、苦惱の種になつてゐたでせう。しかもその上に、姙婦の腹が正常よりは大きかつた筈で、双兒であらう、ことによつたら三つ兒かも知れぬといふことになつてゐた、と想像してよいでせう。このやうな條件のもとで、三つ兒の夢をみるといふことは不思議ではなささうです。

敍上の如く守信は、怪異の事物に關して否定の手前で立止つてゐます。敬服すべき態度といふべ

きですが、あらゆる怪異なる事物に關して、このやうな態度一本で通してゐるかといふに、左樣ではないのです。守信は、一方では其の眞實性を否認する態度をしばしばとつてゐるのです。私はこれ等二つの態度が双方とも見られることに於て守信に敬服するのです。先づ守信は、怪異といはれるもの、怪異とされたものの正體が明かにされた例話を掲げてゐます。次の四話がそれです。

(一)人の不思議を語るも信ずべからざる事　房州小濱誕生寺は、日蓮出生の舊跡にて大寺也。其最寄に日蓮矢疵養生の窟あり。今は日蓮の像を安置して庵室あり。誕生寺は海邊なり。夫より海邊に付きて少し山へ登りたる所也。予川々御普請御用に付誕生寺へも詣で、右の岩屋へも土老の案内に任せ村移りの序立寄りしに、右岩窟の内、其邊には白く鹽の付きて居しを、所の者幷に召連れし者など申しけるは、此鹽は山上にて此通り生じ候事、偏に宗祖の悲願なれ。諸國より來る道者旅人等、此鹽を貯へ眼を洗ひ或は疵などを治す。至つて妙なりと語りぬ。實にも山上岩窟の内に鹽の生じぬる事不思議と、召連れし宗旨の者など、紙に包み信心渇仰して懐中しける。夫より段々山を越え村移りし侍るに、海上遠からぬ所の岩或は石古木等には、風の吹荒れ候節自然と潮氣を運び候故や、右日蓮窟の通り鹽付きてあり。道端の石地藏又は踏石にもあるなれば、是も高祖上人の悲願なるやと笑ひけるが、聊かの事も神佛に托しぬれば自然に靈驗も有るなり。可笑しき事也。

(二)聊かの事より奇怪を談じ初むる事　安永の初、本郷三念寺門前町に輕き御家人の宅の持佛堂の彌陀、自然と讀經なし給ふとて、信心の老若右佛壇を拜し尊みけるが、段々其譯を糺しぬれば、右持佛の後は糀屋の家境なるに、右境へ蜂の巣をくひて、子蜂ども爾々と朝夕鳴きしを聞きて、ふと佛像の誦經し給ふと言囂りしにて有りし由。みな〳〵笑ひて三十日餘の夢を覺しけると也。

(三)怪談其よる所ある事　文化六卯年の夏なりしが、柳原土手に夜毎に光り物出るとて、專ら風聞なせしが、去年の夏秋の頃、神田紺屋町嘉兵衛娘、十四歳に成りし者、風雨の節往來なせしに、立置候材木倒れ候に驚き死せし事ありければ、其の妄執の陰火なりとて、近邊の者夜中見屆に出ると、附怪なせしが、實否を糺させぬれば、同町三郎兵衛店に髪結渡世をなせる市兵衛といへるもの、二間四方の土藏ありしが、鼠漆喰にて塗上、油など弱くありしや、古壁へ往來人提灯の火影移り候得ば、光り候ゆえの由、右土藏鉢卷の所に塗むらにてもありしや、全右へ往來の提灯の火風與移り候を、事がましく申成ける由、右故や又は外に損じもあるや、此節修復に取かゝり、足代蓙張りなどなしけるに、右怪談たちまちにやめぬるとなり。

(四)雷公は馬に乘り給ふといふ說の事　巢鴨に大久保某といへる人有りしが、享保の頃、騎馬の稽古より同門の元へ咄しに立寄り、暮前に暇を乞ひしが、未た迎も揃はず、殊に雨も催しぬれば主人も留めけるが、雷氣もあれば、母の嫌ひ、彼是早く歸りたしとて、馬に打乘り騎射笠に合羽など着て歸りけるが、筋違の邊よりは日も暮れて、夕雨頻りに强く雷聲も夥しければ、一さんに乘切りて歸りけるに、駒込の邊町家いづれも戸を立てゝ居けるに、一聲嚴しく雷のしけるに乘馬驚きて、とある町家の戸を蹴破りて、床の上へ前足を上げて馬の立ちとゞまりけるにぞ、猶又引出して乘切り我家に歸りぬ。中間共は跡にもつゞかず、夜更けて歸りける由。然るに求めたる事にあらねど町家の戸を破り損ぜし事も氣の毒なれば、行きて樣子を見來るべしと家來に命じ遣しけるに、かの家來歸りて大に笑ひ申しけるは、昨夜の雷駒込片町邊へ落ちしといふ沙汰有り。即ち何軒目の何商賣せる者の方へ落ちし由申しける故、何時頃如何樣なる事と尋ねけるに、五時前にも有るべし。即ち雷の落ちし所は戸も蹴破りてある也。世間に雷は連鼓を負ひ麗の姿と申しならはし、繪にもかき木像にも刻みぬれど、大なる僞なり。まのあたり昨夜の雷公を見しに、馬

に乗り陣笠様のもの冠り給ふ也。落ち給ひて暫く過ぎて馬を引返し、雲中に沓習せしが、上天に隨ひ段々遠く聞えしと語りし由申しければ、さあらば雷の業と思ふべき間、却つて人して言はんは無興也とて濟しける由。

終りの話は、笑ひ話の類ですが面白いものです。此と同類で、しかも同じ雷公の話を、前に近江八景に關する逸話を出した、三浦梅園が「梅園叢書」に「妖怪」といふ標題で書いてゐます。序に掲げて置きます。

『是は此あたりの事なりき。或禰宜、小村祭のかへりに夕立に會ひ、太鼓持ちながら、濡れ濡れて過ぎけるを、是をば知らで又一人、同じく雷の鳴るが恐ろしさに、耳など押へて走りけるが、俄にひかり物して霹靂しければ、あはや我頭の上に落懸りけるかと覺えて、かたへの溝へ落込みけるに、禰宜も同じく上に落重りて、互に肝を潰し、只一息に遁げけるが、其の後、「我こそ正しく鳴神といふものを見たり」といふに、「如何なる物ぞ」と問へば、「隣の村の禰宜何がしに少しもかはらず」といひければ、人々噴出しけるに、「さな宜ひそ、慥に太鼓まで持ち居られたり」と言ひけるとぞ。世上の妖怪、想ふに此の類多かるべし。』

守信は、前記の「なしともいひ難き事」といふ態度の外に、話者の話を一應そのまゝに記述した上で、「按ずるに」といふ風にいつて、私見を加へて、其を疑ひ又は否認せんとしてゐる項があります。その一つは「外山屋敷怪談の事」といふので、次のやうな面白い例です。

『尾州外山の御屋鋪、名たゝる廣大の事にて、五十三次の景色、其外山水の眺望髣髴ひなしとかや。いつの

頃にかありし、御成有之に付、前に奥向より右御場所見分ありけるゆゑ、彼御家の役人も案内なしけるが、片山里と思ひし所に、一社ありて、鎖を懸けて、いかにも社も古く、事古りし所なるに、其頃頭取勤めける夏目某、氣丈成生質なりしか、此社は何故鎖封有之哉と尋ければ、彼人答へて、是は昔より申傳之邪神を封じ込しとて、此鎖を明候事はつひになき由、笑ひて答へければ、かかる事あるべくもなし、御成には、我等見分に罷越し候上は、若し封鎖の儀、御尋あるまじきにもあらず、一覽致度とありしを、達て留めけれど、改めんと有も謂なきにあらず、鑰を給れと請取て、彼鎖を明て、扉をひらきしが、大きに驚きたる體にて、早々扉を締て、元のごとく鎖を懸しとなり。跡にて聞しに、何か眞黒成もの、頭をぐつとさし出せしが、眼の光あたりを照し、恐しといふも計なしと、彼頭取のかたられるとなり。按ずるに怪にはあるべからず、猥りに口説にかけては悪敷品を、先代封じて、社に祭め給ふならんを、夏目心得てかくかたりつらん。』

守信は、先代が見るべからざるものなるが故に封じて置いたものを見たので、驚いたのである、と解釋してゐるのです。何かの機會や、何かの途で、珍奇な品物が手に入り、さて後日に其の始末に困まり、しかも其が粗末な扱ひが出來ぬやうな物であつたりすることは、あり得ることです。廣い屋敷をもつ殿様などであれば、屋敷内に社を作つて封じて、始末をつけるといふやうなのは自然のやり方でありませう。このやうな場合、扉をあけて見ると神罰を被むるぞよ、とするのが安全な方法である筈です。この社のは、陽起石のやうなものであつたらうと想像されます。無理をいつて開扉させて見たところ、その御本體なるものが至極怪しからぬものであつたりした場合、驚くのは

當然で、何とかうまくその場をとり繕はねばなりません。夏目某は相當の智慧者だつたとも思はれます。以上は守信の解釋によつたのですが、解釋の途は外にもあると思はれます。

も一つ、「妖談の事」と題した次のやうな例があります。

『文化六年の春、人の語りしは、此程奇事あり、中仙道桶川宿とかや、親もありしや、母子二人暮にて、家もまた不貧、然るに息子なる者、亂心と申ほどにもなく、狐のつきたると申にもあらず、うつゝなき事ありしゆゑ、他行をとどめ、服藥等心を盡し、段々快く最早常體とも可申けれども、時としてうつゝなき事多かりしに、近邊の稲荷へ參詣なし度由申ける故、近所親類共へも爲知とゞめけれども、程遠き處にもあらざれば、彼社頭へ相談の上遣しけるが、其後あさ草觀音へ參詣いたし度旨相願けるゆゑ、母の一了簡にも難成、親類組合へも咄しけるが、是はいらぬものなり、心もとなき由にて、所役人も合點せざる故差留けるに、四五日もありて風與立出で、行衛不知、定而淺草觀音へ參詣とて、江戸へ出ぬらんと思へども、母は大きに驚き、人を出し尋けれども不知、四日の曉、門口の井戸へ物の落候音しければ、家内驚きて井の内を捜しけるに、落入候ものあればかろうじて引上けるに、彼息子にありければ、未た息もあるゆゑ、色々養生なしけれど其日の夕刻果けるにぞ、母の嘆きはいふ斗なく、無據親類打寄りて、次の日菩提所へ葬りて皆々なげきけるが、四日過て夜に入、表の戸をたゝくものありし故、右の戸をあけゝれば息子なるゆゑ、大きに驚き、幽鬼の類ひならんと、母さへ側へ寄らざりしが、彼息子大きに不審して、我等幾日に頻りに觀音參詣いたし度立出、いづ方に泊りて昨日出立、道中もいづ方に泊り、歸りしといふゆゑ、其先へも人を出し尋ねけるに、いさゝか相違なし、さて葬送せしは心の通ひ來るなるべし、掘て見よとて、菩提寺へも斷掘穿見しに、是又息子死體に相違なければ、かゝる奇事も有事や、立歸りし息子若し妖物に

や有やと、打寄尋て其樣子を□しけるに、いさゝか違ひなく、折節うつゝなき事の有も、前日にかわる事なし、今に不審不晴とかたりぬ。』

守信は此に附記して、『但、かゝる事有べきにもあらざれば、其虛實を糺しぬれど、いまだ其實をしらざるなり』といつてゐます。この場合には、投身自殺者の屍體檢索が確實を缺いてゐて、此が充分でない以上、詮議は無用でせう。「朝野雜載」に、次のやうな此に近似の話が一つ出てゐます。

正德の頃、江戸神田鍋町、こまものうる家の童十四五歳なるが、正月十五日の暮方、錢湯へ行とて手拭を持て出けるが、少時にして表口に人有。誰ならんとおもひしに、入來るを見ればかの童なり。股引草鞋の旅姿にて、藥苞を杖に掛たり。主人はさとき男にて、すこしも驚く體なく、先草鞋をとき足をすすぐべしと云へば、かしこまりて足をあらひ、臺所の棚より盆を取て苞をほぐし、野老(ところ)を出して土產なりと云。主人の曰、今朝は何方よりか來れる。童答へて、秩父の山中を今朝出たり。長々の留守御事缺候つらんと云。主人又此家はいつ出たりしととへば、舊冬十三日煤取の夜、彼山に行てきのふ迄其所にあり。毎日の御客にて、給仕し侍り、樣々の珍物を給はり候ひぬ。御客はみな御出家にて侍りし也。昨日老僧の仰せけるは、明日は江戸へ返すべし。今日は野老をほりていへづとにせよとあるによつて、終日是をほり侍りしと云。其家には童が師走に出たる事を曾てしらず。其代りとして來りゐけるは、なに物にてかありけむ。いとおぼつかなき事なりしと云り。

「朝野雜載」は、前にも引用し、次にも一話を借用しますが、貝原益軒の甥の和軒の筆錄集で史

實、話談の類の蒐集で、「耳袋」に近似のものです。その量も此に匹敵してゐます。そしてその事實、資料を扱つてゐる態度が、無批判的であることが「耳袋」と對角的であつて、當時の人達の態度をよく表らはしてゐるやうに思はれます。和軒の筆は、敍述、記載が守信のやうに周到でなく、事實の眞相を考へる要點がぬけてゐるものが多くあります。この例でも、これだけでは如何にも不思議ですが、眞相のわかる點がぬけてゐることが明らかであつて、これが話の全部であるとすれば、その不備に氣づいて吟味するといふ態度の缺けてゐた例になり、また、一つの話をこのやうにたゞ面白く不思議にして、話す方も、聽く方も、たゞ面白い、不思議だとして滿足し、或は喜んでゐたのであるかとも思はれます。この例は、奸智に長けた少年店員が巧みに替玉を使ひ、仲間とうまく共謀して、遊びに行つたのだとすると說明がつきます。併し此は、店員の多い店でなければ出來ぬことです。小間物店では、この說明は當りません。

怪異談なるものには、そのまゝ信ずべからざるものの多いことはいふまでもありませんが、たゞ信ずべからずといふのでは、批判にはなりません。其の論議には、恐らく斯く斯くの事件が、このやうに傳へられたのであらうといふ考察を試みて、一歩立入つてみることが、怪異談なるものの眞實の理解に、試みらるべき仕事でありませう。

無鐵砲な仕儀ですが、私が玆で其を一つ試みようと思ふのです。といつても、私はいま此を自信

のある程度にする時の餘裕をもちません。たゞ卽座の試みです。充分に時間をかけて、考案を重ねれば、更に數等眞實に近いものが出來るでありませう。材料として、「朝野雜載」にある次の話をとります。其は種々の妖術を行なつた一人の武士が、實は古狸であつたといふ話です。先づその全文をあげます。

『相澤次郎左衞門は、村上周防守が家來なり、或とき傍輩二三人伴ひて、次郎左衞門が宅に到り、端居して物語する序に、相澤が曰、各は銀河の鮎を喰たるやと云により、きやうがる事を云人哉。いかでさることと有べきと云へば、しからば今宵もてなしに、銀河の鮎を取て歸るべしとて、僕を呼て、細曳を幾筋も取寄せ、其細引をみな結び、纖で庭上へおり、かの細引の端を取て空へ投揚しに、竿の如く立て天へのぼり、庭に積たるたぐり繩みな引拂ひたるに、其の繩の末に、かの術士取付て空へ上る。客人奇異の思ひをなして、空をみやりたるに、空中に飛揚して、其客見えざりしが、やゝ有て、又其形雲中よりあらはれ、ほどなく庭上へをり、細引をくだして、下人にあたへ、袂の內より生る鮎の見事成を二三十計取出し、是をてうじて客にもてなす。此類の奇妙有により、因幡守見物すべしと有ければ、鼻紙をさきてくひしめし、豆の大さなるを、柱に押付て、本の座に歸りしが、暫有て、彼付置たる紙の中より雫落るにより、周防守をはじめ、近習の輩目も離さず守り居たりしが、其雫後に瀧と成て、座中に其水漲るにより、防州最早無用なり、術を止よと有ければ、卽座に立て、先に付置たる紙を取と均しく、溢れたる水なく成て、本の乾ける席と成る。其後周防守家老を呼て、彼が妙術あやしむに堪たり。若彼を我家に召置に於ては世上に其隱もなく、此頃御制禁の吉利支丹の唱へも有べし。さればとて暇を出しても行末の殃覺束なし。不便なる事ながら、無益の術を覺悟せし不祥に腹を切せよと有により、家老の面々いなみがたく、檢使を遣はして、

其旨を告ければ、かの衞士力及ばずとて、おのが輒みたる寺に到る。住持の僧に對面して、切腹するに於ては、長持に納めて鎖をおろし、埋葬して給はれと云置て、腹一文字に切けるを、傍輩其首を打落し、彼が遺言のごとく葬て、檢使の輩城に歸り、家老の面々に逢て其物語する中に、家老の方へ相澤次郎左衞門が送りし、文箱なりとて持出ける故、封を切て披見するに、某何の罪もなく死罪に逢べき樣なければ、其城下を出てそこ〳〵迄退きたりとの文意なり、檢使の輩驚て、彼寺に到り、長持をほり出して其内を見るに犬なる狸の腹切たるが有しとかや。

この話を私は次のやうに解說してみました。前にいつたやうに、たゞ卽座の試みです。諸君がより適切な解說を試みられることを期待します。

村上周防守の家家に相澤次郎左衞門といふ者があり、器用な變り者で、手品、奇術に凝つて、その妙技神に入るといふ狀態でした。本人も至つて自慢で、機會のある每に腕を見せて得意でした。或る夏のこと、鮎の季節。朋友をアッといはせる工夫をしました。僕に手傳はせて、登天捕鮎の技を演じてみせようといふのです。用意を整へてゐたところへ、一夜朋輩が來ました。特に招いたとも思はれます。そこで庭前の巨大な老松を利用し、僕を助手として、繩をつながせて其を投げ上げ、巧みに高い枝に登つて登天の技を演じて見せました。そして樹上に用意してあつた鮎を袂に入れて下降して來て、天の河の鮎といふものを振舞つたのです。朋輩は御馳走になり、その妙技に感じ入つて散會しました。さて次郎左衞門の妙技は漸く盛名が廣まり、主人の周防守の耳にもしばしば入

るやうになり、且つはその社會にも評判になつたのでせう。周防守も實演を見たいと思つてゐたでせう。そこへ因幡守が實見を申入れました。貴殿家來としてまことに稀らしき技倆の者があり申す由、是非に一度陪見の機にてもお與へ下さるまじくや、といふ風によろしく申込がありました。氣持の惡からう筈のない周防守は、快く受諾。その趣を次郎左衞門に傳へて、篤と念を入れ、見事なところを見せてやるやうにと命じました。次郎左衞門には病的に好きな途です。こゝぞ腕の振ひ時と、存分に工夫もし用意もしたのでした。この度は水藝を見せてやらうといふので、許しを得て、定められた座敷に誰にも見せぬ仕掛をしました。

さて當日になつて、手先萬端あざやかに、柱噴水の藝を演じてみせたと見えます。お客の因幡守は、妙技に驚嘆しました。周防守も同樣でありました。そしてお客の手前得意でもあつたでせう。疊が若干ぬれた程度であつたが、世間へは其が洪水のやうでもあつたかのやうに評判されたのでした。見事だつたこの藝は、併し次郎左衞門にとつて不運な筋途になりました。異常な技能の所有者が危險視されることのあつたのは、當時の習ひでした。仙臺の青葉城は山城で、正面大手門の右側に石壁が高く聳え立つてゐます。或る時のこと、誰ぞその石壁を登り切り得る者があるか、あらば重く褒美を賜はらう。勉め試みよといふ下知がありました。幾人かゞ試みて失敗した後に、一人此に成功した若者がありました。其は城主座側の小姓でしたが、手に工夫を凝らした鐵具を持つてゐ

たのでした。道具を使つてのロッククライミングです。一應は異常な賞讃を博しましたが、斯様な奸智に長けた者は將來が不安であるといふ趣を以て、誅せられてしまつた、といふ話があります。これが無理でもない世間だつたのです。特にキリシタン宗の禁制に怯えてゐた時でした。仕掛のことを知らないこともなかつたでせう、或はそれほどの感覺もなかつたかも知れぬ周防守は、感心の次に恐怖を感じました。なほキリシタンとあつては、自分の頸の問題でもあります。型の如くに切腹といふことになりました。家老の面々にしては、殿様御無理とは重々考へたものゝ、ことキリシタンに關係し、御上意とあつては致し方もありません。別段勤め向きにも、友交の上にも、缺點といふべきものとては無く、寧ろ面白い友達であつた朋輩等は、家老以上に不服であつたわけでせう。何とか助命の途はないものかと思案したと思はれます。

當の次郎左衛門はたゞ者ではありませんでした。簡單に腹を切るやうな男ではありません。むざと腹切るなどは馬鹿々々しさの限り、御當地ばかりに日は照り申さぬ、出奔と方針をきめて、得意の智慧をしぼつたものです。朋輩が訪ねて來て、家老衆にも難色のあることを告げました。形勢の惡しからざるに意を强うした次郎左衛門は、手落なく順序を定めて、寺の和尚にも一役を演じさせる手筈にしました。仕事は簡單で、朋輩と力を添へて檢使を誤魔化し、腹は切らずに、河原の下人の首を一つ手に入れて其を持返らせ、和尚には、情をあかして、長持の蓋は決して開かぬこと、萬

事ぬかりのないやうにと示し合はせて、本人は城下を立退きました。次郎左衛門は奇術に凝るほどの人物で、茶目氣を起しました。一つ面々を煙にまいてやらうといふ謀をしました。その一つは、葬るべき長持に大野良犬の腹を切つたのを納めること、一方には遺書の風をして手紙を屆けさすことだつたのです。計畫は見事あざやかに壺にはまつて、發掘してみたら、動物が出ました。驚いてゐる連中には動物の種類判斷に命靜の態度が失なはれてゐたのは自然です。いや此は大狸でござるわい、といふことになつて事件は終りました。こんな風にも解かれると思はれます。

五　怪異談の科學性（二）

動物怪異談のこと

狐の怪、狐憑きのこと

動物の怪異談には、さまざまの類のものがあり、その主體になつてゐる動物の種類も少なくありません。狐、狸、老猫、蟇などの場合が多く、他にも鼬、蛇、蜘蛛等がいはれてゐます。

其等の怪異談を動物の行爲の面から見ると、人畜等に害を與へ、惡戯をすること、また反對に利得、便益を與へること、此の特殊な場合と見てよいものとして、仇を返し、祟るといふこと、此に反對に恩を報ずるといふこと、此が第一の類です。また人間と動物の間に、たいした利害關係のない種々の交渉が生ずること、多くは動物の側から働きかけて、人間が其に應對したりすること、此が第二の類。次に化けるといふこと。此は前記の諸類に分屬させられるものですが、便宜上第三の類とします。第四が人間に憑くといふこと。第五は人畜とは關係なしに、動物の珍奇な行爲が見られるといふこと。例へば狐の嫁入りといふが如きものです。

前に呪に就ての吟味を試み、これから動物怪異談と亡魂、幽靈の類を探つて詮議を進めてみるのですが、此等の三者はそれぞれの特質をもつてゐます。呪には、前章で述べたやうに、正に效能のあるべき理由が考へられるものがあり、偶然が呪の效能と思はせるものもあり、效能のあるべき理由が考へ得られぬものもあり、そして效能ありと信ずるといふ、精神的、心理的の要因が重要な條件になつてゐるものがあります。これからの題材である動物怪異談では、この最後の人間側の精神的、心理的條件が殆んど全部の要因になつてゐるものとしてよいと思はれます。動物の側に於ける要因も亦存すると考へねばならぬのですが、此等の二つの要因の相對關係が、呪と動物怪異談の場合に於て、逆になつてゐるものと考へられます。

一呪を全體として考へてみれば、その效能の有無が人間の側の精神的要因に支配されるものと、其に支配されざるものとが、相半ばする——少なくも双方とも少なくない——とすべきですが、動物怪異談の場合は、專ら人間側の要因によるものであつて、動物の側に要因のある場合は極めて少數です。呪では、自身が效能が無いと信じ、或は其を疑つて行なつたのでは無效であるものが少なくありません。併し其を信じて、忠實に行なへば必ず有效な呪があります。動物の怪異では、其が無いと信じてゐる者には無いのが原則的です。

茲でも「耳袋」を主な材料にします。其の九卷八百八十八項の中に含まれてゐる動物に關する怪

異談を、私は六十八と數へました。其等を動物の種類別にしますと、狐が三十一、狸が十二、猫が七、蟇及び魚が各三、鯉、馬及び蜘蛛が各二、鼠、狼、蛇及び蟲が各一です。このやうに動物の種類はなかなか多く、そして狐が約半數を占めてゐます。但し此等のうちには、狐狸といつてゐるもの、明言しないで「ならん」「にや」等といつてゐるものも少數あります。「耳袋」に限らず、動物怪異談の主座を占めるのが狐で、此に次ぐのが狸であり、狐狸の爲す業といふ風に不確實な内容でいはれたりもしてゐます。狐では怪異談の數が多いのみならず、その種類も亦多數で、文書の上でも、此等の記事や筆錄が多數に見られ、創作にも多く材料にされてゐます。蔦廼家主人纂といふ署名で「靈獸雜記」といふ三卷本がありますが、「日本書紀」から始めて狐の怪異に關する記事が二百八十三項集められてゐます。茲では動物怪異談全般の討究をするのではないのですから、最も内容の豐富である狐を主材とすることにします。

怪異談に於て狐が主座を占めることには、狐が種々の怪異を行なふといふことが、昔の人達の頭に異常に著明な程度にもたれてゐたといふ根柢があつたのです。今日の人達の頭では考へられないもので、想像以上の根强いものであつたと考へるべきものなのです。なほまた、自然の條件もありました。即ち、狐が人間の日常生活に接近してゐたことです。その數に於て多かつたのみならず、

人家への接近が密であつたのです。

狐は山にも棲むが、むしろ平地に多い動物です。集團部落にも接近して巣穴を營なむ性質をもつてゐます。また群をなしてゐることも多かつたやうです。先年明治神宮の内苑の造營の土工中に、晝間狐が現らはれ、工夫達が坑道に追込んで捕へたといふ新聞記事を記憶してゐます。近年でもこのやうであるので、昔は田舍では勿論のこと、都會でも、外郭地域では稀でなく、廣い庭地などに住んで居り、しばしば人の目にも入つたものです。都會生活をして來た私などにも、近郊などで狐の叫聲をきいた經驗があります。

平安期の說話集である「古今著聞集」に、『狐數百頭東大寺の大佛を禮拜しけり。諸人これを追ければ、その靈人につきていひけるは、久しくこの寺にすむ。今尊像をいたましめてやかんとするが故に、禮拜をいたす也とぞいひける』とあります。東大寺の附近などには數多く棲んでゐて出沒したのでせう。それ等が何かの理由で夜間に大佛殿の周圍に現らはれ、多數に上つたのでせう。大佛堂には炎上といふ大きい歷史があるので、不吉な豫感が人達の間に生じて、そこで狐憑き病者が出て、またまた炎上といふことを口にしたのであらうといふやうに考へられます。同じく「古今著聞集」に、高倉泰通が狐狩をしようとして其を停めた話があつて、『大納言泰通卿の五條坊門高倉の亭は、父侍從大納言の家にてふるき所也。相つゞきてすまれける程に、狐おほく常にばけ〳〵り……』

とあります。常にばけたといふが、どんな事であつたか記事がありませんが、京中でも舊い屋敷内などにも澤山に棲んでゐたのです。

狐は獸類中での奸惡者とされてゐます。その性質を表らはすのに、「多疑妖慧」といふやうな言葉が用ひられてゐます。當時の狐觀が巧みに表らはされてゐるこの妖慧といふ方面が、超人間的といふ程度まで進められて、變化自在といふやうな性格までも附與され、靈獸といふ立派な名までも貰ふやうになりました。そして此を利用する人間まであつたのです。

狐が人間に愛好される性質の獸(けもの)でないことは明らかですが、何故に左樣に特殊な獸と思ひ込まれたでせうか。顏貌や、眼つきが奸惡な相で、いかにもずるさうではあります。生活が隱棲性で夜間性であることも原因になつてゐるでせう。併し、狐に對する憎惡感は、要するに人間の頭のなかで出來たものであらうと私には思はれます。

博物學書にどんな風に記述してあるかをみるに、「大和本草」では、益軒は次のやうに書いてゐます。

『妖獸善變而爲人。爲淫婦惑人、或託精魂於人。以令狂亂。又擊尾出火。日伏千穴。夜出竊食。善捕鷄。唯畏狗。其口氣を吹けば火の如し。狐火と云。其性多疑。善聽。信州諏訪湖。冬氷堅凍。狐聽而先渡。自後人亦渡。春狐聽泳。其後不渡と云。狐の人につきて爲狂に、狼糞をたきて鼻を

ふすべ、或薄茶一服ほど令飲之。又海鷄魚の尾を用て病人をさすべし。有效と云。』

平野必大の「本朝食鑑」の記事は次のやうです(原漢文)。

『……其氣極メテ臊烈、其失氣モ亦臭當ル可カラズ、若シ人犬ヲ驅リテ之ヲ逐ヘバ、窘迫シテ必ズ失氣ス。其失氣ニ當レバ、則チ人惱ミ犬迷テ之ニ近ツク事能ハズ。若夜行忽チ野火ヲ見ルハ、其青ク燃ルハ狐尾火ヲ放ツ也。或ハ謂フ、狐人ノ髑髏、馬ノ梏骨及ビ土中ノ枯木ヲ取リテ以テ火光ヲ作スト、而シ未ダ詳ナラズ。人傷寒發狂ヲ病ミ、或ハ每ニ思慮心ヲ勞シテ病ヲ發シ、或バ產死ノ後怪ヲ作シ、或ハ夜嬰兒ヲ忤フノ類、多クハ是狐妖ノ爲ス所ニシテ、鬼ノ乘ズル所ナリ。大抵狐ノ妖惑スル所ノ者ハ兒女及ビ男ノ性昏愚、氣怯、狂燥ノ人ナリ。其妖怪ニ遭ツテ惑フ者ハ、輕淺ナルハ巫祝禳テ去ル。狐精皮膚ノ間ニ入リテ瘤塊ヲ作ル。能ク之ヲ察スル者ハ强テ握出シテ針及ビ小刀ヲ刺シテ則チ去ル。又田犬ノ猛逸ナル者ヲ放テハ、則犬狐氣ヲ識テ頻リニ吠ヘテ嚙マント欲ルモ亦去ル。其ノ深重ナルハ則チ年ヲ經ルモ去ラズシテ癈人トナル。其宿怨アリテ去ラザルハ竟ニ命ヲ奪フニ至ル。或ハ曰、狐化シテ女トナリ人通ズレバ則チ其人死ス。若シ其人死セザレバ則狐反テ死ス。然レドモ理ニ於テ未ダ詳ナラズ。又曰狐妖ニ惑ハサルヽ者ハ、先ヅ疑似ノ際ニ於テ、檜ノ葉ヲ煎ジテ之ヲ服セシムレバ、則チ狐妖ノ者ハ太ダ嫉忌シテ爭テ之ヲ服セズ、眞病ノ者ハ臭味ヲ嫌フト雖ヨク之ヲ服ス、是此理アラン爾。近世本邦術家ニ狐ヲ使フ者アリ、呼テ

飯繩法ヲ修スト稱ス。其法先ヅ狐ノ穴居ヲ搜リ求メ、常ニ孕狐ヲ放テ以テ馴致ス。子ヲ生ムノ時ニ至リテイヨイヨ勤テ之ヲ保護ス。子既ニ漸ク長ズレバ、母狐兒ヲ携ヘ來ツテ名ヲ乞フ。術者狐兒ニ名ヅク。母狐拜謝シテ兒ヲ携テ去ル。爾ル後術者事アレバ密カニ狐名ヲ喚ブ。狐形ヲ隱シテ至ル。密事ヲ譯問スルニ之ヲ知ラザルコトナシ。旁ラ狐形ヲ見ル能ハズ。術者妙ヲ談ズルトキハ則チ人以テ神トナス。久シクシテ術者些ノ穢行怠慢アレバ、則狐モ亦長ク術家ニ至ラズシテ竟ニ亡ブ矣。』

このやうに、博物學書の類にまでも、妖獸として、しかも具體的に記述されてゐたのです。また一方には、狐を靈能を有するものとする考へがあり、病的に進んで信仰といふべきものが當時の人達に著明であり、從つて俗人信仰の對象となり、此を利用して利得を收める隱密者や邪祠の類がいろいろありました。右の飯繩法などがその一つです。この傾向の記事の一例を伴蒿溪の「閑田耕筆」から引いて置きます。

『淡海八幡の近邑田中江の正念寺といふ一向宗の寺に住る狐有。其寺のために、火災などふせぐことはもとよりにて、住僧他へ詣事などに行時は守護して行とか。人の眼には見えねど、或時彼僧のはける草履にものをかけし人有しに、歸りて後もの陰より人語をなし、吾草履の上にありしに汚せりとて大に怒りしを、住僧夫は人の眼に見えねばせんかたなし、怒は無理なりとさとしければ、げに理と伏けりとぞ。此狐の告し言に、凡我黨に三段あり。主領といふは頭にて、其次を寄方(コリカタ)といふ。其下を野狐といふ。人に禍するは

大かた野狐なり。然れども吾下の野狐にあらざれば制しがたし。所々に主領あり、他の主領の下の寄方もしくは野狐にもあれ、是を制すれば怨をうくること深し。一旦の怒永世忘れざること人よりも甚しといへりとなん。……凡物をとはんとおもへば、書付て本堂にさし置ば、其答をまた書きても見せ、人語を出して答へることもあり、形は見せず。凡住僧を敬する事は君の如くす。ある時官を進むるために金の不足せるを助力せられんことを乞ふ。住僧うけがひながら不審して、其もとの金はいかにしてもてるやととはれしに、本堂の賽錢の箱に入らずこぼれたるを、折々に拾ひ置しなりと答へしとか。常に本堂の天井に住りとなん。さて此狐に限らず、官に進むとき、金を用ふるよしの話ども聞るにつきて、稲荷の神官連に其金の納る所をとひしに知人なし。彼等の黨の所爲なりしやしられぬこと也。』

「耳袋」には狐の怪異談が三十一項あり、便宜分類してみると次のやうです。

一　利害關係のない、或は其の少ない、人間と狐との交渉關係の話。七話。

二　狐の對人的に善良な行爲の話。六話。

三　人間に害を爲し、祟つたりした話。八話。

四　狐憑きの話。五話。

五　狐憑きの狐を追つた話。五話。

兩類に跨るものを一方にだけ入れました。以下、この順で論議を運んでみます。

第一の、人間と利害交渉の少ない話として七話を採りましたが、これ等には作爲が加はつたもの

が多く、全くの作話と思はれるものもあり、玆での材料にする價値がないか或は少ないものです。作爲の少なかりさうな二例を選べば、次のやうなものです。

(一)小堀家稲荷の事　京都に住居せる上方御郡代小堀數馬祖父の時とかや。或日玄關へ三千石以上といふべき供廻りにて來る者有り、取次數臺へ下りければ、久々御世話に罷成り數年の懇意厚情に預り候處、此度結構に出世して他國へ罷越候。これに依つて御暇乞に參りたりとて申置き歸りぬ。取次の者も不思議に思ひけるは、洛中は勿論兼て數馬方へ立入る人にかゝる人覺えず、怪しく思ひながら其譯を數馬へ申しければ、數馬も色々考へけれど、公家武家其外家司宮仕の者にもかゝる名前の者承り及ばず、不審して打過ぎけるが、或夜の夢に、屋敷鎭守の白狐なり、年久しく屋敷内に居たりしが、此度藤の森の差圖にて他國へ昇進せし故、疑はしくも思さんが此程暇乞に來れり。猶疑はしく思はゞ明早朝座敷の様を清め置くべし。來りまみえんと也。餘りの事に不思議に思ひて、翌朝座敷の様を鹽水にて清め、數馬も右座敷に居たりければ、一ッの白狐來りて様の上にあがり暫くうづくまり居しが、程なく立去りけるにぞ、扨は稲荷に住みつる白狐の立身しけるよと、神酒赤飯などそなへて祝しけると也。

(二)豪傑怪獸を伏する事　名も聞しが忘れたり、去る下屋敷の稲荷の狐なる由、下屋敷守の家來へ、別貳人扶持給り、毎朝右屋敷守、食事をこしらへ、片木にのせて、右稲荷の脇へ差置ば、いつ方よりか出て喰盡しける事なりしが、然るに右屋敷守替りて、新屋敷守になり、新屋敷守は豪傑なる者にて、主人より扶持まで賜る事なれば、稲荷の供御又は社頭の修復入用には可致、聊私の用にはたてんにはあらず、何ぞや、畜類に食を與ふるに、新敷を清め與ふるなど、沙汰の限りなりとて、飯を地上にをきて、片木などいさゝか不用りしが、喰殘し、又はくわざる事もありし故、前々にはかく〳〵なりと申人もありしが、食

す食さぬ迄の事とて、地上に置あたへけるが、上屋敷に居ける、彼らの兄弟の女とやらの夢に、一疋の狐來りて、御身の弟なる者、前々より片木にてあたへし飯を、砂の上へ直にひほし置故、砂交りて甚難儀なり、片木に不及、古膳古椀、あるいは板の上へ成共、置たまはる樣に、傳へたまはるべしと頼ける故、それは何故に直くに不申哉、我申しても、誠になすまじきと、夢心に答へければ、かく豪氣のおの子なれば、我等など、夢にも難立寄と申ける故、翌の日申遣し、强而頼み、それよりは、いかやうの物にのせてあたへても、給畫し、夫迄は火のあしきもの抔のあたへしとて、祟り事などありしが、其後は絶へてなかりしとなり。

（二）は自然らしくて良い話です。新屋敷守の態度はその當時としては穩當でなかつたに相違ありません。近親の者などの間には、あんなことをしてゐると祟りがあるぞ、などといはれてゐたでせう。女連には其を心配してゐたのもあつて、夢を見たといふことも想像されます。屋敷守本人は狐の觀念が特殊なのですから「夢にも難立寄」かつた筈です。狐の方でも、最初は樣子がちがつたので食はなかつたりしたが、腹のへるのには我慢がならず、段々食するやうになつたのでありませう。

第二の類の報恩等の話でも、多くのものは作爲が濃厚です。自然味のあるもの二つを次に掲げます。共に偶然の事實が狐に結びつけて考へられたのでせう。（一）の話で、二度目を望んだが駄目だつたのは、偶然がしばしばあるものでないから當然なのです。

（一）狐福を疑つて得ざる事　本郷富坂に松平京兆の中屋敷あり。一年かの屋敷に住める小人中間、老分にて屋敷の掃除などまめやかに勤めけるが、子狐樣の下に生れしを憐みて食物など與へけるに、或夜の夢に毀々養育の恩を謝し禮を述べ、何がな此恩を報ずべしと心掛けし由にて、求る幾日は谷中感應寺の富札の内何十番の札を買給へと敎へしと見て夢覺めぬ。さるにてもかゝる事有べきにもあらず、夢に見しを取用ふべきにもあらずとて、等閑に過ぎて札も調へざりしを、暫く有りて谷中近邊へ至り感應寺富場を立廻り見しに、彼夢に見し何十何番の札一の富にて有りし故、殘念なる事せしと、其後は彼狐を彌々愛して、獵又富の如き福分もあれかしと思ひしが、二度はならざる術にもありしや、其後は一向右樣の事もなかりしとかや。

（二）狐を助け鯉を得し事　大久保清左衛門といへる御番衆、豐嶋川附神谷（かみや）といへる所の漁師を雇ひて網をうたせけるが、甚だ不獵にて疊過ぎなれど魚を得ず、酒など呑みて居たりしに、野狐一疋犬に追はれけるにや、一さんに駈來りて船の内へ飛入つくばひ居ける故、清左衛門を始め不獵にば有り、此狐を縛りて家土產に連歸らんとひしめきしを、船頭漁師深く止めて、狐は稻荷を守る神のつかはしめ、何も科なきものを折檻なし給ふは無益也。逃し給へとて達て乞ひける故、則ち其邊へ船を寄せ、放し遣りければ悅びて立去りしが、獵師さらば日も暮れなんとす、一網うちてみんと網を入れしに、三年ものといふべき大なる鯉を打ち得し由。是は彼狐の謝禮なるべし、今一網うたんと望みければ、かの獵師答へて、かゝる奇獵を得し時は再遍はせざるもの也、免し給へとて其後は網をうたざりしと也。

第三は、狐にばかされて損をした話、害を受けた狐が加害者に仇を報じた話、祟つた話、個人的

に原因なしに害を加へたといふ類の話で、此等は一般に口傳されてゐる型のものです。此等は多くは作爲のない、簡單なものですが、なかにはやゝ複雜なものもあります。

(一)女の髪を喰ふ狐の事　世上にて女の髪を根元より切る事有り。髪切とて世に怪談の一つとなす。中には男を約して父母一類の片付けなんといふをいなみて、右怪談に托して髻など切るも多し。然れ共實に狐狸のなすもあるとかや。松平京兆の在所にて、右髪を切られし女兩三人有りしが、野狐を其頃捕へ殺して其腹を斷ちしに、腹内に女の髻二つまで有りしと語り給ふ。一樣には論ずべからざるか。

(二)畜類仇をなせし事　豐田金右衛門語りけるが、或年御用に付大阪へ登りけるに、箱根にて駕を舁きし人足、右手の指皆一つになりて哀なる有樣なれば、休みの折から如何せしと尋ねければ、其身は笑ひ居しが、傍なる者語りけるは、彼男の者の親は百姓にて有りしが、彼者未た生れて間もなき時、親なる者畑へ出て狐の子を捕へ打殺し穴など塞ぎ歸りしに、其夜かの小兒わつと一聲さけびし故起上り見れば、團蘆裏の中へ投込みありしが、仕合せに惣身を火の中へ入れざる故、早速に療治して命は助かりけるが、あの如く片輸となりしと語りし由咄しぬ。

(三)荒木坂下妖怪の事　文化十一戌の年六月、或人かたりけるは、當月三日の夜、櫻木町近所荒木坂に奇異の事ありし由、右町□□□と中湯屋の門先にて、色々の油揚を拵、屋臺店にて商いたし、三日の夜五つ時分迄、追々餘程賣候後、中間體のもの三四人參り、右油揚調、直に其場にて喰ひ候處、右體のものは、時として、無錢にて、食逃いたし候儀も有之故、心を付居候處、頻りに眠氣付候へ共、勤而こらへ居候處、あく迄眠りを催し、不思睡り候而、暫過目覺候處、あたりにも人も無之、右の中間もいづちへ行しや不相見、右屋臺の□に仕込置候油揚は不殘紛失いたし、彼是にて六七百文の損をせし由、尤右場所人通

りも少き所なれども、いまだ五つ時頃にて、あたりに人も立廻り候場所、全狐の仕業成べしと、其最寄に住る人のかたりぬ。

(四)狐獵師を欺きし事　遠州の邊にて狐を釣りてすぎはひをなせし者有りしが、明和の頃、御中陰の事有りて鳴物停止なりしに、商賣の事なれば彼者狐を釣りゐけるに、一人の役人來りて以ての外に憤り、公儀御禁じゆ折からかゝる業なせる事の不屆也とて嚴しく叱り、右わななどをも取上げる間、彼者大に恐れ品々詫言せしが、何分合點せざる故、酒代とて錢二百文差出し歎き詫びける故、彼者得心して歸りしが獵師つく〳〵思ひけるは、此邊へ來るべき役人とも思はれず、酒代など取りて歸りし始末あやしく思ひて、彼者が行衛見えざる頃に至りて又々罠をしかけ、其身は遙かに脇なる所に忍びて伺ひしに、夜明に至りて果して狐を一つ釣り獲しに、繩にて帶をして宵に與へし錢を右帶にはさみ居りしと、遠州にて專ら咄す由、地改めにて遣しける御普請役の歸りて咄しける。鷺大藏が家の釣狐に似寄りし物語、證となしがたけれど聞きし儘を爰に記し置きぬ。

(五)狐仇をなせし事　常州眞壁村の百姓、妻子を殘し江戸表へ奉公稼に出しが、眞壁村に殘りし妻子は、百姓をいたし居候處、或時夜に入て、右夫歸り來り、在所出候以後、所々流浪致候處、風與盗賊の仲間へ入、此節盗賊の吟味强く、同類不殘被召捕しが、仕合に我身一人まぬかれしが、同類共の白狀にて、定めて妻子共迄も無實の事にて難儀及ぶべき間、早々村方を立退可然、我等は直ぐに立退候由にて、いづ地へか行去りしが、驚而妻子ども不殘其所を立退しが、其後何の沙汰もなく打過し處、彼夫暫く奉公もなせし故、故郷の事も氣遣敷立歸り候處、我が住し家は誠にあれ果、家内もいづ地へ行しや、しれるものなければ、驚きて村役人元組合の方抔へ至り、我住居は、いか成事にてかく荒果、家内は何國へ行たるにやと、念頃に尋しに、さればの事か、身の勤先き不相知、いか成故にや、妻子息とも、何れへ行しや、一夜

の内に立退被申し間、所々尋候へ共、行衛も不相知、無據其事屆も濟候、此程承及候へば、子息は上州桐生邊にも居候由、内方は近郷何村に近頃も居候段、申聞候故、驚入、先近所成と聞、妻の許へ尋行て、面會いたし、何故今かく奉公抔いたし居候哉と、尋ければ、先達一旦立歸り、盗賊の仲間入いたし、無滯詮議可有之候間、早速村方立退候樣、御身被申故の由、答けるに、村方へ立歸り候儀も無之、左樣なる儀、夢聊無之、さるにても、いかなる故ならんと考しが、彼者傳通院前屋敷方に奉公なせしが、其屋鋪年久敷狐の穴ありて、右狐折々いたづらをなして、主人も迷惑の由かたりしを、夫は不埒なる畜生也、急ぎいぶし可然と申けるを、主人も止めぬれど、憎き奴なりとて、强而申勸め、松葉を積で、穴をことゝくいぶしければ、狐絶かたくや、飛出し事ありしが、右の狐儘をなせしなるべしと也。

（六）狐に被欺て漁魚を失ふ事　大久保原町に、肴商ふ龍介といえるものありしが、或夜目白下水神橋の下え、友たち兩人連れにて、鱧を釣に出しに、思ひしよりも得もの多、兩人共呑一盃になりしかば、最早歸らんと、龍介申けれども、連れの男、今少しと得物に耽りて、手間取内、水神橋の上を、若き女あわただしく、跡へ行先へ行、幾邊ともなく往來せる間、有樣を見るに、渠は必定身投なるべし、止めとらせんと、兩人ながら陸へ上り、扨彼女を呼懸け、御身いかなれば、かく往來し給ふと尋しに、彼女恥しげに答へけるは、我等は繼母の憎しみを請、殊に思ふ男にも添事ならざれば、身を投死んと思ふなり、留させ給ひそと、泣々答へければ、頻りに不便に思ひて、繼母のいきどふりは、我等佗なしで可濟、思ふ男も能に取計ひかたあるべしと、達而止めければ、忝由にて、少し許容の體なりけるゆゑ、さらば御身の住家はいつくなるぞ、おくらむといふまゝ、不遠由にて、先に立待合する體故、片へに置し肴釣道具を尋、持歸らむとて右肴を見しに、肴には獲もの一つもなし、兩人とも同樣なれば、驚きて彼女を尋るに行方なし、全狐に誑らかされしならん、おしき事と、かの龍介我知れるもとに來りて、かたりけるとぞ。

以上六話のうち、始めの三話はたゞ害をしたといふ話で、そのうち一つは仇を報じたことになつて居り、後の四話は人間の形をとつて表らはれた話になつてゐます。

何か不可解な事件が生じた際に、狐狸の業として形づけるのは、當時としては一般に同意されたことであり、從つて普通のことであつたでせう。また自分の不注意などで不始末な結果になつた場合などに、狐の仕業にかこつけてごまかすといふやうな手も行なはれて、それですんだことと思はれます。守信は（一）の話に「怪談に托して髻など切るもの多し」とはつきりいつてゐます。色情狂の行爲なども狐の業とされたでせう。第三の荒木坂下の油揚屋の事件は、中間の喰ひ逃げでありませう。

生物（いきもの）を殺すことは氣持よいことではない筈です。害を受けて惱まされてゐた場合などは特別ですが、狩獵を稼業にしてゐる獵者でも、狩つてゐるその時は夢中で、射留めた時は滿足で愉快でありませうが、可哀さうなといふ氣持のする場合も少なくないわけです。動物が仔を連れてゐたり、獲物が仔であつたりする場合には、特に左樣なことが多い筈です。そしてその人間性の呵責ともいふべき念が深く頭にこびりついてゐることもありませう。其を夢に見ることなどのあるのは當然です。

（二）の話の場合など、狐を殺したといふことと、その夜偶然小兒が火傷をしたことを、祟りとして結びつけるのは人情上自然とすべきです。

(四)の獵師の話は、酒代をとつて行つた役人と稱する者が實は贋もので、村で犯罪を聞き込んで、役人と稱して詐欺をやつて成功し、一方獵人は人間の詐欺とは氣がつかずに、狐と思ひ、返報に畏をかけたら、一匹かゝつた、とすれば説明がつきます。そして狐が錢をもつてゐたといふのは話を面白くするためのつけ足しであつたでせう。(五)の眞壁村の百姓の話は、このまゝでは説明が困難ですが、妻が夢と現實を混同したとするか、來たのは本人でなく仲間であつたとすると説明はつくやうです。後者であつたとすれば、江戸にゐた夫なる者に害を與へようとする者があつて、執念深い詐りをやり、妻は其にひつかゝり、後日其が明かになつた場合に、夫は其とは感づかずに、狐の業と判斷してしまつたのかも知れません。或はまた夫なる者には、村に行つた男も原因もわかつてはゐたが、其を表向にいふことの出來ぬ事情があつて、狐にかこつけたのかも知れず、或は實際盗賊であつたのかも知れません。(六)の水神橋の話は、最も普通な型の化狐の話で、むしろ作り話のやうに思はれます。

第五の類の狐憑きといふものには、種々雜多な精神病者、精神異常者が含まれてゐるやうです。種々の資料から考へると、大體次のやうなものがあります。

一　病者が、が狐自分に害を加へんとする、狐が自分を襲つて來る、などといふ風の强迫感念、

恐怖症

二　病者が、俺は狐だ、狐が憑いてゐるのだといふもの

三　病者の擧動、言語等の異常な樣子から、他人が狐憑きだとするもの

そして全部を通じて、狐の妖怪性、其に關して狐に對しての恐怖心、狐は人に憑いてさまざまの奇怪事をさせるものである、といふことが、人達の間に深く信じられてゐたことが根本の原因になつてゐるものと私は解釋するのです。つまりこの知識、感情、恐怖心の自己感應と、精神病者をその考で判斷したことの結果であると思はれるのです。

前に狐に關する「大和本草」の記述を出して置きました。わが國で最高峯に列せられてゐた博物家の益軒が、あの文でいつてゐるやうに信じてゐたほどですから、時の俚人が、それと同じやうに、または其以上に、妖怪感、恐怖感をもつてゐたことは當然すぎることです。先づ第一のものは、精神病者が狐の恐怖をいふことは、右のことから當然です。此は狐憑きとはいはぬのが正しいでせう。第二のものでは、常にその頭にあつた狐憑きの知識や感情が、精神異常者に、自分は狐憑きだといはせ、又はその擧動をさせることも自然でせう。第三のものでは、もともと狐憑きといふものの限界や、特點が明白なものではないのですから、病者のさまざまの異常を狐憑きだと考へさせることも自然でせう。第二は本人が自身で狐憑きになるのであり、第三は他人が、よい加減の頭で狐憑き

だときめるのです。

精神病者の言語や、動作や、表情などは、當然不自然です。狐の眞似をしてゐるとか、狐に似てゐるとかいふ風に見られることは自然です。精神病者は普通食慾が旺んで、喰し方は不作法で、變です。小豆飯を與へたら獸(けもの)のやうに食した、といふやうなことも、狐を結びつけさせたでせう。もともと狐の動作を詳細に見てゐる人は少なく、狐とて世俗にいふやうな妙な動作をしたり、踊つたりするわけはないのですが、この場合の狐の動作といふものが、人間の頭のなかで作上げられて、狐の動作として一般共通の知識になつてゐるもので、其が土臺にされてゐたのであると考へられます。本人自身が狐といふことをいふ例では、狐憑きとは如何なる動作などをするものかといふことが頭にあつて、其がその言動に表らはれるのであつて、私は狐憑きを演ずるといふのが正しいやうに思ひます。狐に關して恐怖感、狐憑きといふ觀念が消退した今日では、狐憑病者が無くなつたといふ事が、何よりも有力な消極的證據といはれてよいでせう。

右のことから、狐が憑くといふ外に、精神薄弱者、精神異常者、異常狀態にある者に狐を憑けるといふことがあるのも自然です。狐利用の修驗者の類や寺僧のことは前にも例を出しましたが、狐を憑けるといふことも實際に行なはれたものと見えます。太田蜀山人の「半日閑話」に、狐憑きの娘に關する一件書類が載せてあります。文政元年に差出された屆書で、面白いものですから、引用

します。

文政元寅五月廿一日屆書差出す　　御普請役町田相之助妹　あい

右愛義四月二日より亂心樣に御座候處、得と相糺見候得は、大久保新田當山修驗大乘院に遣はれ居候狐之由申聞候に付、右大乘院に遣はれ候處に候はゞ、何等の譯を以乘移候哉、其段相尋候處、祈禱を頼まれ右布施料を申請度段、依之乘移旨、大乘院差圖に付乘移候段申聞、不穩の間、家内之者共晝夜相掛り、色々介抱仕、則大乘院觸頭の鳳閣寺へ罷越、右之段始末相談候處、同寺申聞候は、大乘院義呼出、一通承糺上挨拶可致旨申聞、同月七日右鳳閣寺より大乘院幷同人組合同道にて、鳳閣差圖の由にて私共へ罷越、病人と問答致度旨申聞候に付、親類共幷私立會問答に及承候處、最初病人私共へ申聞候通り、大乘院に遣はれ候狐にて、則同人差圖に付乘移候段申聞候に付、大乘院義も一言の申披無之、組合之者共義も及赤面候次第に付、私幷親類共より申達候は、大乘院差圖にて乘移候義に候はゞ、早々立去候樣可取斗旨及掛合候處、右尋問之趣にては、何分大乘院身分難相立、此上心に及候丈は祈念致度段、同人申聞候に付、勝手次第祈念可致旨及挨拶候に付、大乘院は勿論組合一同祈念致候處、病人義も快樣子に付、此上再發之樣子に候はば、組合之内え申呉候樣申置一同罷歸候、然る處同月晦日より猶又再發之樣子にて騒敷有之候に付、早速其段右組合へ申達候處、猶又當月六日、大乘院其外組合一同罷越、病人え再應及尋問候處、何分最初相答候通之義にて、其節も猶又大乘院始組合一同終日祈念致候得共、一向立去樣子も不相見、今以同篇にて全快不仕候に付、此節出所之義祈念品々手當等仕候、右大乘院義御吟味之義は相願不申候得ども、同人狐遣候由、外々にても私方同樣之義所々に有之趣、風聞も及承候間、此後如何樣之義出來、引合相成可申も難斗奉存候間、此段申上置候

右之通申聞候に付申上置候以上

御普請役　町田相之助
御普請役元〆　大越九兵衛
河岸序七郎

大乘院の御吟味を願ふといふわけではないが、外にも同様のことがある由なので、お屆けに及ぶといふのです。大乘院といふ修驗師に使はれてゐる狐があり、大乘院は其を娘に憑かせて、祈禱をたのみに來るやうに仕掛けて、祈禱料を稼がうとしてゐるのであるといふ、娘(狐)の言葉を、大乘院自身に於て、「一言の申披無之」かつたといふので、その意圖は明らかです。娘は何か事情があつてか、または信心からか、大乘院に詣つて、その計畫的な暗示を受けて精神異常を呈したのでせう。そしてその娘は、眞の精神病者で、治癒しなかつたものと思はれます。

「耳袋」にはこの類の話は五つあります。

(一)狐狸の爲に狂死せし女の事　寛政七年の冬、小笠原家の奥に勤めし女、容儀も右奥にては一二と數へけるがふと行衛を失ひ、全く駈落致しけるならんと、其宿をも尋ね問ひけれども、かいふつと見えざれば、輕き方と違ひ四壁嚴重の屋敷、とり〳〵疑ひけるが、日數廿日程過ぎて、同じ長局の女手水を遣ひける手水鉢の流れへ、白き手を出し貝殼にて水を汲むを見て、右女驚き氣絶せし故、同部屋は申すに及ばず、何れも駈附け見れば、怪しき女樣の者樣下へ入るを見て、大勢にて差押へければ、かの行衛知れざる

女故、湯水等を與へ尋ね問ひしに、始はいなみしが切に尋ねければ、我等はよきよすが有りて宜しき所へ緣に付き、今は夫を持ち候由を申す故、いづかたなり哉と聞き侍れど、其答もしかと〳〵ならず、色々すかして尋ねければ、さらば我が住む方へ伴ひ申さんとて樣の下へ入りける故、跡に付きて兩三人立入りしが、蓋か樣下を行きて一ヶ所の樣下に、胡座鑓など敷きて古き椀茶碗を並べ、此所住家なる由故、夫の名など尋ねしに、兼て咄せし通りの男也とて名もしかと答へず、誠に狂人の有樣故、其譯役人へも斷り、宿を呼寄せて暇を遣はしけるが、兩親も怡びて品々醫藥を施し療養を加へけれど、甲斐なくして程なく身まかりしとなり。

(二)狐附奇異を語りし事　元本所に住居せし人の語りけるは、本所割下水に住居せし頃、隣なる女子に狐付きて色々なる事有りし故日々行きて見しに、かの狐附、隣の幟風も吹かざるに倒れしを見て、嗟呼あの家の小兒病死せんなど言ひ、或は木の枝の折れしを見て、あの家は何の事あり、竿の倒るゝを見てはあの主人かゝる事ありと言ひしに、果して違はざりしかば、如何なる事やと尋ねしに、彼女答へて、すべて家々に守神有り、信ずる所の佛神有りて、吉凶とも物に托して知せ給ふ事なれど、俗眼には是を知らず過す事有りと言ひしと語りぬ。

(三)狐の附きし女一時の奇怪の事　予が同僚の人、壯年の頃本所にて相番有りしが、右の下女に狐附きて暫く苦みしが、兎角して狐も離れ本心に成りし後、小さき祠を屋敷の内に建て置きしが、彼女其後は人の吉凶を祠に伺ひて語る事神の如し。その同僚もたばこ入などを紙に封じ、是は如何なる品にてと彼女に與へけるに、神前へ行きて夫はたばこ入なる由を答へければ、不思議なる事と思ひしが、暫く月數も經ちて同樣に尋ねけるに知れざる由を答へて、其後はあたる事なかりしと也。

(四)狐祟り之事　文化七年夏秋のころ、日本橋左内町に一奇事ある由、人の語りしは、右町に最なか

饅頭を商ふ菓子屋有しが、娘はいまだ十二三歳にて、外より聟を取、いまた取合はいたさざりし由。しかるに彼聟も甚實體にて、一間にひとり寢させしが、夜更候へば其一間において咄合候聲聞へしを、追々聞付候ものも有之、右寢床へ立入しものもなく、母も疑ひて、彼聟に尋しに、一向不覺由を答ふ。然るに彼聟に狐付ていへるは、我等は實は女狐にて、此息子とちなむべき緣ありて來りしなり。隨分可立退なれども、吾懷姙なせし間、子をうみ候はゞ、早速はなれ去べし、其子を何卒そだて可給、我等影身に隨ひて養育なすべき間、强て世話も有まじ、不承知にては、我も生て居る事ならざれば、息子も命なかるべし、偏に頼む由口ばしりければ、人々も不思議の事に思ひしに、彼母一人、何條狐の子を育せんいはれなし、外聞あしき間、たとひ如何樣の事あるとも難成由、烈しく斷し、其後聟母ともに煩ひ出し、母はまつさきに身まかりし由。跡は如何なりしやと、彼家の向ふの藥屋、我しれる醫の元に來り、かたりぬ。

(五)獸も信義を存する事　尾州御館の白書院とかや、御庭老い繁れる松兩三株ありて、其根に穴あり、年久しく住める狐ありて、壹人扶持づゝあづかる者ありて、食事に拵へ、絕へず與へけるよし、しかるに、文化十年修復の事あり、市ケ谷町家の職人、兩三人も來りて、修復の拵をなしけるに、一人の若き大工仕事休の內、其邊の庭廻りを見けるに、右松の木陰に古き桶ありしが、これは何のためなるやと、獨り言しを、しれる大工、それは狐に餌をあたへたまふ由を申ければ、魚の類も見へず、めし計、これには狐も食にあき間敷、われら方へ來らば、むまきもの振舞んと、口ずさみしが、其夜彼大工の若者へ、狐つきて、わからぬ事を申ける故、父母其外大きに驚、いかなる事にて、此者に狐付けるや、いづかたの狐なるやと尋ければ、尾張御庭の狐なり、此者我方へ來らば振舞せんといひし故、來れりと申ける故、其好みに應じ小豆飯など振まひけるに、多くも喰はざりしが、是は過分の由、悅び食ひて、年久敷御庭に住たまふやと尋ければ、太閤秀吉の頃より、此處に住むよし申けるとなり。約束の食事も振舞ぬれば、最早おちたまへ

と申ければ、成程おち可申、しかしながら明朝迄は、さし置呉候樣申故、何故にや、夜分は犬なぞを恐れ候哉と申ければ、我らがやうなる數百年を經たる狐は、犬など恐るべきにあらず、何疋取卷とも、物の數とはせず、しかれども屋敷の門限も過ぬれば、こよひは通りかたし、明なばとくかへらんと申故、神通を得たる狐、なんぞ門の限りを恐るゝや、いづ方よりも歸らるべきと申ければ、我年久敷尾張の厚恩を請ぬれば、屏垣等を越るは安けれ共、垣を破る事はすまじく由の事、くれぐれも、食事振まい馳走なせし社禾けれと、禮謝なし、我等前年御屋敷の御扶持にて事足ぬれど、近頃子供多く出來て、食ひ足らぬ事あるよしを、問答の內答へけるを、尾張の役人へ聞に入れしに、尤なる事なり、加扶持たまはりしと、專ら市谷邊の噂聞しが、彼家の老職鈴木嘉十郎といへる人、衛爾が歌の友にて、會合の折から、かたりしを、予も聞し故、しるしぬ。

(一)は、守信も標題に、狐狸の爲に、と書いてゐるだけで、話の筋道では狐は關係がなく、精神病者が床の下にむぐつてゐた例です。精神異常を簡單に「狐狸の爲に」と考へた例として出しました。

(二)と(三)は、女子の精神異常時の特殊な感覺と偶合の話で、このやうな事は別段不思議なものではありません。當時此を狐にむすびつけて考へたのは無理のないことです。これ等の話は、狐が憑いたとされた人間が告げごとをするのですが、此と同一傾向のもので別類のものがあります。前に掲げた「本朝食鑑」の文中にある飯繩の法(飯綱法ともいふ)がそれで、特殊な狐を飼つて置いて、其からのお告げを取次ぐといふ仕事をすることです。またこれほどに特殊なものではなく、たゞ自

分の寺なり社なりに住んでゐる狐に伺ひを立てれば返事をして呉れるといふ形式のことをしてゐたのもありました。これ等は巧妙な占ひ者の手法です。狐を利用して利得を收めるさまざまの手が行なはれてゐたものでせう。前掲の「閑田耕筆」の正念寺の僧などもその一例で、此を巧みに行なつてゐた主僧が、右のやうに人に語り聽かせてゐたのであらうと思はれます。

(四)の饅頭屋の聟の話は、輕度の精神病者で、譫語を發し、後に狐憑きを演じたのであつて、別室臥寢の內心の性的不滿が伴なつたものかも知れません。

(五)の尾州屋敷の狐の話は、最も面白いもので、狐憑きの說明に良い材料と思はれます。この若者は年來狐の怪、狐憑きについて特に深い感情をもつて居り、其等についていろいろ知識をもつてゐたのでせう。そして至つて氣の弱い人間だつたので、狐の食器を見て、來たらうまい物を振舞つてやらう、などと何氣なしにいつた自分の言葉が頭にとびりついて、恐怖感となり、やがて精神異常を來し、そこで自分の裡に知識として存在した狐憑きの狀態をその言動として演ずることになつたのでせう。そしてこの男は誠實な性質で、自身が門限とか墻を越すといふ類の規律を嚴守してゐたので、そのことが狐の言葉としても出されたのでありませう。此が私の解釋です。

狐憑きといはれたものには雜多なものがあつて、異常、症候が低度のものがあり、治癒したもの

が多かつたやうです。行なはれた治療には、祈禱や呪等、及び病者を苦しめたり、威壓する方法などでありました。いふまでもなく、憑いてゐる、乘り付いてゐる狐を追ひ去らすといふ考で、生松葉で燻し込めるといふ法なども行なはれました。狐の穴を燻して狩り出す方法そのまゝなのです。狐憑きと他から見られたのではなく、自身の感情、意識から狐憑きになつてゐた病者には有效であつた筈です、

「耳袋」に次のやうな話があります。

妖氣强勇に勝たざる事　土屋侯の在所、土浦の家士に小室甚五郎といへる者有りしが、あくまで强氣にて常に鐵砲を好み、山獵などを樂しみけり。其頃土浦に土俗呼んで官妙院と呼ぶ狐あり。女狐をお竹と呼ぶ。稻荷の社など作りて右兩狐を崇敬する者もありけるが、或時甚五郎右の雌狐竹を二ツ玉を以て打留め、調味して歡盃の助となしけるが、土浦城下より程近き他領の百姓の妻に右官妙院付きて、樣々口ばしり甚五郎を恨み罵りける。其夫は勿論、村中打寄りて、こは道理ならざる狐かな、甚五郎に恨あらば甚五郎にこそ取付くべきに、ゆかりなき他領の者に付きて苦むる事如何にと責問ひければ、答へて言へるは、我が雌を殺し食へる程の甚五郎に如何で取付くべきや、土浦領へ入るさへ恐しきまゝ、汝が妻に取付きたり。何卒甚五郎を殺しくれられよと申しける由、土浦領に知音ある者申しければ、甚五郎此事を聞きて、憎き畜生の仕業かなとて、頭役人へ屆けて右村方へ立越え、狐付に向ひ、不屆なる畜生、他領の人を苦しむる不屆さよ、彌々落ちざるに於ては、主人へ申立て、百姓等が建置きし社をも破却し、假令日數延ぶるとも、晝夜積心を盡し官妙院をも打殺すべしと大きに罵り、彼社へも行きて同じく罵りければ、早速狐落

ちて、其後は何のたゝりもなかりしとかや。

筋も内容も自然味が深い良い例です。百姓の妻はこの社の崇敬者であつたかも知れません。少なくも其の御利益は信じてゐたのでありませう。そした甚五郎の惨酷な行爲が、雌狐が必らず憑いて祟をするであらうと思つたと考へて無理でないでせう。しかし甚五郎本人には憑き得まいから、誰か他人に憑いて間接に彼を惱ますだらう。其に選ばれるのは雌狐であるから女人であらう。かういふ感念が病的に深まつて、話のやうな結果になり、發症の原因がこのやうな單純なものであつたから、豫後の經過もよかつたのだと考へよいやうに思はれます。

弓矢を用ひて憑いてゐる狐を威壓して去らせるといふ考の療法が有效であつたやうです。弓は當時重要な武器であり、且つまた神聖なものといふ信念が強くもたれてゐたのですから、當然のことと考へられます。「耳袋」に、この例話が二つあつて、似たものですが、共に内容の良いものですから、兩方とも出します。

(一)未熟の射術に狐の落ちし事　予が親しき弓術の師たる人の語りけるは、或日出入の輕き者伴を召連れ來りて、此者に狐付きて甚た難儀の由、蠱目とかいへる事なして給はり候へと歎きける故、其樣を見しに、實にも狐の付きたると見えて、戯言など言うてかしましく罵りける故、蠱目は潔齋の日數も有りて急には成りがたし。然し工夫こそあれ、置きて歸り候樣申付けて、則ちかの狐付を卷藁の藁へ縛り付けて、予共其外弟子共に申付け、さし矢を數百本射させけるに、暫くは叫び居りしが、後は靜かに成りて臥しけ

るに、果して狐は落ちにけり。子共弟子など蠱目の法知るべきにもあらず、未だ矢所も極ちざる未熟故、ふとしては卷藁をもはづれ候事度々有る事なれば、狐も其危きを知り、且さし矢の事なれば誠に少しのゆとりもなく、弦音矢音烈しければ、落ちんもむべなりと語りぬ、をかしき事にぞありし。

(二)剛勇伏狐祟事　小笠原官次郎は、帶佩の家、弓術の家筋なり。或年伊勢へ代拜として、家來兩人差立しに、右家來、東海道三遠の内、宿場も聞しが忘れたり、旅籠屋に一宿して、湯など遣ひ、食事仕廻ひしに、亭主出て願ある由申けるゆゑ、いかなる願やと尋しに、御先觸にて見候得ば、小笠原家の御内の由。御家は弓術の御名も高ければ、願ひ奉るにて候。私娘二三ヶ年、野狐に付れ相惱み候、醫藥祈禱立を盡し候得共、しるしなし、何卒鳴弦蠱目の御術にて、落し給り候得と、深切に願ひければ、兩人存の外の願ひ、素より射術の家に仕ふれども、弓を射し事もなき程なれば、大に難澁せしが、右の内一人申けるは、我等を見懸けての頼みいなむべきやうなし、二三年もつき居る野狐なれば、卒示の事にては退散覺束なし、得と考而可答旨申、さて一間に入りしが、今一人の男、御身は何を以て請合ひ給ふや、御身我等とも、弓術の家に仕ふとはいへども、我は弓を射し事もなしと申ければ、我に任せ、我申付る通りなさるべしと申付、さて其身は兩人とも水をあび、麻上下を着して、彼一人の者にいふやう、我等射術の家に仕へ、弓射るすべしらずと答へば、我々のみにあらず主人の恥辱天下の恥なり、誠に一生懸命の所なり、我等は生きて歸る心なしとはげまし、さて弓具を持出けるゆゑ、是を見るに、かけ釣の弓矢か、又は奉納の弓矢にや、獵師の弓矢なるや、亭主差出しければ、さらば病床へ案内あれとて、右狐付を引据ゑ置、諸肌を拔て彼弓に大雁股の矢をつがひ、病人に向ひ大いに罵しりて云やう、畜類の身分、人間の體に宿をかり、殊に女の身分をなやます事、不埒至極なり、最愛の娘なれども、是まで手を盡したるうへは死すとも不悔と、親々も申なれば、我今此雁股を射殺すなり、覺悟せよと申ければ、病人大に歎き、眞平ゆるし給へ、早速立退

なりと震ひわなゝき詫けるゆゑ、しからば只今立去るべしといふと、とらへ居し人を震はなし、表の方へ駈出で、戸口に倒れけるゆゑ、介抱して水なぞそゝぎければ、息出て、本性と成しとなり。今一人の男、たん〳〵櫺子を尋ぬれば、我等主人の恥、武備のおとろへと思へば、死を決し、彼を射殺す心なりと、語りしと也。

共に蟇目(ひきめ)といふ術を依頼されて、威嚇によつて成功した例です。(三)では、術者が事が主家の體面に關するものとして、無上に興奮して眞劍であつたので、頗るものすごい樣子であつたでせう。蟇目といふのは、古式で邪氣を拂ふ行事として鳴絃と共に射て、響を發せしめるに用ひる鏃の一種です。大言海に『響目ノ約、或ハ云フ、其孔蟇ノ目ニ似タリト。木製ニシテ、鏑矢ノ鏃ニ似テ長ク、凡ソ四寸許リ、圍ミ五寸、五孔或ハ六孔アリ、射ル物ニ傷ツケヌ爲ノ用トシ、又空氣孔ニ觸レテ高ク響ケバ、能ク妖魔ヲ伏スト云フ。弓術ノ道ニ、蟇目ノ矢ヲ射ルコトト、弦打チヲスル(鳴絃ト云フ)コトトニテ、共ニ其發聲ニテ邪氣ヲ退クト云フ』とあります。

狐憑きは東洋に特殊なものの由です。此が精神病であることは、夙に我國の醫家によつていはれてゐました。香川修庵は、その著「一本堂行餘醫言」に、「癇」の一篇を掲げて精神病を論述して居り、そこで俗に狐憑きと稱するのは皆狂證(精神病)であつて、野狐の祟りといふものではないと

說いてゐます。香川修庵は、名は修德、播磨姫路の人。年十八にして京に笈を負ひ、前に述べたとのある後藤艮山に就て醫を學びました。艮山は之を器とし、伊藤仁齋に從て經義を修めしめました。居ること五年、志を決して醫となり、講究多年、一家の言を立てゝ、「聖道醫術基本一」にして而して二致無し」と言ひ、その堂を名けて一本と號し、「藥選」、「行餘醫言」等を著はしました。受業の生徒籍を着くもの四百餘人。寶曆五年、七十三で歿しました。文化年間になつて、鳥取藩の陶山大祿は「人狐辨惑」を著して「狐狸は狂癇の變證にして、所謂卒狂これなり、決して狐憑人の身につくものにあらず、と斷じ、狐の靈獸にあらざる例證及び狐憑の馬憑に變り行く例をあげました。(富士川游氏による)

近年は狐憑きといふことを耳にしなくなりました。山村の人達などにはまだいはれてゐるやうである。明治三十五年に、門脇直枝氏が「狐憑病新論」といふ著作を出して、一一三名を扱つてゐますが、この頃が、この病症の末期でありましたらう。近年も一例を私は耳にしましたが、例外といつてよいでせう。精神病者に狐のことをいふ者がなくなつただらうと思はれます。狐が憑くといふ考が人達の頭から消退してゐる當然の結果です。此は教育の普及、知識の進歩によることですが、狐そのものの減少といふことも併せて考へるべきでありませう。狐が澤山に或は普通に人間との觸接界内に棲息してゐたからこそ、狐に對する特殊な感情がもたれてゐたのでありませう。

六　怪異談の科學性（三）

亡魂、幽靈、化物屋敷などのこと
人魂、鬼火、怪火のこと

最も科學的ならざる話題といへば、亡靈、幽靈、人魂といふやうな類がその主要なものでありませう。即ち死亡した人間が何かの形で顯現するといふ現象です。此から、これ等の最も科學的ならざるが如きものを採上げて、詮議を進めて行かうとするのです。

先づ取材の內容を明らかにし置く必要があります。こゝでは、大體以下の四通りのものを採ることにします。

第一は、無形的の出現で、夢として感知され、音として聞かれるといふやうな類。

第二は、現形出現で、人間の形をとつて現らはれるといふこと。

第三は、幽靈といはれる場合で、第二に屬すべきものもあるが、條件、內容等がより怪奇的であるもの。

第四は、人魂などといはれる、人間の眼に認められた形體で、死人にむすびつけて考へられた怪火など。

何れの類でも材料は澤山にあります。しかし話にしろ記事にしろ、作爲が加はつてゐること、歪められてゐること、修飾されてゐることが普通であるのはいふまでもないことで、種々の點を考慮すると、材料は案外に少ないやうです。

これ等の詮議には、先づ全體に亙つてその內容の條件の種々相を明らかにして置くことが必要です。先づその經驗者と亡靈たる人間との關係、その感知、經驗の時と死亡時との時間的關係が大切な條件です。前者に關しては、經驗者が特に親密な間柄であつた場合から、普通の親近者であつた場合、知人といふ程度であつた場合、全く知らぬ人であつた場合、人は知らずに、事件又は事實を知つてゐた場合等が區別して考へられねばなりません。後者に關しては、其が死亡時、死亡直後のことであつたか、その後短時日間のことであつたか、又は相當時日の經過後であるか等が區別して考へられねばなりません。

亡靈現象に根本的になつてゐる條件は、執着意念といつてよいでせう。その執着の對象は、物であり、また人間です。人間である場合には、其が個別的な特殊人であり、或は無差別的にたゞ人間達であることもあります。また對人間ではなくして、場所であり或は物件である場合もあります。

「耳袋」には、前の狐の話と共に、著しく面白い多數の亡靈談が筆錄されてゐます。玆でも其等を材料にして行くのですが、その前に、私の經驗した話などを書いて置くことにします。

私の父親は、司法官でした。そして交友といふものが至つて少なく、その一面にごく少數の心友といふやうなものをもつてゐたやうでした。その一人にI氏がありました。この仁は精神家であつた由です。その舍弟が亞米利加で神學を修めて、神學校の教授をしてゐました。私はその仁を訪ねて、兄なる仁の遺物を見せて貰つたことがあります。その內に漢譯の聖書があつて、其に朱點を附するところに小形の圓印が捺してありました。整然と捺し連ねられたところがあつて一種の奇觀でした。そしてその印形を見せて貰つたのでしたが、其は意外なもので、基督の十字架像で、十字架は鋼鐵で出來てゐて、印が其の基底面に彫られてゐました。常人でなかつたことをその時も感じたことでした。さて私の十二三歳の時のことです。朝起床して來た父は、變なことがある、昨夜Iが來た夢を見た、といふのでした。父は極めて無口な人物で、用があつても、言はずにすめばそれですますといふ風の人物でした。それ故、この言葉が家內中の注意をひきました。そして間もなくI氏が昨夜永眠したといふ電報が來たのでした。父は急いで奧州の町から上京しました。此が私の明瞭な記憶です。この種の話は幾らもあつて珍らしいものでありませんが、私はこの自らの例を尊重

してゐるわけです。

大學在學中の一年間、私は小石川のさる寄宿寮にゐました。十數人ゐた同寮生の一人が脚氣を病んで帝大附屬病院に入院しました。或る土曜日の午後、病室を見舞つたところ、氣分が大層よろしいといひ、「藤村詩集」がしきりに讀みたい、自室の押入にあるから、次手の時に屆けて貰ひ度い、といふのでした。明日は日曜だから、持つて來てあげようと約束しました。有難い、といつて喜びました。翌日の朝食事の卓で、臺所受持ちの老女が、昨夜は妙なことがあつたといつて物語るのでした。夜中に並んで寢てゐた女中に起されました。隣の室――この部屋が病人の自室です――の押入で妙な音がする、といつたといひます。なるほど妙な音のやうなので、床の上に起き上つて氣を落つけて耳をそばだてました。また音がしたさうです。其は鼠の音などとは全く別で、荷物を動かすやうな音でした。そしたらボンボン時計が二時を打ちました。二時だなと明らかに意識して寢たといふのです。この話をきいてゐるところへ、來客がありました。そして其は病人の親族の人で、昨夜二時少し前に、急に衝心症候で死んだといふのでした。私は走つて行つて押入を調らべて見ました。そして荷物の下積になつてゐる書物のなかに、「藤村詩集」を見出したのでした。

私は幽靈は見たことがありません。自分の見た幽靈の話は出來ません。併し價値の高いと思ふ幽靈談を信ずべき朋友から聞いてゐます。直話でなくて、中間者が一人挿まつてゐますが、話者も傳

話者も信用すべき人物で、聞いた時は少ししか經つてゐなかつたのです。その仁が赤燈の終電車に乘つてゐて、櫻田門から櫻田町に向つてゐました。そして乘客はたゞ一人で、運轉臺の近くに坐はつてゐたさうです。電車が交叉點に來て、車掌がポールを外したので車内が暗くなりました。そしてポールが架線に觸れてパッと明るくなつた時に、自分のすぐ側に一人の男が腰かけてゐて、そして腰から脚にかけて血がついてゐるのが目に入りました。ポールはうまく架線にかゝらなかつたとみえて、また暗くなり、再び明るくなつたのでした。そしてその時には車内がもと通り自分一人になつてゐたさうです。あまりの怪しさに、車掌にその話をしたところ、時々あることです、事故の多い場所でのことです、とたいした事でもないやうに答へたといふのです。その仁は工學士でした。そして「僕も科學教育を受けた人間だ。幽靈などといふもののあるといふことは信じてゐなかつたどころか、考へたこともなかつた。僕のいふことを信じろ」といつたといひました。私も此を信じようと思ふのです。

私は第一の類として、死亡した時に、知人や親近者がその人を夢に見るといふこと及び關係のある場所で音がすることをあげました。前者は夢知らせといはれるものです。此は普通にいはれてゐることで、前記の私の經驗が此の簡單な一例です。此は精神感應として認められてゐる事實で、特に詮議の必要はないと思ひます。作爲の加はつたらしいものには、時々こみ入つたものもあり、更

に物語風になつてもゐます。「耳袋」にも一、二ありますが、それ等は夢の問題として興味がありますが、玆での目的の範圍外として、それ等には及ばぬことにします。

音がするといふことも普通にいはれてゐる事實です。寺で、そこに葬られる新佛が知らせに來るといふ話は一般にいはれてゐることで、實際であると思はれます。寺の人達はその音で新佛の男女の區別もつくともいつてゐます。菩提寺は吾々にとつて子供の時から印銘の強いもので、自分が死ねばこゝに葬られるのだといふことは、深く頭に印銘してゐる事です。意念とでもいふべきものの強く結びついてゐるものですから、有り得べきことと思はれます。「耳袋」には、この類の話が一つだけあつて、それは子供が笛を吹いたといふ、まことに可憐な話です。

意念殘る說の事　中山氏の人の小兒有りしが、出入る者ふけば音をなすびいどろを與へけるを、殊の外歡びて鳴しなどせしに、其日奥方里へ罷るとて、右小兒を伴ひて親里へ至りし故、留守の淋しきを訪ひて、予が知れる者尋ねしに、酒など出し汲かはしけるが、押入の內にびいどろをふく音しける故、驚きて戸を明けて見れば、畫小兒の貰ひしびいどろは紙に包みて入れ有りしが、音のすべき樣なしとて元の如くなし置きしに、又々暫く有りて音をなしける。改め見れば初にかはる事なし。さるにても不思議也と思ひしに、右妻の親里より急使來りて、かの小兒はやくさにもあるやらん、引付けて身まかりけるとや。

この類の話は場合によつては精神感應として說明が出來ませう。私の經驗の場合に、その音を聞いた者が私自身であつたとすれば、「藤村詩集」のことや、其のあり場を知つてゐるのですから、

さう解釋されてよいわけです。併し問いたのは、全然何も知らぬ婆さんなのです。「耳袋」の例の場合でも、聞いた人は、笛のあることは知らなかつたのです。精神感應以外の何かの理由でこの種の現象があることは否定出來ないと思はれます。

第二は、死亡した前後に、その事を全く知らぬ親近者や知人に、現形をとつて現らはれる話です。「耳袋」には七話あり、守信は其等のうちの三つに幽靈といふ字を用ひてゐます。うち二つは前に出しました。一つは母親が里子にやつて置いた乳兒の許へ行つた話、一つはその家に特に呼ばれて行つて廊下で遇つたといふ話でした。これ等では、守信は、なしとも極め難き事、なきとも申し難き事としてゐるのです。其他のもののうちから三話を次に出します。

(一)老婢殘魂志を述べし事　御普請役元締を勤めける早川富三郎が祖母死しけるが、隣家の心安くせし同位の者方へ至りて安否を尋ねける故、右の妻不快の事を尋ね、快くて目出たしなど述べければ、病中尋ね給はりて忝く、暇乞に參りしと言ひし故、御普請役の家內なれば、旅などへ赴き候やと相應の挨拶なしけるに、向うの町家の心安き者へも行きて、同じ樣に禮など述べける。久々煩はれける老婢快くて目出たき由、暇乞などのたまひし事もあれば、同輩の妻も町家の妻も、富三郎へ罷らんと立出しに、富三郎方にては葬禮の仕度などなしける故、驚きて尋ねければ、右の老婢は今朝相果てし由聞きて、いづれも驚きけるとや。

(二)下女の幽靈主家へ來りし事　鵜殿式部といへる人の奥にて召使ひ、數年奉公して目をかけ使ひし

女、久々煩ひて暇を乞ひし故、養生の暇を遣し暫く過ぎけるに、右女來りて式部母隠居の宅へ至り、久々厚恩にて養生致し有難き由を述べければ、老母もその病氣快きを悦び賀して、未だ色も悪しき間能く養生致し歸參して勤めよと申しければ、最早奉公相成候由、土産にとて手前にて拵へし品とて團子一重持參せしまゝ、左もあらば先づ養生がてら勤めよかしとて挨拶なしければ、右女は其座を立つて次へ行きし故、老母も程なく勝手へ出、誰こそ病氣快きとて歸りしが、未だ色も悪しければ傍輩も助け合ひて遣すべしと言ひしに、家内の者共右下女の歸りし事誰も知らずと答へて、所々尋ねしに行方なし。さるにても土産の重箱有りしとて重を見しに、重箱はかたの如く有りて、内には團子の白きを詰めて有りし故、宿へ人をやりて聞きしに、右女は二三日以前に相果てしが、知せ延引せしとて、右宿の者來り屆けし由。不思議の事也と鵜殿が一族の語りける也。

(三)意念奇談の事　小日向水道端に、婦人の療治産の取扱ひ巧者と人の沙汰せし山田齊椒といへる醫師、兩三代右の所に住みけるが、享和二年正月、齊椒長病にて起居もなり難き程にて、同月十六日少々快き間、近隣の寺へ詣で閻王を拜すべしと言ひしを、妻子なる者、かゝる大病にて駕にても詣で給ふ事難かるべしと諭しけるが、其日の夕方身まかりける由。然るに其程近き所に住みける、御賄方を勤め兼て齊椒と懇意ある者、子供を連れて閻魔へ詣でけるが、途中にて齊椒に行逢ひし故、久々病氣の樣子など尋ねて立別れ、日數過ぎて齊椒死去を聞きて尋ね訪ひしに、その妻子に正月十六日閻魔へ參詣の事を尋ねしに、中々參詣など成るべき事にあらねど、しかゝの事ありしと語りけるとや。

親近者の眼に正しい形態をとつて現らはれるといふことは認めてよいやうに思はれます。また其が特殊な意志表示の態度を現らはして、其が理解出來たといふことも考へることが出來ます。しか

し問答を繰返すといふことまでは考へにくいことですが、否定も出來ますまい。

この類の話で現形を見た者は、大體親近者です。寺の主僧といふやうな若干遠いものもありますが、死人にとつては關係が深いものともいへませう。現形の體が發言したことになつてゐるのが多いのですが、此には附加、修飾があり得ることで、(二)の重詰めの白團子などは添へものでありませう。話の通りではないにしても、兎に角或る程度の意志が感得されたらうと考へてよいでせう。少なくも守信のいふが如く、なしとはきめ難きこと、寧ろあつたであらうと考へてよいことのやうに思はれます。

第三、死亡時でなく、其から時を經て、關係の物件に執着してゐて、形態をとつて現らはれるといふ話。耳袋には三話あります。次に二つを掲げます。他の一話も似よりのものです。

(一)修驗忿恚執着の事　牛込邊の町家の輕き者の母、夏に成りて夜具を質入れせしを、冬來りて取出し着て臥せりしに、右襠を着し一睡なせば、祖母々々暖かなるやと聲をなしける故、大きに驚きて質屋へ至り、しかゝの事也、仔細も有るべきと尋ねければ、右襠は未だ質に取り候まゝにて、藏に入れ置き、是迄人に貸すべき樣もなければ、質屋に於て何も仔細なし。手前を得と詮議しみ給へと言ひし故、子共又は心安き者にも語りて、色々心障りの事もありやと考へけれど別儀なし。彼婆ふと思出せしは右質物請出せし頃、表へ修驗一人來りて手の内を乞ひしが、用事取込み、其上乞ひ樣も無禮なれば、手の隙なきと答

へて等閑に過ぎし事有り。是等も恨むべき趣意と思はれずと語りければ、老人の言へるは、全くそれなるべし。かの修驗は又來るべきなり。日毎に此邊を徘徊なす由答へければ、重ねて來らば少しの手の内を施し、茶などふるまひ心よく挨拶して歸し給へと敎へける間、翌日果して右山伏通りけるを彼婆呼込みて、此間は取込み候事ありてあら〳〵しく斷りしが免し給へ、茶にてもたべ給へと念頃に言うて手の内を施しければ、此程はあら〳〵しき答故手の内をも乞はざりしが、扨々一面しては人の心は知れざると、四方山の物語して立出ぬ。其後は彼襲(ふすま)の怪も絶えてなかりしとや。

(二)明德の祈禱そのよりどころある事　祐天僧正は其德いちじるしき名僧なりし由。或富家の娘みまかりしに、彼娘折ふし一間なる座敷の角に彷彿とイみゐる事度々也。兩親或は家内の者の眼にも遮りけるにぞ、父母も大きに驚き、狐狸のなす業や又は成佛得脫の身とならざるやと歎き悲しみ、誦經讀經なし或は祈念祈禱をなしぬれど其驗なかりければ、祐天未だ飯沼の弘經寺に有りし頃、かの驗僧を聞きて請じけるに、祐天申しけるは、何方へ出候や、日々所をかへ候やと尋ねしに、日々同じ所に出る由を語りければ、我等事早速退散させるべしとて、右一間へ階子を取寄せ、火鉢に火をおこして、かの一室に入りて誦經などなせし上、右亡靈の日々イみけるといへる所へ階子をかけ、祐天自身と天井をはなし見しに、艶書夥しく有りしを、一つくねに取りて直ちに火鉢の内へ入れ、扇ぎ立てて煙となし、此後必ず來る事有るまじと言ひしに、果して其後はかゝる怪みなかりけると也。娘のかたらふ男有りて、艶書ども右天井に隱し置きしに心殘りけると、はやくも心付きし明智の程、かゝる智者にあらば祈禱も驗奇あるべき理由なり。

この類の話になると、作爲や追加、修飾が多い疑が多く、詮議の材料としての價値が疑問になりますが、祐天の話などは或る程度まで事實であつたらうと思はれます。この話では、しばしば彷彿

として イんだとあるから、幽靈の類に入れるべきですが、この點を輕く見て、狐狸のなす業であらうと思つたといふ點から、一定の箇所で、何か家人に氣のついた異常事があつたのであらうと見て、この類に入れたわけです。このやうに取扱へば、ありさうな事のやうに思はれます。娘の生前の事情は書いてないが、何か深い事情か、精魂を勞してゐた關係事件があつたとすれば、艶書への執念の强かつたであらうことが想像されます。こゝで興味のあるのは祐天といふ人物で、一通りの坊主でなく、人情の機微をのみ込んだ、相當の人生の苦勞人であつたでせう。艶書を取出して、豫め用意して置いた火鉢で燒くところなど、細工は巧みなものです。娘の情事などを察知してゐたのかも知れませぬ。「かゝる智者にあらば祈禱も驗奇あるべき理由なり」と、守信も全く確かなところをいつてゐます。

幽靈談には作爲の加はつたものの多いことといふまでもありまん。また語り傳へられる間にさまざまに歪められ、幹に枝葉がつけられ、修飾が加へられることは自然です。且つまたその歪められ方、修飾のされ方が、ますます怪奇的に、ますます興味の加はるやうにされるのが、話の性質上自然です。そしてまた在來の幽靈談、作話、演劇の怪談などの既存型に似るやうにされるといふこともあります。この種のことの全く無い話は至つて少ないものと思はねばなりません。

幽靈といはれるものには、その形態からみてさまざまあります。ぼんやりと人間の形のものを見たとか、顏が見えたとかいふ程度から、チラと見えて服裝や顏つきなどはよくわからなかつたといふ程度のもの、或る程度まで明らかに認知されたといふもの等です。これ等の如何とその話の眞實性が聯關して考へらるべきです。不明瞭であつたといふ話には、幻視や錯覺であつたことの可能性が大です。併し一面には、眞實であつたらう可能性も大きいといふことが考へられるわけです。明瞭に、特に詳細に見えたといふ場合は、生きてゐる人間であつたこともあると考へられ、また作爲、修飾、誇張が加はつてゐるといふ疑ひが濃厚で、眞實性は少ないものと考へるべきでせう。

幽靈には意志表示をしないものと、無言ではあるが表情で其を爲たといふものとがあり、簡單な發言をしたといふものがあり、更に問答までしてゐる例もあります。無言で意志表示をしたといふことと、簡單な發言をしたといふ場合は、經驗者の精神狀態が主要な條件になつてゐるのであつて、左樣であつたと感じたといふ意味に於て眞實でありませう。問答をしたといふ程度になると、作爲や修飾が想像されるわけですが、これとても、經驗者の不全覺醒狀態、頭腦の疲勞、恐怖感などによつて、簡單な言葉を發したと思ひ、又は實際發言し、或は一二の應答をしたといふ感じをもつことはあり得るものと思はれ、經驗者の話としては虛僞ではないこともある筈です。

經驗者と幽靈なるものの間の關係が、其の眞實性の判斷に必要な點です。關係者の見たといふも

の、全く關係がない者、事實も全く知らぬ者の場合もあつて、最後のものが價値が大きいわけです。なほまた見た場所が不可分に考へらるべきです。殺傷事件のやうな事のあつた場所とか、昔から幽靈が出るといはれてゐる陰氣な箇所、しばしばしばいはれる化物屋敷とか、化物廊下などといふ類の話が多いのですが、既往の事實、場所の兩者に關して知識をもつて居た者の場合には、眞實性の少ないのはいふまでもありません。

面白い實話があります。當時日刊新聞に出たものです。大正九年九月末のこと、向島須崎町の金塚文哉といふ者が、戀愛關係で、藝者であつた妻を殺し、自身もその場で自殺した事件がありました。ところが同月廿九日の深夜、慘事のあつた箇所から一町ほど離れた、秋葉神社の寂しい境內を、夜番が通つたところ、そこに白衣を着た痩せた男が朦朧と立つてゐました。夜番は驚いて、誰かと尋ねたら、落ついた調子で、□□文哉と答へました。先日の慘事に怖ぢてゐた夜番は、吃驚してしまひ、近所の人達を呼んで來たら、白衣の男は靜かに動いて、一條の青火と共に消え失せました。それから文哉の幽靈が現らはれるといふ評判が廣まりました。ところが事實は、その附近に佐瀨文哉といふ文筆者が居り、その人が散歩してゐたところを、不圖夜番に誰何されて、氏名を名乘つたのであり、青火といつたのは煙草を投げ捨てた火であつた、といふ話です。

その當時の精神狀態が大きい條件になるわけですが、更に溯つて經驗者の本來の敎養がまた考慮

さるべき筈です。教養の高い者には幽靈を見るといふやうなことは少ないやうに思はれます。從つてそのやうな人達の體驗であれば、特に尊重さるべきでせう。併しまた精神現象には教養の程度とは逆である場合があります。頭腦が純眞で、單純で、自然性の深い人達に多く或は專ら感知されるといふ對象もあります。それ故にこれ等の點からして、何れをも捨てるべきではないのです。

幽靈談には、經驗者からの隔り、傳話經過の階級が大切な問題です。經驗者自身の談話又は筆錄である場合でも、作爲、修飾があり得るのは當然であり、よし其が、修飾のないものであつても、囘を重ねて話し傳へられ、其が樹枝狀に岐散して傳へられる間に、ますます變つて行くことは明らかなことです、そして其はますます作話らしく、類型的になつて行く場合が多いでありませうが、反對にますます眞實らしいものになることもあり得ます。この點も一概にはいへません。

德川時代後期の幽靈談について、種々の點から思ひつかれることは、江戸の市民達などには幽靈といふものに就て、一面に恐怖心がもたれ、一面に好奇心があり、後者は變態的な趣好にまで行つてゐたと思はれることです。也有の「妖物論」といふ俳文のうちに、『その正體の穿鑿は樂屋の見えて面白からず。たゞ理窟なき化物といふものこそ殊にゆかしけれ』とあります。正體の詮議などは野暮臭いことにして、たゞ面白く話したといふ一面があつたでせう。太平が續いて、文化の爛熟した御治世の市民達の語り草として、この類の怪奇が、經驗または經驗と詐稱されたものが喜ば

れたことは想像されます。當時の市民の教養の程度と、この時代相とを併せて考へるべきであると思はれます。

「耳袋」に前に出した「怨念なしともきめ難き事」といふ題で、儒生の見た仲町の妓女の幽靈の話があります。相當に價値があるやうにも思はれる話です。修飾も加はつてゐるやうですが、後日談などもあつて、筋の通つてゐる點などが、左樣に思はせます。併し、或は次のやうなものであつたかも知れません。卽ちこの若者は仲町の茶屋で遊蕩して、不圖その隣室が近頃評判になつてゐる部屋だといふことを聞き、其を覗いたりなんぞして歸り、得意で作り話を辯じたのではなからうかといふのです。

「耳袋」にはこの話の外に、なほ七話がありますが、價値が高いと思はれるものはありません。二つだけ出して置きます。

（一）房齊新宅怪談の事　文化の頃、下町にて房齊といへる菓子屋、色々存付の菓子を拵へ殊外はやりしが、數寄屋橋外へ同九年八月の頃引越して、召仕ひの小もの二階の戸をあけるに、半分明て、何分不明故、手に强く敲きて明るに明ず、右習を承り、何故かく手あらくいたし候や、損ずべしとて、亭主上りてあくるに、聊かとゞこほらず、又たてる時も外召仕ひ上りてあくるに不明、漸くして强くをしければあき

ぬ。あけの日又右戸明ざれば、嚴敷押て建ぬれば、戸袋の間より女壹人顯れ出て、右の男に組付く故、驚周章て突退しに消失ぬ。其明けの日、亭主二階にて、右召使一同見たるきのふ顯れし女のひとへ物、軒口に引張りありし故、取退んとするに消失ぬ。先に住ひしものもかゝる怪異ある故、房齊にゆづりしならんかと、人の語りぬ。

（二）上杉家明長屋怪異の事　上杉家の下屋舗や上屋敷や、名前も聞しが忘れたり。近頃の事なりし由、交替の節にや、交代長屋も多く塞りしに、相應の役格の者跡より登りて、其役相應の長屋無之、一軒相應の明長屋あれども、右長屋住居の者は、色々異變ありて、或は自滅し又は身分難立事抔出來て、退身などするとて、誰も住居せず、主人にも聞に入候程の事なり。然るに、右某は至て丈夫なりけるゆゑ、右長屋に住はん事を乞ひければ、其意に任せけるに、さしてあやしき事もなかりしが、或夜一人の翁出て、見臺にて書を見居たる前へ來りて着座なしけるを、ちらと見けれども、一向に見向もせず居たりしに、飛も騷らむ體をなしけるゆゑ、とつて押え、汝なに者なれば爰には來りしと申ければ、我は此所に年久敷住るものなり、御身爰にあらば爲あしかりなんと云けるゆゑ、大きにあざ笑ひ、我は此長屋主人より給りて住居なす、汝はいづ方よりの免しを請て住居なすやと申ければ、其答に差つまりしや、眞平ゆるし給へといふゆゑ、以來心得違不可致とて、膝をゆるめければ、かき消して失せぬ。扨二三日過て、屋敷の目付役なる者兩人連にて來り、主人の仰を請て來れり、面會可致旨ゆゑ、着用を改め其席へ出ければ、彼目附役申けるは、御自分事何々の不屆の節御聞に入、急度も可被付候得共、自分存念を以覺悟の儀は勝手次第の段申渡ければ、委細仰渡の趣奉畏候、用意の內暫時御拵可被下旨申越、勝手へ入て召仕へ申付、近邊に住居のものを急に呼寄、密に彼目附役を爲視しに、一向不見覺ものゝ由ゆゑ、左こそ有べきと、召仕どもへも申含、稀其他を爲持爲立忍、扨座敷へ出て、被仰渡之趣畏り候間切腹も可致候得ども、得と相考候得ば、一向

御尋之趣身に覺へなき事なり、委細其筋へ申立候上兎も角も可致、然る處我等は御在所より出て、各樣をも御見知不申、御屋敷內何方に住居有之、何年勤られ候や抔と尋ければ、我等主人の被仰渡を以て申渡に罷越候、餘事の答に不及趣申ける故、左あるべしと思ひて當屋敷案內の者を呼置たり、全紛者ゆるさじと、刀に手をかければ、兩人ともうろたへて逃出せしを、拔打に切ければ、手を負ひながら形ちを顯はし逃去りしが、供のものをも中間抔棒を以てたゝき倒しけるが、是もほう〳〵逃去りける。此後はたえて右長屋に怪異絕けるとなり。

兩話とも修飾が多分に加はつてゐることは明らかで、後話は作話のやうでもあるが、共に全く無根の話ではないやうに思はれます。前話の實際談はもつと眞實味のあるものであつたらうとも考へられます。後話はまた、念の入つた惡戲で、新來の田舍侍を威してやらうとして失敗した事件の一部のやうなものではあるまいか、とも思はれます。先頃の化物は實は誰々であつたなどといふ後日譚などが無かつたとも限りますまい。

「妖怪なしとも申し難き事」としてある、前掲の旅宿へ坊主の出た話は、狐狸のなす業ならんとしてあるのですが、本人には關係のないことですから、化物部屋の話として優秀なもので、本人が確かで、しかも直時の話の聞取りであることが貴重な點です。

化物屋敷といふ話は普通で、いまも時々耳にすることです。そして、その化物の正體といふものを見屆けたといふ話、化物は出なかつたといふ話も多くあります。其には、その家屋での異常な音

とか振動とかいふものと、そこでの既往の出來事が結びつけられたものが多くあります。前に申した、「藤村詩集」のことのあつた小石川の家には、納戸があつて、そこが化物部屋といはれてゐました。舊主人がその室で自殺したといふ話があり、そこの柱に髪の毛がついてゐたことがあるなどいふ話もありました。私は、その襖一重の隣室に一年ほどゐました。何か音でもするかと注意してゐましたが、何事もありませんでした。

家屋や建具の構造、其の細かい工合などで怪奇に思はれる音などの發すること、その他不思議に思はれるやうなことがあるのは自然で、其を氣にかければ、氣持がよくなく、恐怖感も起るわけです。そして其が異常な事件があつた家であるとすれば、其と結びつけられて、化物屋敷になるのは自然の筋道です。また何も不吉な既往事の無い場合には、反對な氣持ももたれるわけで、前に出した守信の書いてゐる持佛堂の話が、此の面白い一例です。

然らば化物屋敷なるものはあり得ないか。私はやはり無いとはきめ難きものと思ふのです。此の良い材料と思はれるものに、乃木希典將軍が學習院長時代に生徒達に話したといふ經驗談があります（明治四十二年）。何處でどんな席上での話か不明ですが、あの將軍が作り話をして聞かせたとは考へられません。其は次のやうなものであつたといひます。明治二年か三年頃、大將が二十餘歳の時、金澤に行つてゐて、一軒の空家を宿所にしました。朝出る時に、寢床を三階につくるやうにと

老婆に命じました。三階は眺望が良かつた故です。歸宅したら床は二階にとりましたと老婆がいひました。それで翌朝は、今夜三階にせよと更めて命じて出ました。歸宅したらまた二階にとつたといひます。面倒がつてゐるのであらうと思つて、その夜は强ひて三階まで運ばせて臥床しました。ところが、一睡したと思ふと、何ものか部屋に入つて來たやうな樣子でした。女の聲がして、蚊帳の上から顏をよせて、耳の邊りへ近づけようとする樣子。跳ね起きて見ると誰もゐません。さては夢であつたかと思ひ、また一寢入りすると、誰か入つて來た樣子でした。跳ね起きて見ると誰もゐません。一晩中襲はれて安眠を得ませんでした。翌晩もまた同じことがあつて、その次の晩からは、老婆が氣をきかして二階に床をとるまゝにそこで寢ることにしました。後から聞いたところによると、先代の時、妾が不義をしたので、三階にあけ、柱にしばりつけて、飢干にして殺したといふ事件があつて、幽靈が出るやうになつたのだといひます。

私は乃木將軍の話だといつて特別に尊重するわけではありません。直話であること、筋に飾りのないこと、そして將軍自身は既住の事件を知らなかつたといふ點に價値を認めるのです。また前に出した某工學士の電車内の幽靈の話を、私はこれ以上に重要視するのです。この經驗者は、幽靈といふことに無關心であり、死傷者が電車内に形を現らはすことがあるといふことは全然知らなかつたのであり、話の内容が如何にも自然であると思ふからです。

「耳袋」に、幽靈とはいはずに、奇物といつてゐる、次の一話があります。話す人によつては幽靈を見たといつたでありませう。

番町にて奇物に逢ふ事　予が一族なる牛奥氏壯年の折から、相番より急用申し來り、秋夜風雨强き時一侍を召連れ、番町馬場の近所を通りしに、前後往來絶える程の大雨にて、挑灯一つを吹消されじと桐油の陰にして通りしに、道の側に女子と見えてうづくまり居りしが、合羽樣のものを着、傘笠の類も見えず、確と女とも見えず、合點行かざる樣子故、右の際を行き過ぎしに、召連れたる侍、あれは何ならん得と見申すべき哉と言ひしが、いらざるものゝ由を答へしに、折節挑灯を持ちたる足輕使脉の者兩人脇道より來る故、右の跡に付元來し道へ立戻り、かの樣子を見んとせしに、始見し所に何にても見えず、四方打はれたる道なれば、何方へ行くべきやうもなしとて口ずさみ通りしが、歸りて門へ入らんとせし頃頻りに寒氣せしが、翌日より瘧を煩ひ、廿日程惱みしが、召連れし侍も寒氣して熱病を廿日煩ひけるとや。瘴癘の氣の雨中に形容をなしたるならん。

二人で見たといふのですから、何か實體があつたに相違ないとしてよいでせう。足輕體の者に遇つて、其から引かへして行つて見たといふのですから、居なくなつてゐたことも確かです。恐らく人間であつたでせう。惡寒と發熱はマラリアの發作として說明が出來ます。江戸には當時マラリア患者が相當多數にありました。マラリアはしばしば再發するのが特徵です。秋夜風雨の强い晩に歩

き廻はり、こんな事のあつた後などは、再發發作の來ることの最も多い場合です。マラリアといふ名は語原的に惡氣、卽ち瘴癘の氣といふことです。

亡靈が形を現らはすものといはれてゐる現象に、人魂の火があります。墓地の雨の夜に人魂の火が動くなどいふ類の話は誰もが聞いてゐることです。實見したといふ人は存外少ないやうですが、此がある、或はあるだらうといふ考は多くの人達の頭にあり、更めて考へてみることはせず、否定もしてゐないといふ態度が一般であるやうに思はれます。河や沼の畔などで塊狀の火の游動するのを見たといつて、其を人魂だといひ、鬼火などといふ類の話も多くあります。また特に死亡者のあつた場合に、屋上に火の玉を見たとか、其が動き去つたとかいふやうな話がいろいろあります。「耳袋」も次の一話を載せてゐます。

人魂の起發を見し物語りの事　日野豫州、若輩の時、同人家來久數煩ひて、全快すべき體にあらず、側向を勤、したしく遣ひけるゆゑ、長屋へも尋ねたる事ありしが、或時馬場へ出て、暮過に外家來を召連れ、彼煩ふ家來の事抔尋ねてかへりけるに、右煩ふ家來の長屋門口に、吸殼よりは少し大きく、ろうそくの眞を切りしといふべき火落てあるゆゑ、火の元の不宜、ふみ消候へといゝしが、見るが內に、右の火一二尺程づつ登り下りして、無程軒口程に上りければ、茶椀ほどに大きくなりしが、何となく身の毛よだつ樣なれば、內へ立歸りしが、果して其夜彼家來身まかりしと、豫州かたりぬ。

人魂といへば、普通は夜間に光るもののことになつてゐるのですが、薄明に光のない塊體をなし

て現らはれるものにも、人魂といはれたものがあるやうです。「耳袋」にこの類の話が一つあるから出して置きます。

人魂の事　或人葛西とやらんへ釣に出しが、釣竿其外へ夥しく蚋といへる虫の立集りしを、かたへにありし老叟の言へる、此邊へ人魂の落ちしならん、夫故に此虫の多く集りぬると言ひしを、予が知れる者、是も又拂曉に出て釣をせしが、人魂の飛來りてあたりなる草むらの内へ落ちぬ。如何なるものや落ちしと其所へ至り、草などかき分け見しに、泡たちたるもの有りて臭氣もありしが、間もなく蚋となりて飛散りし由。老叟の言ひしも僞ならずと語りぬ。

この話によると、蚋の集まる人魂といふものがあるらしく、また其は游動するものでもあるらしいのです。興味のあるものですが、私には、思ひ當るものがありません。

夜間に見ゆる塊狀の光るものに關する怪異談には可なり多種のものがあります。それ等は特殊な群をなして現らはれるものと、單獨乃至數個であるものとに大別されます。有名な筑紫の海の不知火が前者の代表的なもので、諸國で狐火といはれるものも此です。これ等に就ては玆では略さして貰ひます。

人魂、鬼火などといふ類のものの本體を考へるには、人間の視覺の側と、發光體の側と双方の途から入らねばなりません。先づ發光體からいへば、可燃性の輕いガスの、種類があります。暗所で發

光する燐のやうな物質があります。晝間日光を吸收すれば夜間に其を放散するものもあり、ラヂウム時計と俗にいふものは誰も見てゐます。そして、沼澤の火の玉などといふものの本體についてメタンガスだといはれ、人魂については燐であるとよくいはれます。メタンガスは汚ない水邊などに豐富にあるもので、燃える時の光なども說明に都合がよいものです。しかし前にもいつたやうに、メタンガスが空中に出たとして、其が如何して燃えるのか。メタンガスは發火性のものではありません。單に可燃性のものなのです。地上から或は水面から涌出し、發生するガス體には種々のものがあり得ます。現に其が著明に出る箇所も少なくなく、名所になつてゐるのもあります。油田からガスが噴出をすることも周知であり、天然ガスの自動車は街頭を走つてゐます。可燃性のガスに就ての研究はどこまで進んでゐるか私は承知しませんが、さまざまのものがあるでありませう。といつて、此だけでは人魂や鬼火の說明には役に立ちません。此にはたゞ可燃性といふのではなく、空中で發光するか、或は溫度其他の輕度の變化で燃燒するもので、空中で塊團をなすガス體が知られることが必要なのです。現在知られてゐる涌出ガスにはこのやうなものは無いやうです。その本質を自然界で發生する何かのガスと想像されるとすれば、右のやうな性質のガスがあるだらうかといふ考へで進まねばならぬのです。

墓地や骨捨場などで燐が火の玉になつて游動するといひます。深くは考へないで、このやうに思

つてゐる人は多いでせう。さて燐の性質はどんなかといふに、融點が四四度、沸點が二九〇度、發火溫度は六〇度です。このやうなものが空中に浮動して火を發するでせうか。さてまたその燐が、そのやうな箇所にどれだけ有り得るものでせうか。人魂といふことに就て、屍體からのものと考へられるのですから、人體にはどれだけの燐が含まれてゐるかが先づ要點になります。高等動物の體を構成してゐる元素は約二〇種あつて、含有率に於て燐は第六位で、酸素が六五・〇%、炭素が一八・〇%、水素が一〇・〇%、窒素が三・〇%、カルシウムが二・〇%、燐がその次で一・〇%とされてゐるのです。この一%の燐はそのまゝの燐として存在するのではなく、化合物になつてゐるのです。墓地に何年、何十年の間に幾何の屍體が埋められたにせよ、空中に浮動するほどの——浮動するものとして——燐がそこに集積されるわけはない筈です。

人魂は燐の火だといふ普通の話は、別段考へはせずにいつてゐることなのですが、化學的の說明もされてゐます。其は、人體、特に腦や脊髓には燐がある。屍體で其が分解して燐化水素（フォスフィン）が生じます。一方では蛋白質などから硫化水素が生じます。此等の兩者が作用すると淡藍色の焰を出して燃えます。此が人魂、鬼火であるといふ說明です。此で人魂、鬼火の科學的說明が一つ出來たやうに思はれます。併し此は、このやうな化學現象があり得るといふことであつて、人魂、鬼火の說明としては、屍體まで溯らねばなりません。そこで腦の成分をみると、此には多量の

水分がある。成人の灰白質では八三乃至八四%が水です。その固形物は蛋白質、脂質及び無機物で、其の五〇%以上が蛋白質です。その蛋白質のうちで核蛋白質が最も多く燐を含有してゐますが、其は〇・五%です。此が腦の主要な部分です。計算は略しますが、こゝまで考へて來ると、この說明も眞實性が薄すれて來るわけです。

發光體として注目すべきものが生物界にもあります。螢や夜光蟲のやうな周知のものの外に、海濱などでは節足動物などで發光するのが普通に見られます。發光魚もあります、併しこゝで問題にしてゐるのは、空中に見えて動くもの、そして其が相當の大きさをもつものです。錯覺で大きく見えたといふことはあるにしても、螢火位の大きさのものを人魂、鬼火と考へるといふことはないとすべきです。

發光する茸があります。樹木に生じて發光する種類です。わが國では月夜茸がこの例で、學名をPleurotus japonicusといひます。「ぶな」の類の枯れたものに生える、椎茸に似て、其の二倍程の大きさの毒茸です。數箇が群生して、裏面の襶全部が光り、ほゞ一定の光度を保つて數日間續けて光り、徐々に光らなくなるさうです。私には經驗がありませんが、夜間に人を驚かすといふことです。光は白色。此は空中であるが、動きません。

發光バクテリアがあります。肉眼的の集落を作ると暗所で光を發するのが見えます。腐つた肉塊などに一面に異常に繁殖した場合には、燐火體として見ゆる場合もあり得るわけです。例へば死んだ魚の全體表に此が繁殖して海岸に在つた場合に、溺死者の人魂が波打際を浮動してゐたといふやうな話の種にはなるわけです。溺死人のあつた直後などならば、驚いたり、評判になつたりもするでせう。しかし此が空中で浮動するといふことはあり得ないわけです。そこで此を巧みに説明して、夜間に鳥がその魚をもつて飛ぶこともあらう、といふやうにもいはれます。無いこととはいへないが、自然らしくありません。

さて次に視る人の側から考へてみると、幻視と網膜遺像などが考へられます。人魂、鬼火の場合には專ら後者が問題です。暗所で突然明光が見えて直ちに消失した場合に、しばらくの間其が見えてゐるやうに感じ、なほ其が種々に變化して、動いたり、大きくなつたり、特殊な形のものに感じられたりすることがあります。この光體の遺像の現象はしばしばあることです。人魂、鬼火といはれたものには、この類のものがあつたらうと考へてよいでせう。前掲の、人魂の起發を見たといふ、日野豫州の話は、この遺像ではないかと思はれます。そして其と家來の死亡との偶合でありませう。程なく軒口程に上つたといふのは、自身の眼が足もとから常位に復したのだとも疑はれるわけです。人魂や鬼火といふ話が悉く空虛なものでないことはいふまでもありません。或るものは人工の火

が誤まられたものであり得ます。或るものは網膜遺像の類であり得ます。發光生物の場合もありませう。しかしまだその本體が吾々に想像されて居らぬもののあることも考へられるべきです。現在所有してゐる知識だけで其を決めてしまふのは、非科學的な態度です。其を十把一絮げに形付けようとするなどは間違ひです。どこまでも突き進めて考へて行かねばなりません。

偶然又は稀有のことではなく、しばしば或は定期的に、そして地域的に限定されて、同樣な形體として見られるといふ、怪火の話が少なくありません。それには、土地の名物のやうになつて居るのがあり、恐れられてゐるのがあり、また神祕的にされて、龍神のお燈明などといはれ、日を定めて昇るといふ風にいはれて、信仰を伴なつてゐる類のものがあります。守信は、遠州での話を一つと、箱根の宿の話を一つ出してゐて、兩方とも天狗火とされてゐます。

(一)秋葉の魔火の事　駿遠州へ至りし者の語りけるは、天狗の遊び火とて遠州の山上には夜に入り候へば時々火燃えて遊行なす事あり。雨など降りける時は川へ下りて水上を遊行なす。是を土地の者は天狗の川狩に出たるとて、殊の外愼みて戸などをたてける事なる由。いかなるものなるや。御用にて彼地へ至りし者、其外予が召使ひし遠州の產など、語りしも同じ事也。

(二)鬼火の事　大御番の在番に箱根宿に泊り、夏のことなれば、同勤の面々旅宿に打寄て、酒抔給べて凉み居たりしに、向なる山より壹つの火丸く中にあがりけるを見付、あれは何ならんと人々不審しける

に一二つにわかれ又飛廻り、或は集り又は幾つにもわかれぬるを興じけるに、やがて此方へ來るやうなれば、人々驚きて、何ならんと高聲に語り合けるに、旅宿の男聞付て、早々座敷へ出、疾々這入給ふべし、後には害もあるなりと、殊外恐れ、早々に戸扨たてける故、何れもなむとなく怖しくなりて、内に入りけるとぞ、天狗火などいふものならんと、石川翁かたりぬ。

これ等は、土地の人達には信じられて居るもののやうで、現地で他鄕人も見てゐるのですから、よほど確かなものと思はれます。實體は何か、想像もつけかねます。

なほ他から二つの記事を引用して置きたく思ひます。第一は「北越雪譜」の龍燈の記事です。筆者は越後魚沼の鈴木牧之で、書名が雪に關する書のやうに思はせますが、此が主になつてゐるだけで、一種の隨筆です。さすがに雪と雪中生活の記事は獨自のものですが、その他にも自然科學的な項目があります。山頂や山腹に鎭座の社や寺や堂に、平地からお燈明があがるといふことは、あちこちでいはれることで、多くは毎年その日が定まつてゐるとされてゐます。此等に關する記事も少なくありませんが、其の本體を考へる手がゝりになるやうな内容のものは至つて少數です。牧之のこの文は、記事が詳しくて面白く讀まれ、修飾がなく、相當はつきりと記述されてゐて、貴重な資料と思はれます。

我國甄城郡米山の麓に醫王山米山寺は和銅年中の創草なり、山のいたゞきに藥師堂あり、山中女人を禁

ず。此米山の麓を米山嶺とて越後北海の驛路なり、此邊古跡多し、余先年其古跡を尋んとて下越後にあそびし時、新道村の長飯塚知義の話に、一年夏の頃 雫(あまさひ) の爲に村の者どもを從へ米山へのぼりしに、藥師へ參詣の人山こもりするために御鉢といふ所に小屋二つあり、その小屋へ一宿しゝに、是日は六月十二日にて、此御鉢といふ所へ龍燈のあがる夜なり。おもひまうけずして龍燈をみる事よとて人々しづまりをりしに、酉の刻ともおもふ頃、いづくともなくきたりあつまりしに、大なるは手鞠の如く、小なるは鷄卵の如し、大小ともに此御鉢といふあたりをさらずして、飛行する事あるひはゆるやかに、あるひははしる。そのさま心ありて遊ぶが如し、其光は螢火の色に似たり、つよくも光り、よはくもひかるあり。舞ひめぐりてしばらくはとゞまるはなく、あまたありてかぞへがたし。はじめより小やの入り口を閉、人々ひそまりて覗ゐたれば、こゝに人ありともおもはざるやうにて、大小の龍燈二ツ三ツ小屋のまへ七八間さきにすすみきたりしを、かれがひかりにすかしみれば、形ち鳥のやうに見えて光は咽の下より放つやうなり。猶近くよらばかたちもたしかに視とゞけんとおもひしに、ちかくはよらずしてゆるやかに飛めぐれり。此夜は山中に一宿の心得なれば用心の爲に筒をも持せしに、手たれの上手しかも若ものなりしが光を的にうたんとするを、老人ありて、やれまてとおしとゞめ、あなもつたいなし、此龍燈は龍神より藥師如來へさゝげ玉ふなり、罰あたりめと叱りたる聲に、龍燈はおどろきたるやうにて、はるか遠く飛びさりしと、知義語られき。

知義といふ人物の素性が明らかでないが、相當に信用すべき話のやうです。

龍燈の話には、望遠鏡で見たら格子が見えて、麓の百姓家の焚火であつたとか、登山者の提灯であつたとかいふ話もあり、そのやうな類の場合も少なくないことと思はれますが、まだ誰もが考へ